

奈良県桜井市

纏向遺跡発掘調査報告書 2

—— メクリ地区における古墳時代前期墳墓群の調査 ——

2009. 3. 30

桜井市教育委員会

桜井市立埋蔵文化財センター
発掘調査報告書第32集

奈良県桜井市

纏向遺跡発掘調査報告書 2

——メクリ地区における古墳時代前期墳墓群の調査——

2009. 3. 30

桜井市教育委員会

序

私達の桜井市は大和平野の東南部に位置し、市域の約2割を占める平野部の中央には山地より流れ出る粟原川、寺川、初瀬川、巻向川等の清流を集めた大和川がほぼ東西に横断し、この大和川を挟んで南は茶白山古墳をはじめとしてメスリ山古墳、安倍寺、上之宮遺跡、坪井・大福遺跡、北では芝遺跡、箸墓古墳、纏向遺跡など全国的にも貴重な文化遺産が数多く知られています。

桜井市ではこれらの遺跡を保護し、啓発するための事業の一つとして市内遺跡の調査・保存に力をいれておりますが、ここに報告させて頂くのは昭和54～62年度に桜井市教育委員会が国・県よりの補助を受けて実施した纏向遺跡メクリ地区の調査報告であります。

現地調査にあたりまして指導・助言を頂いた多くの関係機関の方々、地主及び地元協力者の方々、厳寒・酷暑のなか作業に従事して頂いた作業員・学生諸君、遺物の整理・報告書の作成に協力頂いた整理員の方々に深く御礼申し上げます。

この多くの皆様の御協力のもとに成った本書が文化財の普及・啓発の一助となり、また研究者の方々の資する所となれば当委員会としても望外の喜びであります。

平成21年3月30日

桜井市教育委員会
教育長 雀部 克英

例 言

1. 本書は昭和54～62年度にかけて桜井市教育委員会が実施した桜井市大字辻・太田所在の旧纏向小学校用地の遺跡範囲確認調査報告書である。調査は6次と長期にわたって行なわれ、出土遺物も膨大な量にのぼることから遺物整理の関係上、報告書の作成は遺構の種類ごとに行なうこととし、今回は墳墓編として古墳時代前期の墓を中心に報告を作成している。
2. 本報告書の作成にあたっては平成19・20年度の国・県による補助事業の採択を受けており、桜井市立埋蔵文化財センターにおいて調査資料の再整理と報告書の作成を行ったものである。
3. 記録による調査期間・体制は以下のとおりである。纏向遺跡の調査の中でも比較的初期の調査であり、記録を完全に確認できなかった部分もある。遺漏もあると思われるが御容赦願いたい。
なお、所属はいずれも調査当時のものである。

【昭和54年度 纏向遺跡第23次調査（旧小学校第1次）】

調査機関：桜井市教育委員会 教育長 西村司、教育次長 梅咲善之助、社会教育課長 吉川益弘、
社会教育係長 渡辺実恵、社会教育係技師 萩原儀征、主事 森口治

調査担当：桜井市教育委員会社会教育課社会教育係技師 萩原儀征
奈良県立橿原考古学研究所技師 寺沢薫（県より派遣）

調査期間：昭和54年7月20日～昭和54年9月13日

調査補助員：八尾博之（大阪市立大学）、山田隆一（関西大学）、仲川道興（皇學館大学）、小住昌子（同志社大学）、長尾まゆ子・藤田至希子・中村憲代（奈良大学）、平井潤子・高倉薫（奈良文化女子短期大学）、高木剛・杉本源造（花園大学）、安田昭・石橋源一郎・吉田真祐美・西口圭介（立命館大学）

調査作業員：沢徳造、北村寅彦、北西藤一郎、堀井甚五郎、藤本ミサオ、嶋岡道子

【昭和55年度 纏向遺跡第27次調査（旧小学校第2次）】

調査機関：桜井市教育委員会 教育長 西村司、教育次長 嶋岡一郎、社会教育課長 渡辺実恵、
文化財係係長 萩原儀征、主事 新屋敷啓順

調査担当：桜井市教育委員会社会教育課文化財係 萩原儀征

調査期間：昭和55年7月21日～昭和56年3月31日

調査補助員：小住昌子（同志社大学）、中村憲代（奈良大学）、安田昭・山田清朝（立命館大学）、
中山靖雄（大阪体育大学）、羽田佳代（神戸商科大学）、長峯浩子（神戸大学）

調査作業員：北西藤一郎、堀井甚五郎、藤本ミサオ、嶋岡道子、植田光雄、植西キヨ、
中森義雄、堀内カズエ

【昭和56年度 纏向遺跡第31次調査（旧小学校第3次）】

調査機関：桜井市教育委員会 教育長 西村司、教育次長 嶋岡一郎、社会教育課長 石本喜代次、
文化財係係長 萩原儀征、主事 新屋敷啓順、臨時職員 村社仁史、

調査担当：桜井市教育委員会社会教育課文化財係 萩原儀征・村社仁史

調査期間：昭和57年1月25日～昭和57年3月31日

調査補助員：山田清朝・桜庭裕和・伊庭功（立命館大学）、狩田恭弘（桃山学院大学）、
仲野和正（近畿大学付属高校）

調査作業員：堀井甚五郎、藤本ミサオ、嶋岡道子、植田光雄、植西キヨ、中森義雄、北西利子、
辻綾子、辻和子、堀内和江、堀内安子

【昭和57年度 纏向遺跡第33次調査（旧小学校第4次）】

調査機関：桜井市教育委員会 教育長 西村司、教育次長 嶋岡一郎、社会教育課長 石本喜代次、
文化財係係長 萩原儀征、主事 新屋敷啓順、臨時職員 村社仁史

調査担当：桜井市教育委員会社会教育課文化財係 萩原儀征・村社仁史

調査期間：昭和57年6月29日～昭和57年7月20日

【昭和61年度 纏向遺跡第47次調査（旧小学校第5次）】

調査機関：桜井市教育委員会 教育長 外嶋尚春、教育次長 坂本昌弘、社会教育課長 内藤新治、
文化財係係長 萩原儀征、主任 松田有司、技師 清水眞一

調査担当：桜井市教育委員会社会教育課文化財係 萩原儀征

調査期間：昭和61年5月7日～昭和61年12月25日

調査補助員：木場幸弘、迫（龍谷大学）、油良昭男（大阪工業大学）、中村麻里子、
福島有美（平安女学院短期大学）

【昭和61～62年度 纏向遺跡第48次調査（旧小学校第6次）】

調査機関：桜井市教育委員会 教育長 外嶋尚春、教育次長 坂本昌弘、社会教育課長 小山剛、
文化財係係長 萩原儀征、主任 清水眞一、主事 森田悦弘、

調査担当：桜井市教育委員会社会教育課文化財係 萩原儀征

調査期間：昭和61年10月～昭和62年6月1日

調査補助員：木場幸弘、福島有美（平安女学院短期大学）、油良昭男・中西（大阪工業大学）、
中村麻里子、青木久子

4. 調査協力者：報告書作成を通じて以下の方々にご指導、御協力を頂いた。記して感謝いたします。
（所属は現在の所属。敬称略）

石野博信（香芝市二上山博物館）、寺沢薫・関川尚功・西藤清秀（奈良県立橿原考古学研究所）、
福宜田佳男（文化庁記念物課）、木場幸弘（高取町教育委員会）、菊谷俊介（〔株〕土舞台）、奥田
尚（奈良県立橿原考古学研究所共同研究員）、金原正明（奈良教育大学）

5. 整理作業及び報告書の作成：調査資料の整理と報告書の作成は以下の体制で行ない、桜井市教育
委員会文化財課 橋本輝彦と橋爪朝子がこれを担当した。

【平成19年度】

桜井市教育委員会 教育長 石井和典、事務局長 森北好則、事務局次長 瀬川憲嗣、
文化財課長 森幹雄、主幹 北浦良郎、主任 橋本輝彦・松宮昌樹、技師 福辻淳・
丹羽恵二、臨時職員 木場佳子・橋爪朝子・岩城圭吾、日々雇用職員 堤野真依・
西岡恵美

【平成20年度】

- 桜井市教育委員会 教育長 雀部克英、事務局長 瀬川憲嗣、事務局次長 松田清吾、
文化財課長 竹田勝彦、主幹 北浦良郎、主任 橋本輝彦・松宮昌樹・福辻淳、
技師 丹羽恵二、臨時職員 木場佳子・橋爪朝子・福家恭、日々雇用職員 西岡恵美
6. 整理作業員：今回の遺物・資料整理にあたった整理員は以下の通りである。
大西里佳、北平太恵子、西田千秋、井ノ本奈津子、北畑陽子、畠田真弓、
松田澄枝
7. 本書所収の写真のうち遺構写真は各担当者が撮影を行い、遺物写真は橋本が撮影を行なった。
8. 本書で使用した方位のうち、5・6次調査は日本測地系による数値を示し、レベル高は海拔高を示す。他の1～4次調査については任意の地区設定によるものである。
9. 執筆者：本書の執筆は調査記録をもとに担当者に確認、聞き取り作業を行いつつ橋本がこれを担当した。
10. 編集者：本書の編集は橋本と橋爪が協議してこれを担当した。
11. 出土遺物をはじめ調査記録一切は桜井市教育委員会の管理のもと、桜井市立埋蔵文化財センターにおいて保管している。活用されたい。

目 次

序

例言

目次

第1章. はじめに

第1節. 調査にいたる経緯と経過	1
第2節. 報告書作成の経緯と経過	7

第2章. 位置と環境

第1節. 地理的環境	9
第2節. 歴史的環境	10
(1) 桜井市域の遺跡	10

第3章. 発掘調査報告

第1節. 調査の方法と層序	19
(1) 調査の方法と層序	19
(2) 調査区の地区設定について	19
第2節. 検出された遺構	25
(1) 土器棺墓	25
1 土器棺墓 1	25
2 土器棺墓 2	27
(2) 木棺墓	29
1 木棺墓 1	29
2 木棺墓 2	32
3 木棺墓 3	34
4 木棺墓 4	35
(3) 方形周溝墓	37
1 方形周溝墓 1	37
2 方形周溝墓 2	41
3 方形周溝墓 3	46
(4) メクリ1号墳	59
1 はじめに	59
2 墳丘	59
3 周濠	59
4 遺物の出土状況	65
(1) 後方部北側周濠	65
(2) 後方部西側周濠	66

(3) クビレ部・前方部西側周濠	73
(4) 前方部前面周濠	77
5 足跡状遺構	77
6 出土遺物	77
(1) 木製品	78
(2) 土器	79
(3) 石製品	98
7 築造時期	99
第4章. まとめ	
(1) メクリ1号墳の築造規格とその構造	135
(2) メクリ地区墳墓群の位置付け	137
あとがき	139
報告書抄録	

挿 図 目 次

図1 調査トレンチ配置図 (1/10,000)	2
図2 遺構配置図 (1/400)	5、6
図3 桜井市の位置	9
図4 桜井市の地質	9
図5 縦向遺跡メクリ地区と周辺の遺跡 (1/25,000)	12
図6 調査地地区割図 (1/400)	21、22
図7 古墳時代前期の墳墓の分布 (1/250)	23、24
図8 土器棺墓1 平・断面図 (1/10)	25
図9 土器棺墓1 (1/3)	26
図10 土器棺墓2 平・断面図 (1/10)	27
図11 土器棺墓2 (1/3)	28
図12 木棺墓1 棺蓋材検出状況 (1/10)	30
図13 木棺墓1 棺内完掘状況 (1/10)	31
図14 木棺墓1 出土土器 (1/3)	32
図15 木棺墓2 棺蓋材検出状況及び棺内完掘状況 (1/20)	33
図16 木棺墓3 平・断面図 (1/10)	34
図17 木棺墓3 出土ガラス小玉 (1/1)	35
図18 木棺墓4 平・断面図 (1/20)	35
図19 木棺墓4 出土土器 (1/3)	36
図20 7H-22J区包含層出土 鏡形土製品 (1/1)	37
図21 方形周溝墓1 平面図 (1/80)	38

図22	方形周溝墓 1	周溝及び土坑断面図 (1/20)	38
図23	方形周溝墓 1	東北辺周濠遺物出土状況 (1/20)	39
図24	方形周溝墓 1	出土土器 (1/3)	40
図25	方形周溝墓 2	3 平面図 (1/80)	41
図26	方形周溝墓 2	周溝断面図 (1/20)	42
図27	方形周溝墓 2	遺物出土状況割付図 (1/100)	42
図28	方形周溝墓 2	周溝南東コーナー部遺物出土状況 (1/20)	43
図29	方形周溝墓 2	南辺周溝遺物出土状況 (1/20)	43
図30	方形周溝墓 2	出土土器 1 (1/3)	44
図31	方形周溝墓 2	出土土器 2 (1/3)	45
図32	方形周溝墓 3	周溝断面図 (1/20)	47
図33	方形周溝墓 3	遺物出土状況割付図 (1/100)	48
図34	方形周溝墓 3	溝25遺物出土状況図 1 (1/20)	48
図35	方形周溝墓 3	溝25遺物出土状況図 2 (1/20)	48
図36	方形周溝墓 3	溝25出土木炭 (1/1)	48
図37	方形周溝墓 3	溝29上層遺物出土状況 (1/20)	49
図38	方形周溝墓 3	溝29下層遺物出土状況 (1/20)	50
図39	方形周溝墓 3	溝29上層遺物出土状況 (1/20)	51
図40	方形周溝墓 3	溝29下層遺物出土状況 (1/20)	51
図41	方形周溝墓 3	溝25出土土器 1 (1/3)	52
図42	方形周溝墓 3	溝25出土土器 2 (1/3)	53
図43	方形周溝墓 3	溝29出土土器 1 (1/3)	54
図44	方形周溝墓 3	溝29出土土器 2 (1/3)	55
図45	方形周溝墓 3	溝29出土土器 3 (1/3)	56
図46	方形周溝墓 3	溝29出土土器 4 (1/3)	57
図47	方形周溝墓 3	溝29出土砥石 (1/4)	58
図48	メクリ 1 号墳平面図 (1/200)		60
図49	メクリ 1 号墳周濠断面図 1 (1/20)		62
図50	メクリ 1 号墳周濠断面図 2 (1/20)		63
図51	メクリ 1 号墳周濠断面図 3 (1/40)		64
図52	メクリ 1 号墳前方部前面遺構の切り合い詳細図 (1/80)		65
図53	メクリ 1 号墳遺物出土状況割付図 (1/400)		66
図54	メクリ 1 号墳後方部北側周濠 (溝 1) 遺物出土状況 1 (1/20)		67
図55	メクリ 1 号墳後方部北側周濠 (溝 1) 遺物出土状況 2 (1/20)		68
図56	メクリ 1 号墳後方部北側周濠 (溝 1) 遺物出土状況 3 (1/20)		68
図57	メクリ 1 号墳後方部北側周濠 (溝 1) 遺物出土状況 4 (1/20)		69
図58	メクリ 1 号墳後方部西側周濠 (O-15溝) 遺物出土状況 (1/20)		70

図59	メクリ1号墳後方部西側～前方部西側周濠(溝13)遺物出土状況(1/40)	71、72
図60	メクリ1号墳前方部西側周濠(溝13)遺物出土状況(1/20)	73
図61	メクリ1号墳前方部前面周濠遺物出土状況(1/40)	74
図62	メクリ1号墳周濠内検出足跡(1/100)	75、76
図63	メクリ1号墳溝1出土木製品(1/1)	78
図64	メクリ1号墳出土土器1(1/3)	81
図65	メクリ1号墳出土土器2(1/3)	82
図66	メクリ1号墳出土土器3(1/3)	83
図67	メクリ1号墳出土土器4(1/3)	84
図68	メクリ1号墳出土土器5(1/3)	85
図69	メクリ1号墳出土土器6(1/3)	86
図70	メクリ1号墳出土土器7(1/3)	87
図71	メクリ1号墳出土土器8(1/3)	88
図72	メクリ1号墳出土土器9(1/3)	89
図73	メクリ1号墳出土土器10(1/3)	90
図74	メクリ1号墳出土土器11(1/3)	91
図75	メクリ1号墳出土土器12(1/3)	92
図76	メクリ1号墳出土土器13(1/3)	93
図77	メクリ1号墳出土土器14(1/3)	94
図78	メクリ1号墳出土土器15(1/3)	95
図79	メクリ1号墳出土砥石(1/4)	96
図80	メクリ1号墳出土砥石・摺石(5～7は1/2、8・9は1/4)	97
図81	メクリ1号墳前方部前面周濠出土砥石(1/2)	98
図82	メクリ1号墳の墳丘規格(1/200)	136

写真目次

写真1	ネーミングの様子	8
写真2	接合・復元作業の様子	8
写真3	実測作業の様子	8
写真4	図面浄書の様子	8
写真5	昭和54年撮影の纏向遺跡北半の様子(上が北)	17
写真6	昭和54年撮影の纏向遺跡南半の様子(上が北)	18

表目次

表1	纏向遺跡メクリ地区出土土器観察表(1)	100
----	---------------------	-----

表2	縦向遺跡メクリ地区出土土器観察表 (2)	101
表3	縦向遺跡メクリ地区出土土器観察表 (3)	102
表4	縦向遺跡メクリ地区出土土器観察表 (4)	103
表5	縦向遺跡メクリ地区出土土器観察表 (5)	104
表6	縦向遺跡メクリ地区出土土器観察表 (6)	105
表7	縦向遺跡メクリ地区出土土器観察表 (7)	106
表8	縦向遺跡メクリ地区出土土器観察表 (8)	107
表9	縦向遺跡メクリ地区出土土器観察表 (9)	108
表10	縦向遺跡メクリ地区出土土器観察表 (10)	109
表11	縦向遺跡メクリ地区出土土器観察表 (11)	110
表12	縦向遺跡メクリ地区出土土器観察表 (12)	111
表13	縦向遺跡メクリ地区出土土器観察表 (13)	112
表14	縦向遺跡メクリ地区出土土器観察表 (14)	113
表15	縦向遺跡メクリ地区出土土器観察表 (15)	114
表16	縦向遺跡メクリ地区出土土器観察表 (16)	115
表17	縦向遺跡メクリ地区出土土器観察表 (17)	116
表18	縦向遺跡メクリ地区出土土器観察表 (18)	117
表19	縦向遺跡メクリ地区出土土器観察表 (19)	118
表20	縦向遺跡メクリ地区出土土器観察表 (20)	119
表21	縦向遺跡メクリ地区出土土器観察表 (21)	120
表22	縦向遺跡メクリ地区出土土器観察表 (22)	121
表23	縦向遺跡メクリ地区出土土器観察表 (23)	122
表24	縦向遺跡メクリ地区出土土器観察表 (24)	123
表25	縦向遺跡メクリ地区出土土器観察表 (25)	124
表26	縦向遺跡メクリ地区出土土器観察表 (26)	125
表27	縦向遺跡メクリ地区出土土器観察表 (27)	126
表28	縦向遺跡メクリ地区出土土器観察表 (28)	127
表29	縦向遺跡メクリ地区出土土器観察表 (29)	128
表30	縦向遺跡メクリ地区出土土器観察表 (30)	129
表31	縦向遺跡メクリ地区出土土器観察表 (31)	130
表32	縦向遺跡メクリ地区出土土器観察表 (32)	131
表33	縦向遺跡メクリ地区出土土器観察表 (33)	132
表34	縦向遺跡メクリ地区出土土器製品観察表	132
表35	縦向遺跡メクリ地区出土ガラス小玉観察表	133
表36	縦向遺跡メクリ地区出土木製品観察表	133
表37	縦向遺跡メクリ地区出土土器製品観察表 (1)	133
表38	縦向遺跡メクリ地区出土土器製品観察表 (2)	134

図 版 目 次

- 図版1 纏向遺跡メクリ地区
纏向遺跡全景（北西より）
調査地と周辺の様子
(第31次調査時撮影)
- 図版2 纏向遺跡メクリ地区
第23次調査 調査区全景（東から）
第23次調査 調査区全景（南東から）
- 図版3 纏向遺跡メクリ地区
第27次調査 調査区全景（南東から）
第27次調査 調査区全景（西から）
- 図版4 纏向遺跡メクリ地区
第31次調査 調査区全景（南から）
第31次調査 第2トレンチ全景
(東から)
- 図版5 纏向遺跡メクリ地区
第48次調査 調査区全景（南から）
第48次調査 調査区全景（上が南）
- 図版6 纏向遺跡メクリ地区
第23次調査 第1トレンチ全景
(東から)
第27次調査 第1トレンチ全景
(西から)
- 図版7 纏向遺跡メクリ地区
第31次調査 第2トレンチ全景
(西から)
第47次調査 調査区全景（西から）
- 図版8 纏向遺跡メクリ地区
第47次調査 調査区全景（北から）
第48次調査 調査区全景（東から）
- 図版9 纏向遺跡メクリ地区
土器棺墓1 土器棺検出状況（北から）
土器棺墓1 棺蓋取り上げ後の様子
(北から)
- 図版10 纏向遺跡メクリ地区
土器棺墓1 完掘状況（北から）
土器棺墓1と周辺の遺構（北から）
- 図版11 纏向遺跡メクリ地区
土器棺墓2 土器棺検出状況（東から）
土器棺墓2 完掘状況（東から）
- 図版12 纏向遺跡メクリ地区
木棺墓1 棺蓋上埋土の様子（北から）
木棺墓1 棺蓋上土層断面 a - a'
(東から)
- 図版13 纏向遺跡メクリ地区
木棺墓1 b - b' 西半棺蓋上埋土
堆積状況（南から）
木棺墓1 b - b' 東半棺蓋上埋土
堆積状況（南から）
- 図版14 纏向遺跡メクリ地区
木棺墓1 棺蓋検出状況（北から）
木棺墓1 棺蓋検出状況（東から）
- 図版15 纏向遺跡メクリ地区
木棺墓1 木棺北東隅細部（南西から）
木棺墓1 木棺南東隅細部（北西から）
- 図版16 纏向遺跡メクリ地区
木棺墓1 棺内埋土除去後の様子
(南から)
木棺墓1 棺内埋土除去後の様子
(東から)
- 図版17 纏向遺跡メクリ地区
木棺墓2 検出状況（南西から）
木棺墓2 調査区北壁にかかる
木棺墓断面（南から）
- 図版18 纏向遺跡メクリ地区
木棺墓2 棺内調査の状況（東から）
木棺墓2 a - a' 棺蓋上埋土
堆積状況（南西から）
- 図版19 纏向遺跡メクリ地区

- 木棺墓2 b-b'北側小口板付近
墓壇内断面 (南東から)
- 木棺墓2 棺蓋検出状況 (南東から)
- 図版20 纏向遺跡メクリ地区
木棺墓2 棺蓋検出状況 (南西から)
木棺墓2 棺内埋土除去後の様子 (南西から)
- 図版21 纏向遺跡メクリ地区
木棺墓2 棺内埋土除去後の様子 (南東から)
- 木棺墓2 木棺北側小口細部 (西から)
- 図版22 纏向遺跡メクリ地区
木棺墓2 木棺南側小口部 (北から)
木棺墓2 b-b'北側小口部
断ち割り (東から)
- 図版23 纏向遺跡メクリ地区
木棺墓2 e-e'東側板断ち割り (北から)
木棺墓2 a-a'西側板断ち割り (南から)
- 図版24 纏向遺跡メクリ地区
木棺墓2 b-b'南側小口部断ち割り (東から)
木棺墓3 検出状況 (北から)
- 図版25 纏向遺跡メクリ地区
木棺墓3 棺内埋土の調査状況 (北から)
木棺墓3 墓壇埋土及び棺内埋土の
調査状況 (北から)
- 図版26 纏向遺跡メクリ地区
木棺墓3 墓壇埋土及び棺内埋土
堆積状況 (西から)
木棺墓3 墓壇埋土及び棺内埋土
除去後の様子 (北から)
- 図版27 纏向遺跡メクリ地区
木棺墓4 墓壇上面土器溜り (北東から)
- 木棺墓4 墓壇内土層断面 (南西から)
- 図版28 纏向遺跡メクリ地区
木棺墓4 第1層除去後の様子 (南東から)
木棺墓4 墓壇内土器出土状況 (南東から)
- 図版29 纏向遺跡メクリ地区
方形周溝墓1 遺物出土状況 (北東から)
方形周溝墓1 木製品出土状況 (北西から)
- 図版30 纏向遺跡メクリ地区
方形周溝墓1 土器出土状況 (北から)
方形周溝墓1 墳丘内 土坑検出状況 (南東から)
- 図版31 纏向遺跡メクリ地区
方形周溝墓1 墳丘内 f-f'土坑埋土 (南西から)
方形周溝墓1 墳丘内 d-d'、e-e'
土坑埋土 (北西から)
- 図版32 纏向遺跡メクリ地区
方形周溝墓1 b-b'周溝内
堆積状況 (南西から)
方形周溝墓1 c-c'周溝内
堆積状況 (南東から)
- 図版33 纏向遺跡メクリ地区
方形周溝墓1 完掘状況 (北西から)
方形周溝墓1 と周辺の遺構 (北から)
- 図版34 纏向遺跡メクリ地区
方形周溝墓2・3 遺物出土状況 (南東から)
方形周溝墓2・3 遺物出土状況 (北西から)
- 図版35 纏向遺跡メクリ地区
方形周溝墓2 溝24土器出土状況 (北西から)

- 方形周溝墓 2 溝24 a - a'周溝内
堆積状況 (南から)
- 図版36 纏向遺跡メクリ地区
方形周溝墓 2 断面 b - b'溝24と溝28
南溝の切り合い関係 (西から)
方形周溝墓 2・3 断面 e - e'方形周
溝墓とメクリ 1号墳の切り合い関係
(北西から)
- 図版37 纏向遺跡メクリ地区
方形周溝墓 3 溝25遺物出土状況
(東から)
方形周溝墓 3 溝25 c - c'周溝内
堆積状況 (南西から)
- 図版38 纏向遺跡メクリ地区
方形周溝墓 3 溝25木製品出土状況
(北から)
方形周溝墓 3 溝25木製品出土状況
(西から)
- 図版39 纏向遺跡メクリ地区
方形周溝墓 3 溝25遺物出土状況
(南東から)
方形周溝墓 3 溝25下層遺物出土状況
(南から)
- 図版40 纏向遺跡メクリ地区
方形周溝墓 3 溝29遺物出土状況
(北西から)
方形周溝墓 3 溝29西下半層遺物
出土状況 (北から)
- 図版41 纏向遺跡メクリ地区
方形周溝墓 3 溝29 d - d'周溝内
堆積状況 (西から)
方形周溝墓 2・3 完掘状況 (南西から)
- 図版42 纏向遺跡メクリ地区
メクリ 1号墳 後方部北側周濠西半
検出状況 (南から)
メクリ 1号墳 後方部北側周濠西半の
様子 (南から)
- 図版43 纏向遺跡メクリ地区
メクリ 1号墳 後方部北側周濠東端
遺物出土状況 (西から)
メクリ 1号墳 後方部北側周濠東端
遺物出土状況 (北東から)
- 図版44 纏向遺跡メクリ地区
メクリ 1号墳 後方部北側周濠 7 J - 21
B区管玉状木製品出土状況 (南から)
メクリ 1号墳 後方部北側周濠 7 J - 21
B区管玉状木製品出土状況 (東から)
- 図版45 纏向遺跡メクリ地区
メクリ 1号墳 後方部北側周濠東半
遺物出土状況 (西から)
メクリ 1号墳 後方部北側周濠円座
状樹皮製品出土状況
- 図版46 纏向遺跡メクリ地区
メクリ 1号墳 後方部北側周濠完掘
状況 (東から)
メクリ 1号墳 後方部西側周濠 b - b'
堆積状況 (北から)
- 図版47 纏向遺跡メクリ地区
メクリ 1号墳 後方部西側周濠 O - 15
地区遺物出土状況 (北から)
メクリ 1号墳 後方部西側周濠 O - 15
地区遺物出土状況 (西から)
- 図版48 纏向遺跡メクリ地区
メクリ 1号墳 後方部西側周濠 O - 15
地区遺物出土状況 (北から)
メクリ 1号墳 後方部西側周濠 O - 15
地区遺物出土状況 (北から)
- 図版49 纏向遺跡メクリ地区
メクリ 1号墳 後方部西側周濠 O - 15
地区遺物出土状況 (北から)
メクリ 1号墳 後方部西側周濠 O - 15
地区完掘状況 (北から)

- 図版50 纏向遺跡メクリ地区
メクリ1号墳 後方部西側周濠 a - a'
堆積状況 (南から)
メクリ1号墳 後方部西側周濠 c - c'
堆積状況 (北から)
- 図版51 纏向遺跡メクリ地区
メクリ1号墳 後方部西側からクビレ
部周濠の遺物出土状況 (北東から)
メクリ1号墳 後方部西側からクビレ
部周濠の遺物出土状況 (北西から)
- 図版52 纏向遺跡メクリ地区
メクリ1号墳 後方部西側周濠土器
溜り (東から)
メクリ1号墳 後方部西側周濠 g - g'
堆積状況 (北から)
- 図版53 纏向遺跡メクリ地区
メクリ1号墳 後方部西側周濠
完掘状況 (北から)
メクリ1号墳 後方部東側周濠の様子
(東から)
- 図版54 纏向遺跡メクリ地区
メクリ1号墳 後方部東側周濠の様子
(北から)
メクリ1号墳 前方部西側周濠 d - d'
堆積状況 (西から)
- 図版55 纏向遺跡メクリ地区
メクリ1号墳 前方部西側周濠
完掘状況 (南から)
メクリ1号墳 前方部西側周濠
完掘状況 (西から)
- 図版56 纏向遺跡メクリ地区
メクリ1号墳 前方部前面周濠遺物
出土状況 (西から)
メクリ1号墳 前方部前面周濠遺物
出土状況 (東から)
- 図版57 纏向遺跡メクリ地区
メクリ1号墳 前方部前面 e - e'
遺構切り合い関係 (東から)
メクリ1号墳 前方部東側足跡
検出状況 (南から)
- 図版58 纏向遺跡メクリ地区
メクリ1号墳 完掘状況 (南から)
メクリ1号墳より三輪山を仰ぐ
(北西から)
- 図版59 纏向遺跡メクリ地区
土器棺墓1出土土器 1棺蓋・2棺身
(1/3)
- 図版60 纏向遺跡メクリ地区
土器棺墓2出土土器 (1は1/2,
2は1/4)
- 図版61 纏向遺跡メクリ地区
木棺墓1出土土器 (1/2)
木棺墓4出土土器 (1/2)
方形周溝墓1出土土器1 (1/2,
1は1/3)
- 図版62 纏向遺跡メクリ地区
方形周溝墓1出土土器2 (1/2)
方形周溝墓2出土土器1 (1/3,
3・5・6は1/2)
- 図版63 纏向遺跡メクリ地区
方形周溝墓2出土土器2 (1/3)
- 図版64 纏向遺跡メクリ地区
方形周溝墓3溝25出土土器1 (1/3)
- 図版65 纏向遺跡メクリ地区
方形周溝墓3溝25出土土器2 (1/3,
36は1/2)
方形周溝墓3溝29出土土器1 (1/3,
38・39は1/2)
- 図版66 纏向遺跡メクリ地区
方形周溝墓3溝29出土土器2 (1/3)
- 図版67 纏向遺跡メクリ地区
方形周溝墓3溝29出土土器3 (1/3)

- 図版68 纏向遺跡メクリ地区
方形周溝墓3溝29出土土器4(1/3)
メクリ1号墳出土土器1(1/3)
- 図版69 纏向遺跡メクリ地区
メクリ1号墳出土土器2(1/3)
- 図版70 纏向遺跡メクリ地区
メクリ1号墳出土土器3(1/3)
- 図版71 纏向遺跡メクリ地区
メクリ1号墳出土土器4(1/3)
- 図版72 纏向遺跡メクリ地区
メクリ1号墳出土土器5(1/3)
- 図版73 纏向遺跡メクリ地区
メクリ1号墳出土土器6(1/3)
- 図版74 纏向遺跡メクリ地区
メクリ1号墳出土土器7(1/3)
- 図版75 纏向遺跡メクリ地区
メクリ1号墳出土土器8(1/3)

- 図版76 纏向遺跡メクリ地区
メクリ1号墳出土土器9(1/3)
- 図版77 纏向遺跡メクリ地区
メクリ1号墳出土土器10(1/3)
- 図版78 纏向遺跡メクリ地区
メクリ1号墳出土土器11(1/3)
- 図版79 纏向遺跡メクリ地区
メクリ1号墳出土土器12(1/3)
- 図版80 纏向遺跡メクリ地区
メクリ1号墳出土土器13(1/3)
- 図版81 纏向遺跡メクリ地区
メクリ1号墳出土土器14(1/3)
木棺墓3出土ガラス小玉(1/1)
22J区包含層出土鏡形土製品(1/1)
方形周溝墓3溝25出土木鏃(1/1)
メクリ1号墳出土木製品(1/1)
- 図版82 纏向遺跡メクリ地区
メクリ地区出土石製品(1/3)
1 方形周溝墓3溝29
1~10 メクリ1号墳

纏向遺跡発掘調査報告書 2

——メクリ地区における古墳時代前期墳墓群の調査——

本文編

第1章 はじめに

第1節 調査にいたる経緯と経過

ここに報告する発掘調査は桜井市大字辻・太田地区にまたがる字メクリ所在の旧纏向小学校用地において桜井市教育委員会が実施した纏向遺跡の範囲確認調査である。

調査地となった纏向小学校跡地から西側に隣接する太田池周辺は太田微高地上に位置するが、周辺は纏向遺跡の中でも早い段階から遺物の出土が確認されていた地域の一つであり、纏向遺跡の初期の名称である「太田遺跡」はこの太田の地名から付けられたものである。

さて、旧小学校用地内の調査については学校建設による遺構への影響とその残存状況を確認するために行われた試掘調査に端を発するもので、昭和54年7月から昭和62年6月にかけての9年の間に断続的に6次、面積にして4,695㎡の調査を行うこととなったものである。

これらの調査区の位置については図1に示した通りであるが、個々の調査区には重複があるものもあり調査位置や遺構の検出状況が煩雑であるため、以下に調査毎の位置や調査成果・期間・面積などを整理しておくこととする。

【昭和54年度 纏向遺跡第23次調査（旧小学校第1次）】

第23次調査は旧小学校用地内の中央と南部分の2ヶ所、大字辻・太田地区にまたがる地点に東西方向のトレンチを設定し、遺構の有無確認を行ったものである。この結果、対象地の中央より東部は学校用地の造成に際して地山面に達する削平を受けていたことが判明しているが、この調査で検出された遺構には庄内～布留式期にかけての溝や土坑・柱穴など多くの遺構があり、当初の予想に反して遺構の残存状況は比較的良好であることが判明している。

なお、調査面積は第1トレンチが幅3m×長さ93mの調査区に東端拡張区を加えて都合305㎡、第2トレンチが幅3m×長さ30mの調査区に若干の拡張区を加えた100㎡の調査であり、合わせて405㎡の調査が実施されている。調査期間は昭和54年7月20日～昭和54年9月13日までのおよそ2ヶ月間である。

【昭和55年度 纏向遺跡第27次調査（旧小学校第2次）】

第27次調査は前年度の調査で検出された遺構の状況を確認するため、大字太田地区において第23次調査のトレンチを含める形で調査区の拡張を行っている。具体的には第1トレンチとして学校用地南半で行った前回調査の南トレンチを中心に470㎡の調査を実施し、第2トレンチとしては前回学校用地中央に設定した北トレンチの東端で検出した落ち込み遺構部分を拡張する形で285㎡の調査区を設定したもので、両トレンチの合計調査面積から既に第23次調査で調査済みであるトレンチ面積を差し引いた総調査面積は600㎡となる。この調査によって検出された遺構には庄内～布留式期にかけての土坑や溝・方形周溝墓・木棺墓・土器棺墓・柱穴などがあり、調査期間は昭和55年7月21日～昭和56年3月31日までの凡そ8ヶ月間である。

なお、第48次調査の現地説明会資料に記載されている旧小学校用地内のトレンチ配置図によるとこ

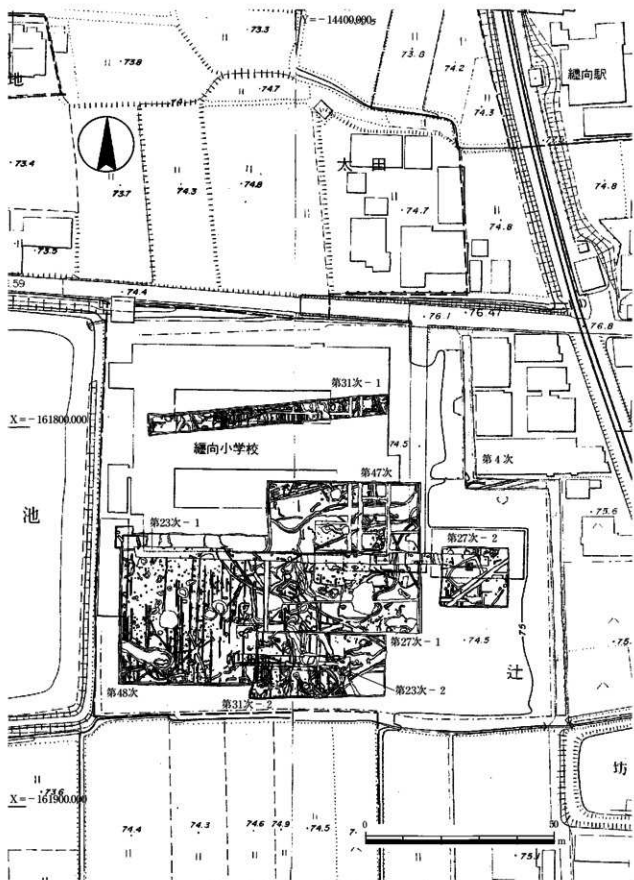


図1 調査トレンチ配置図 (1/10,000)

の第27次調査においては第1トレンチ東側から第2トレンチ南側にかけての空間に比較的規模の大きいトレンチが設定され、調査が行われた様である。今回の整理作業にあたっては残された日誌や図面・遺物等の確認作業をおこなったものの、調査に関係する記録は一切確認することができなかった。

調査担当者からの聞き取りによるとこの調査区については遺構の残存状況を確認するためにトレンチを設定したものの、重機掘削完了時点で後世の学校建築により遺構面が削平され遺構が存在しないことが確認できたことから記録の作成を行わずに調査を終了したとのこと。また、そのトレンチの配置や規模は失念したとのことで、今回のトレンチ配置図作成にあたってはその形状や位置を地図上に記すことができていない。

【昭和56年度 縦向遺跡第31次調査（旧小学校第3次）】

第31次調査は学校用地北半の遺構の残存状況を確認するための調査区として大字辻・太田地区にまたがる形で第1トレンチを設定、太田地区において前年度に実施した第27次調査第1トレンチを南西方向に拡張する形で第2トレンチを設定して調査を実施している。調査面積は第1トレンチが350㎡、第2トレンチが140㎡の計490㎡で、調査期間は昭和57年1月25日～昭和57年3月31日までの凡そ2ヶ月間であった。

この調査において検出された遺構には庄内～布留式期にかけての土坑や溝が検出されるとともに前年度に検出された方形周溝墓が完掘されている。

【昭和57年度 縦向遺跡第33次調査（旧小学校第4次）】

第33次調査は学校用地東端を南北に走る道路の拡幅工事に先立って幅2.5mのトレンチを南北方向に設定し、調査を実施したものである。調査地は対象地内でも地形的に最も高い地点にあたり、本来はかなりの遺構の密度があったと考えられるが学校用地の造成に際して殆どの遺構が削平を受けたとみられ、調査区中央から北部分にかけて庄内～布留式期の溝が若干検出されたのみで顕著な遺構は確認されていない。なお、調査面積は300㎡であり調査期間は昭和57年6月29日～昭和57年7月20日の約1ヶ月間であった。

【昭和61年度 縦向遺跡第47次調査（旧小学校第5次）】

第47次調査の調査区は学校用地中央から東側にかけて設定されたものである。トレンチは第23次調査の第1トレンチ東半を取り込みつつ第27次調査地の北側に接する形で設定されたもので、南北40m×東西40mの正方形を呈している。第47次調査区に重複する第23次調査の調査区を差し引いた調査面積は1,480㎡、検出された遺構には庄内～布留式期にかけての溝・土坑・土器棺墓・木棺墓・方形周溝墓・前方後方墳などがあつた。なお、調査期間は昭和61年5月7日～昭和61年12月25日までの凡そ8ヶ月間であった。

【昭和61～62年度 縦向遺跡第48次調査（旧小学校第6次）】

第48次調査の調査区は学校用地中央から東側にかけて設定されたものである。トレンチは第23次調査の第1・2トレンチの西半を取り込みつつ第27・47次調査地の西側に接する形で設定されたもので、南北40m×東西38mのほぼ正方形を呈している。調査区の北西部では若干の拡張も行われており、

第48次調査区に重複する第23次調査の調査区を差し引いた調査面積は1,420㎡、検出された遺構には土坑や溝・柱穴・井戸・木棺墓などがある。なお、調査期間は昭和61年10月～昭和62年6月1日までの凡そ8ヶ月間であった。

以上、6次にわたる調査の状況を整理してきたが旧小学校用地11,077.59㎡に対してこれまでに実施された調査は4,695㎡で、約42%の調査が完了したことになる。これらの調査の成果としては今後の編年的研究に資する庄内～布留式期にかけての多くの土器資料が得られたこと、多くの柱穴の確認によって纏向遺跡では確認例の少ない居住関係の遺構の様子がうかがえること、纏向型祭祀土坑が検出され多様な祭祀遺物が出土したことから祭祀の内容に関する資料が増加したこと、前方後方墳や方形周溝墓・木棺墓・土器棺墓の確認により纏向型前方後方墳を頂点とした纏向遺跡内における墳墓の多様性が確認されたことなどがあげられよう。中でも前方後方墳（メクリ1号墳）は遺跡内では初めての確認例であるが、遺跡の中央部周辺において確認されたことの意義は大きい。古墳の所属時期も庄内式期と他の纏向型前方後方墳に並行し、最古級に位置づけられる時期のものであったことは特筆すべきことである。

【註記】

- 1) 萩原儀征「纏向遺跡・纏向小学校跡地区第六次発掘調査資料」1987

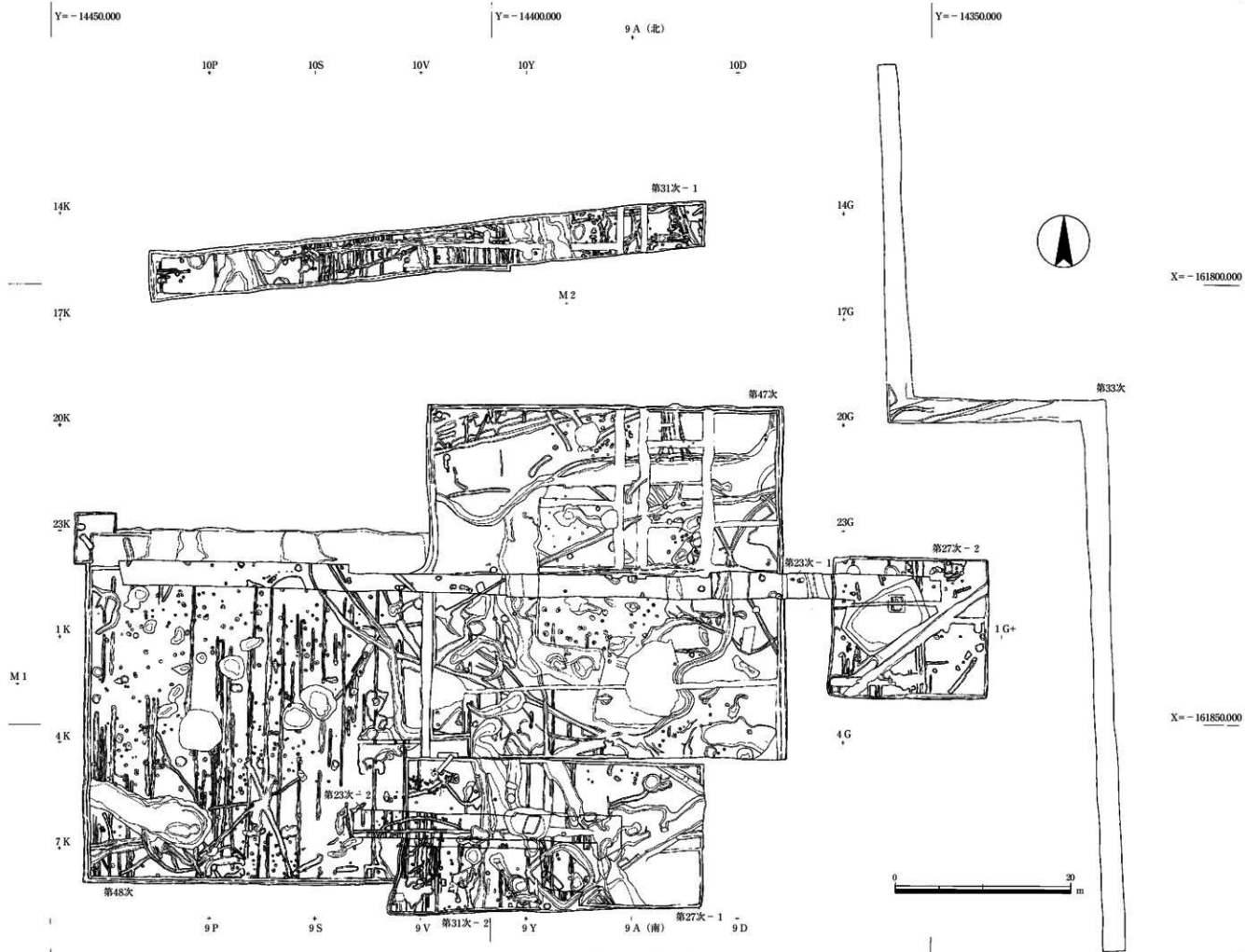


图2 遺構配置图 (1/400)

第2節 報告書作成の経緯と経過

前項でも述べたように旧小学校用地内の調査は総調査面積が4,695㎡と過去に行われた纏向遺跡の調査のなかでも1ヶ所で行われた調査としては最大の規模を持つものである。

これら一連の調査では豊富な出土遺物の内容とともに前方後方墳であるメクリ1号墳、方形周溝墓・木棺墓・土器棺墓などの多様な墓制が確認されたほか、祭祀土坑や掘立柱建物など多くの遺構が検出されており、遺構の在り方が面的に理解できる数少ない調査事例として重要な位置を占めるものである。

しかしながら、これらの調査で出土した遺構・遺物の総量は膨大なものであり調査当時の遺物整理能力の限界もあって調査成果に関する報告についてはごく短編の概要報告が3編と現地説明会資料が2部作成されたのみで調査の情報は殆ど公表されていない状況にあったが、近年継続的に実施されている史跡指定を目的とした纏向古墳群における学術調査の連携とともに旧小学校用地内の遺構群の重要性が再認識されるとともに、調査成果の早期の公表が望まれていた。

このような状況から桜井市教育委員会ではこれらの調査成果の重要性に鑑み、旧小学校用地内の調査報告書の刊行を目的として平成19・20年度の国庫補助事業の採択を受けて資料の再整理に着手した次第である。

なお、旧小学校用地内の調査で検出された遺物が遺物ケースにして約1,000箱と膨大な量にのぼり、整理・報告書作成のための所要期間が長期にわたることが想定されたため、報告書の作成にあたっては検出された遺構を大きく墳墓・集落関連遺構の2つに分け、遺構の性格ごとに分冊化して報告書を作成することとした。この中で今年度は重要度が高いと判断され、かつ比較的遺物量の少ない墳墓群を中心に整理作業を実施し、前方後方墳であるメクリ1号墳、方形周溝墓・木棺墓・土器棺墓の報告書を作成することとした。

実際の作業は収蔵庫に保管されている遺物ケースの中からこれらの遺構に関連する出土遺物を抽出するところから作業を開始した。この結果、墳墓関連遺構からの出土品は遺物ケースにして約80箱の分量があったが、殆どの遺物は調査当時に洗浄が行われたのみでネーミング・接合等の基礎的な整理さえ全くの手付かずの状態であった。このため、整理作業は以下の手順に基づいて実施することとしている。

- ①すべての破片にネーミングを実施する。
- ②仮接合を実施。
- ③すべての破片を点検するとともに仮接合したものの中から残存率の高いもの・特殊な個体・小片でも遺構の時期の決め手となる個体を抽出。
- ④抽出した土器を同一遺構内出土の全ての土器片と接合関係を再確認し、エポキシパテを併用しながら復元を実施。
- ⑤復元作業の完了後に後補部分にアクリル絵具にて着色を実施。
- ⑥実測作業を実施。



写真1 ネーミングの様子



写真2 接合・復元作業の様子



写真3 実測作業の様子



写真4 図面浄書の様子

この結果、本報告にあてた遺物量は遺物ケースにして30箱にのぼることとなった。整理作業は平成20年1月から整理作業員3名をあてて収蔵庫にて墳墓関係の遺物の抽出と基礎的な整理を行い、3月よりネーミングに着手、4月からは整理作業員2名が専従してネーミングを続行し（写真1）、6月末には整理作業員1名を増員。8月からは復元作業に取り掛かり（写真2）、9月末までには既ね復元作業を完了。10月からは遺物の実測を開始し、12月末までにおおむねの作業を完了している（写真3）。

この間、橋本・橋爪の両者は遺構図の浄書・遺物写真の撮影・原稿の執筆作業などを進め（写真4）、1月初めには印刷所へ入稿を行った。

なお、今回の再整理・報告書の作成にあたっては調査担当者である萩原儀征と協議のもと橋本・橋爪がこれを担当し、整理済の遺物については台帳登録を行い、図面・写真などの記録類については再度ファイリングを行い、今後の利用の便を図る事とした。（橋本）

【註記】

1) 旧小学校用地内の調査報告については以下のものがある。

萩原儀征「Ⅱ A調査地」『竊向遺跡-昭和54年度遺跡範囲確認発掘調査概報-』桜井市教育委員会1980

萩原儀征「Ⅱ B調査地」『竊向遺跡-昭和55年度遺跡範囲確認発掘調査概報-』桜井市教育委員会1981

萩原儀征「その他の調査地区」『竊向遺跡-昭和56年度遺跡範囲確認発掘調査概報-』桜井市教育委員会1982

萩原儀征『竊向遺跡・竊向小学校跡地区第五次発掘調査資料』桜井市教育委員会1986

萩原儀征『竊向遺跡・竊向小学校跡地区第六次発掘調査資料』桜井市教育委員会198

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

桜井市は奈良盆地の東南部とその背後に続く大和高原・宇陀山地・吉野山地の一部より構成されている(図3)。人口約61,000人、面積98.93km²の市域の約80%は山地であり、平地は北西部の20%に過ぎないが、市域のほぼ中央では春日山断層と初瀬構造谷が交差し、巻向山地塊崖・御破裂山地塊崖が盆地に面する西北斜面にはいくつもの溪谷が形成されている(図4)。

また、平地部にはこれらに源を発する初瀬川や寺川・米川・纏向川・粟原川など多くの河川が流れ、これらによって形成された扇状地の自然堤防上を主として多くの遺跡が展開している。

調査地の存在する纏向遺跡は市域北西部の標高60～90mの扇状地上に位置する。現在考えられている遺跡の規模は東西2km、南北1.5kmであり、遺跡の主要な部分は纏向川と烏田川に挟まれた地域に集中するものの、遺跡はさらに北へと大きく広がっていくものと考えられている。

さて、纏向遺跡の内部には旧河川によって形成された多くの微高地があるが、主な調査地である辻地区は太田微高地の中央、標高約74m前後の下位段丘上に立地するものであり、周辺での調査事例では庄内式期の遺構の集中する地域であることが判明している。(橋本)

【註記】

- 1) 西宮克彦「地質」『桜井市史下巻』桜井市役所 1979
- 2) 安井隆浩「奈良県纏向遺跡の立地基盤と古地形環境」『東田大塚古墳』(財)桜井市文化財協会 2006



図3 桜井市の位置



図4 桜井市の地質(註1文献より)

第2節 歴史的環境

(1) 桜井市域の遺跡

以下、市域における遺跡の状況について概観していくこととした(図5)。

【旧石器時代】

桜井市内の旧石器時代は幾つかの遺跡において遺物の出土が確認されている。阿部中山遺跡の調査ではナイフ形石器が、谷遺跡(76)では翼状剥片が、芝遺跡(41)ではナイフ形石器が出土しているものの、遺構に伴うものは皆無である。

【縄文時代】

縄文時代草創期の遺物は黒崎地区⁹⁾と檜原地区¹⁰⁾から採集されている有舌尖頭器が一点ずつあるのみで、直接遺跡に伴うものではない。

早期の遺物は初瀬小学校の建替えに際して行われた初瀬遺跡の調査で出土している。小さな破片であるが、山形文を施した尖底土器になると考えられ、市内では最古の土器である。

前期になると遺跡数は少ないが、三輪遺跡(59)や纏向遺跡(12)内の箸中地区所在の箸中遺跡では北白川下層Ⅱ式から前期終末の大歳山式までの比較的まとまった量の遺物が出土している。

中期の遺構・遺物は少なく、芝遺跡(41)と高家遺跡があるのみである。高家遺跡では船元式系の縄文と大歳山式類似の刻目尖帯を持ち、大型竹管状円形刺突文を持つものや、船元式系の縄文を持ち、里木式系の条痕に円形刺突文を持つものに大別されている。

後期になると市内でも遺構や遺物の確認例が増加する。東新堂遺跡(61)や、上之庄遺跡(63)・纏向遺跡(12)・安倍寺遺跡・吉備遺跡(73)・栗殿遺跡(71)などでは溝や流路、土器棺墓などが検出されており、纏向遺跡では所屬時期は判然としないが、後期～晩期のものと考えられる土偶の頭部が出土している¹¹⁾。

晩期の遺跡としては纏向遺跡(12)や栗殿遺跡(71)・三輪遺跡(59)・上之庄遺跡(63)・大福遺跡(66)・芝遺跡(41)・茅原遺跡(46)などで遺物の出土が確認されている。纏向遺跡では滋賀里3式期の深鉢とともに石棒片などが出土している¹²⁾。後期に比べると遺跡数は増加の傾向にあるが、遺構に伴わないか、伴っても土器棺が数基確認されている程度である。

【弥生時代】

弥生時代の遺跡では前期から後期へと一定の規模を保ちつつ継続して営まれる拠点集落として、大福遺跡(66)と芝遺跡(41)があるが、この他にも小規模な集落遺跡の確認例は多い。前期の遺物を出土する遺跡には先述した大福遺跡・芝遺跡のほかに東新堂遺跡(62)や上之庄遺跡(63)・豊前遺跡(39)・脇本遺跡・大福池遺跡(67)などがあるが、殆どが包含層や土坑などからの出土で遺物量は少なく、小規模な集落ばかりである。

中期の主要な遺跡には芝遺跡(41)・吉備遺跡(73)・大福遺跡(66)があるが、遺物のみが出土・採集されている遺跡として三輪遺跡(59)・黒田池遺跡(72)・脇本遺跡などがある。

後期の遺跡には袈裟博文銅鐸¹³⁾や細型銅剣¹⁴⁾などが出土している大福遺跡(66)を中心として、吉備

遺跡 (73) ・芝遺跡 (41)、小規模ながら纏向遺跡 (12) ・谷遺跡 (76) ・横内遺跡 (74) ・安倍寺遺跡 ・能登遺跡 ・生田遺跡 ・脇本遺跡などが確認されている。

【古墳時代】

古墳時代前期初頭になると所謂纏向遺跡 (12) が出現し、弥生時代の拠点集落であった大福遺跡や芝遺跡だけでなく、他の小規模集落も殆どが姿を消すようである。庄内0式期から布留0式期の段階には大福遺跡 (66) や東新堂遺跡 (62) ・城島遺跡 (78) ・上之宮遺跡などで当該期の遺構や遺物の出土があるが、集落と呼べるほどの規模があるのか否かもはっきりとしない程度のものである。

纏向遺跡以外の場所で前期の遺構が顕著になるのは布留1式期以降のことであり、纏向遺跡の縮小に反比例して大福遺跡 (66) や上之庄遺跡 (63) ・安倍寺遺跡 ・大西遺跡 (40) ・河西遺跡 ・忍阪遺跡などの遺跡が出現している。これらの集落はいずれもごく小規模なものであるが、上之庄遺跡 (63) では布留2式期の滑石や緑色凝灰岩を使った玉造り遺構が検出されている。遺物には原石や砥石などのほかに緑色凝灰岩製管玉や滑石製勾玉 ・管玉 ・車輪石 ・有孔円盤 ・白玉などがあり、滑石製品の玉造り遺跡としては最古級のものと言えよう¹⁵⁾。前期古墳には纏向石塚古墳 (4) ・矢塚古墳 (2) ・勝山古墳 (3) ・ホケノ山古墳 (7) ・東田大塚古墳 (1) ・南飛塚古墳 (5) ・メクリ1号墳 (8) ・箸墓古墳 (6) などで構成される纏向古墳群のほかに、初瀬川より南には桜井茶臼山古墳 (80) ・メスリ山古墳 ・池ノ内古墳群などがある。纏向遺跡に隣接する天理市域には柳本古墳群が展開し、渋谷山古墳 (16) や行燈山古墳 (25) ・天神山古墳 (29) ・櫛山古墳 (24) ・柳本大塚古墳 (14) などがある。この古墳群には馬口山古墳や石名塚古墳 (33) などの3世紀に遡る可能性が指摘されている古墳も含まれるが、基本的には纏向古墳群に後出する段階のものが殆どである。

中期にはいと泊瀬朝倉宮の候補地とされる脇本遺跡を除くと、忍阪遺跡や大西遺跡 (40) ・纏向遺跡 (12) ・茅原遺跡 (46) ・河西遺跡などで単発的に遺構や遺物が検出されるばかりで、集落と呼べるほどのまとまった規模を持つものは極めて少ない。なお、この時期の市域の遺跡群を特徴づけるものには三輪山の山頂から山麓一帯に広がる磐座祭祀 (51・52・53・55) が挙げられよう。この祭祀は斑瀧岩の巨石を対象に土師器や須恵器などのほか、土製や滑石製の玉や形代を供献して行われるもので、5世紀から7世紀にかけて盛んに行われていたようであるが、近年の上之庄遺跡における滑石製玉造り遺跡の発見などによってその開始時期が4世紀中頃まで遡る可能性も指摘されているものである。三輪山祭祀の隆盛とともに、山麓にはこの祭祀を司掌したと考えられる大神氏の一族が居住していたようで、三輪遺跡では神撰田跡と考えられる水田遺構が検出され¹⁶⁾、茅原遺跡では掘立柱建物や井戸などが検出されている。古墳では先述した大神氏の奥津城と考えられている全長約80mの帆立貝形前方後円墳、茅原大墓古墳 (44) ・ツツロ塚古墳が築かれ、後期まで連続して築かれている。この他、古式の家形石棺を持つ全長約40mの前方後円墳である兜塚古墳、銀製中空勾玉や金環の出土している慈恩寺1号墳 (82)、石見型や盾形 ・鞍形などの木製埴輪が出土した全長34.7mの帆立貝形前方後円墳 ・小立古墳¹⁷⁾、竊窿式石室を持つと考えられる桜井児童公園2号墳などがあるほか、鳥見山山麓古墳群 (81) では径10m～20m程度の円墳や方墳が確認されているが、規模 ・質ともに前期段階の

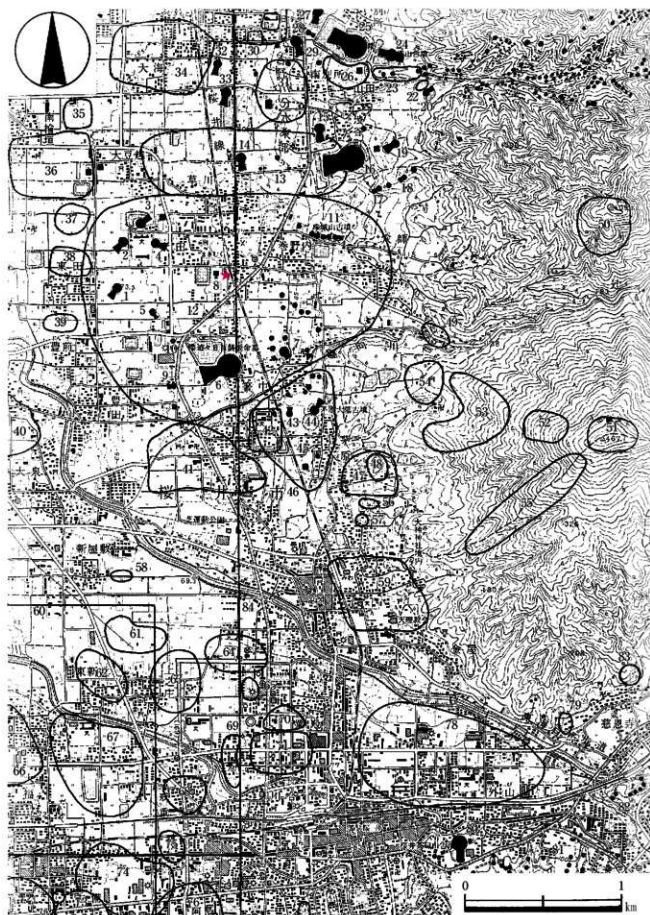


図5 縦向道路メクリ地区と周辺の道路 (1/25,000)

所謂王墓クラスのものとはかけ離れたものとなっている。

後期になっても三輪山祭祀と結びついた磐座祭祀や古墳・集落遺跡などの大神氏関連遺跡の痕跡が多い。集落では茅原遺跡(46)が中期に引き続いて居住地として選ばれ、掘立柱建物や井戸などが確認されている²¹⁾し、大神神社摂社若宮社(57)の発掘調査では6世紀前半期の居館遺構が検出され、大神氏の居館ではないかと考えられている²²⁾。また、中期に築造された茅原大墓古墳・ツツロ塚に続く大神氏の奥津城も毘沙門塚古墳(43)・馬塚古墳・狐塚古墳(45)などがあり、築造の順序も茅原大墓古墳の五世紀前半以来、ツツロ塚古墳の五世紀後半、毘沙門塚古墳の六世紀前半、馬塚古墳の六世紀後半、狐塚古墳の六世紀末から七世紀初頭と連続と築かれていることが解る。墳形・内部構造などから見ると、茅原大墓古墳の築造を契機としてツツロ塚古墳・毘沙門塚古墳と三基の前方後円墳が続いた後、弁天社古墳・馬塚古墳、そして茅原狐塚古墳と家形石棺をもつ三基の横穴式石室が続いている²³⁾。市内の他の遺跡に目を向けてみると鍛冶や玉造関連遺構が数多く確認されている谷遺跡²⁴⁾(76)や河西遺跡・安倍寺遺跡・上之宮遺跡・纏向遺跡(12)・臨本遺跡などの規模の小さなものが数多く散在していたようである。古墳については先述した三輪山山麓の古墳群以外に纏向遺跡内では径10m～20m前後の小規模な古墳が数多く存在していたようで、現在確認されている約20基の古墳以外にも集落内部の調査で埋没古墳が5基確認されており、さらにその数は増えるものと考えられる。また、市域の南部には高家古墳群や桜井児童公園の古墳群・鳥見山古墳群(81)・外鎌山北麓古墳群(82)・高田古墳群など数多くの群集墳が丘陵上に築かれる他、赤坂天王山古墳や越塚古墳・ムネサカ1・2号墳・谷首古墳・舂墓古墳・文殊院東古墳・文殊院西古墳の後・終末期古墳や、磚塚遺跡としては花山塚東古墳・花山塚西古墳・忍坂8・9号墳(82)・舞谷1～5号墳など、特色ある多くの古墳が築かれている。

★纏向遺跡メクリ地区

1. 東田大塚古墳	22. 遺物散布地(古墳後)	43. 毘沙門塚古墳	64. 三輪松之本遺跡
2. 矢塚古墳	23. 遺物散布地(弥生後～古墳前)	44. 茅原大墓古墳	65. 遺物散布地(古墳後～平安)
3. 勝山古墳	24. 樺山古墳	45. 狐塚古墳	66. 大福遺跡
4. 纏向石塚古墳	25. 行燈山古墳	46. 茅原遺跡	67. 大福地遺跡
5. 南飛塚古墳	26. 山田遺跡	47. 箕倉山遺跡	68. 戒重城跡
6. 箸墓古墳	27. アンド山古墳	48. 箕倉山城跡	69. 遺物散布地(古墳中～鎌倉)
7. ホケノ山古墳	28. 南アンド山古墳	49. 車谷遺跡	70. 遺物散布地(古墳後～平安)
8. メクリ1号墳	29. 天神山古墳	50. 穴師山城遺跡	71. 粟殿遺跡
9. イヅカ古墳	30. 柳本城跡	51. 奥津磐座	72. 黒田池遺跡
10. ビハクビ古墳	31. 遺物散布地(古墳後～平安)	52. 中津磐座	73. 吉備遺跡
11. 珠城山古墳群	32. ノベラ古墳	53. 辺津磐座	74. 横内遺跡
12. 纏向遺跡	33. 石名塚古墳	54. 松原遺跡	75. 戒重遺跡
13. 遺物散布地(弥生～古墳)	34. 柳本遺跡	55. 禁足地裏磐座群	76. 谷遺跡
14. 柳本大塚古墳	35. 遺物散布地(古墳)	56. 馬場遺跡	77. 谷城跡
15. 上の山古墳	36. 檜垣遺跡	57. 大神寺跡	78. 城島遺跡
16. 渋谷向山古墳	37. 遺物散布地(弥生)	58. 新屋敷遺跡	79. 遺物散布地
17. 立石古墳	38. 遺物散布地(古墳～平安)	59. 三輪遺跡	80. 茶臼山古墳
18. 立子古墳	39. 豊前遺跡	60. 大藤原京跡	81. 鳥見山古墳群
19. シウロウ古墳	40. 大西遺跡	61. 上之庄遺跡	82. 外鎌山北麓古墳群
20. ヲカタ塚古墳群	41. 芝遺跡	62. 東新堂遺跡	83. 慈恵寺跡
21. 龍王山古墳群	42. 芝村陣屋跡	63. 上之庄遺跡	84. 上ッ道

【飛鳥時代】

この時代の主要な遺跡には上之宮遺跡や城島遺跡(78)・脇本遺跡・能登遺跡・阿部中山遺跡などの居館遺構あるいは公的な施設と考えられている遺跡群と、谷遺跡(76)・芝遺跡(41)・安倍寺遺跡などの一般的な集落、天皇家や豪族によって建立された山田寺・安倍寺・吉備池廃寺などの寺院跡が挙げられよう。この内、居館遺構については上之宮遺跡では6世紀後半から7世紀はじめにかけての園池遺構や四面庇を持った大型掘立柱建物などが検出されており、聖徳太子の[上宮]の有力な候補地と考えられている³⁰⁾。城島遺跡の居館遺構はその所属時期から万葉集にみられる大伴氏の鳥見の田処との関連が考えられ、大伴氏ゆかりの居館遺構と想定されている³¹⁾。また、能登遺跡の遺構は用明紀に見られる迹見赤埴の居館との説がある³²⁾。脇本遺跡や阿部中山遺跡は有力層の居館、あるいは離宮的な性格が想定されている³³⁾。この時期には調査で検出されている遺構のほかにも欽明天皇磯城嶋金刺宮や迹見驛家・阿斗河辺館・阿斗桑市館等々文献にあらわれる宮跡や居館・公的な施設は数多く、今後の調査が期待される。寺院についても我国最初の官立寺院である百済大寺とされる吉備池廃寺や、阿倍氏の氏寺である安倍寺、蘇我倉山田石川麻呂によって建立された山田寺など著名な遺跡が多い。

【藤原京時代】

藤原京時代の桜井は上之庄遺跡(63)における東の京極道路である東十坊大路の確認により、市域の多くが大藤原京城に含まれることが判明している³⁴⁾。京城内では西之宮地区や大福地区・吉備地区などにおける調査では広い範囲で条坊道路や掘立柱建物群・井戸など遺構の確認が顕著である。また、横大路(85)や上ツ道(84)・山田道などの幹線道路が整備されるのもこの段階であろう。なお、京城より外の地域にあたる谷遺跡(76)・箕倉山遺跡(47)・忍阪遺跡・三輪遺跡(59)などにおいても掘立柱建物や井戸などの集落遺構が確認されており、京城外にも小規模な居住地が広がっていたことが解っている。

【奈良・平安時代】

市域における奈良時代の遺構の確認例は、先述した大神神社摂社若宮社(57)の調査で検出されている大神寺関連の建物遺構程度で非常に少ないが、引き続き安倍寺が存続³⁵⁾し、青木廃寺の創建が確認されている。青木廃寺の過去に採集された出土瓦の中には「延喜六年造樹越高階茂生」と陽刻を持つ軒平瓦や「大工和仁部貞行」と陰刻をもつ平安時代の軒丸瓦なども含まれており、長らく平安時代の創建とされていたものの、出土瓦の詳細な研究により奈良時代の初めに創建されたものであり、長屋王が父高市皇子の冥福を祈って建立した寺院であるとの説が出されている³⁶⁾。このほか、殆どが未調査ながら高田廃寺や栗原寺・慈恩寺(83)などの寺院跡でも奈良時代の瓦や礎石などの出土が確認されており、集落遺構の貧弱さに対して寺院の多さが目に付く。また、笠や忍坂・谷・下などの山部では火葬墓やこれに伴う骨蔵器・鉄板・刀なども出土しており、平野部を見下ろす東・南の山地にこの時期の奥津城があったようで、今後類例の増加が予想される。

平安時代の遺構が検出されているのには纏向遺跡(12)と東新堂遺跡(62)がある。いずれの遺跡も掘立柱建物や井戸・土坑などがあり遺構の密度は顕著であるが、他の遺跡では芝遺跡(41)や脇本

遺跡・三輪遺跡 (59)などで土器片が僅かに出土しているのみである。

【鎌倉時代】

この時期になると市域の殆どすべての地域から遺構や遺物の出土がある。市域に現存する集落の多くはこの頃に形成された環濠集落をもとに発展してきたもので、現在でも当時の環濠をとどめているものは少なくない。調査で確認される遺構には先述した環濠の他、掘立柱建物や土坑・井戸・溝・墓などがあり、およそ当時の集落の在り方を知ることができる。このほか、鎌倉から南北朝にかけての桜井を特徴づけるものには市内各地に築かれた多くの城館や砦を挙げることができよう。これら城館や砦の機能していた14世紀前半の桜井は南北朝期の南朝と北朝の勢力圏の境界にあたっており、北より進撃してくる北軍に対し、『太平記』に有名な三輪西阿（大神主 高宮勝房と同一人物か）を中心としてその一族や周辺の子の国人が南朝に応じ、延元二年（1337）から興国二年（1341）にかけて市内各地で激戦が繰り広げられていた様子が多くの資料から伺える³⁰。これらの文献に残る城郭や砦には西阿の本丸となった三輪（59）・戒重城（68）の他に河合・安房・鶏・赤尾・外鎌・石原田などの支城の名が散見されるが、過去の発掘調査では吉備大臣墓遺跡³¹や、大神神社北方で確認された空湟³²や切岸³³、著中地区慶運寺裏の丘陵上に於いて検出された空湟と見られるV字溝など、文献には登場しない小さな遺構の確認も相次いでおり、今後の調査によってさらなる種類の増加が見込まれる。

（橋本）

【註記】

- 1) 清水真一「阿部丘陵遺跡群」桜井市教育委員会 1989
- 2) 清水真一「桜井市埋蔵文化財1992年度発掘調査報告書2」（財）桜井市文化財協会 1994
- 3) 清水真一「桜井市埋蔵文化財1991年度発掘調査報告書3」（財）桜井市文化財協会 1992
- 4) 前園実知雄ほか「桜井市外鎌山北麓古墳群」奈良県立橿原考古学研究所編 1978
- 5) 関川高功・佐藤良二「奈良県三輪山山麓採集の有舌尖頭器」『旧石器考古学32』旧石器談話会 1986
- 6) 清水真一「桜井市埋蔵文化財1996年度発掘調査報告書1」（財）桜井市文化財協会 1997
- 7) 樋口清之「三輪遺跡とその遺物の研究」『大和考古学』4・5 1932・1934
- 8) (財)桜井市文化財協会が1997年に調査。未報告。
- 9) 川村和正「著中遺跡出土の縄文資料について」『大和の縄文時代—奈良盆地の狩人たちの足跡—』桜井市立埋蔵文化財センター 2000
- 10) 清水真一編「大和の縄文時代—奈良盆地の狩人たちの足跡—』桜井市立埋蔵文化財センター 2000
- 11) 石野博信・関川高功「纏向」桜井市教育委員会 1976
- 12) 清水真一「桜井市埋蔵文化財1990年度発掘調査報告書2」（財）桜井市文化財協会 1991
- 13) 萩原儀征「桜井市大福遺跡大福小学校地区発掘調査概報」桜井市教育委員会 1987
- 14) 橋本輝彦・豊福恵子「大福遺跡第13次調査の特殊遺物」『みづほ第27号』大和弥生の会 1998
- 15) 橋本輝彦「上之庄遺跡第4次発掘調査現地説明会資料」（財）桜井市文化財協会 1996
- 16) 清水真一「芝遺跡大三輪中学校改築にともなう発掘調査報告書」桜井市教育委員会 1987
- 17) 萩原儀征「茅原丸田地区発掘調査概要」桜井市教育委員会 1990
- 18) 前園実知雄ほか「桜井市外鎌山北麓古墳群」奈良県立橿原考古学研究所編 1978
- 19) 村上薫史「警急遺跡群発掘調査概報Ⅰ」（財）桜井市文化財協会 2002
- 20) 網干善教「桜井市谷桶西第3号墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報11』奈良県教育委員会 1959
- 21) 萩原儀征「茅原丸田地区発掘調査概要」桜井市教育委員会 1990
- 22) 前園実知雄「第三節 地下発掘調査」『重要文化財大神社神社大直福子神社社殿修理工事報告書』奈良県教育委員会 1989

- 23) 橋本輝彦「近年の調査成果から見た三輪山祭祀・三輪氏について」『大美和91号』大神神社 1996
- 24) 清水眞一「桜井市埋蔵文化財1992年度発掘調査報告書2」(財)桜井市文化財協会 1994
- 25) 橋本輝彦「桜井市平成6年度国庫補助事業による発掘調査報告書2」桜井市教育委員会 1995
- 26) 清水眞一「阿部丘陵遺跡群」桜井市教育委員会 1989
- 27) 清水眞一「城島遺跡田中地区発掘調査報告書」(財)桜井市文化財協会 1992
- 28) 清水眞一「桜井市埋蔵文化財1996年度発掘調査報告書1」(財)桜井市文化財協会 1997
- 29) 清水眞一「磯城・磐余の時代—大和の古代邸宅—展」桜井市立埋蔵文化財センター 1991
- 30) 橋本輝彦「上之庄遺跡第4次発掘調査現地説明会資料」(財)桜井市文化財協会 1996
- 31) 田中英夫ほか「安倍寺跡環境整備事業報告—発掘調査報告書—」桜井市 1970
- 32) 大脇潔「忘れられた寺—青木塚寺と高市皇子—」『期古論聚—久保哲三先生追悼論文集』1993
- 33) 松山宏「中世」『桜井市史上巻』桜井市役所 1979
- 34) 橋本輝彦「吉備大臣墓遺第2次調査報告」『桜井市平成10年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会 1999
- 35) 寺沢薫ほか「史跡・大神神社旧境内地第6次発掘調査報告書」『奈良県遺跡調査概報(第二分冊)1991年度』奈良県立橿原考古学研究所 1992
- 36) (財)桜井市文化財協会による1997年の調査。未報告。



写真5 昭和54年撮影の纏向遺跡北半の様子（上が北）

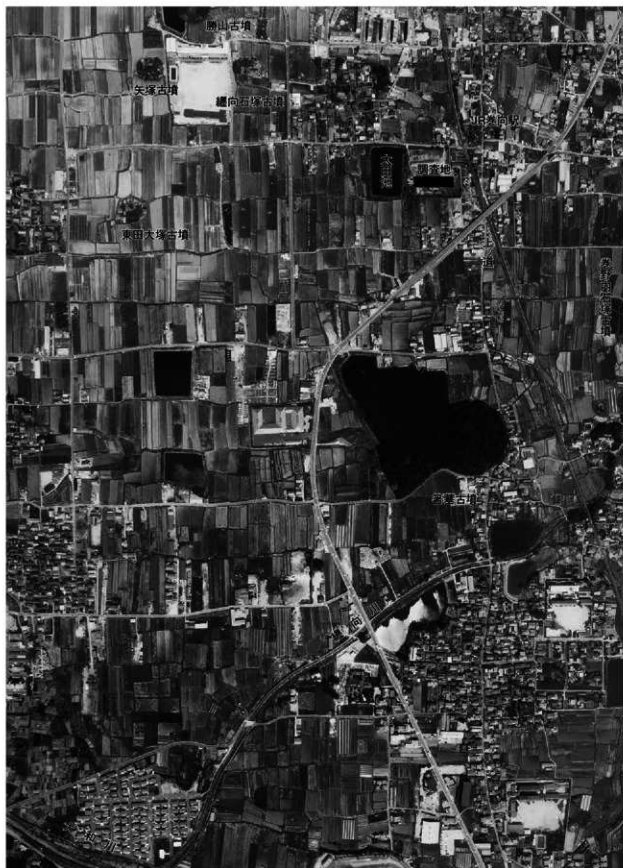


写真6 昭和54年撮影の纏向遺跡南半の様子(上が北)

第3章 発掘調査報告

第1節 調査の方法と層序

(1) 調査の方法と層序

調査トレンチの配置は第1章で細述したので割愛するが、概ね対象地の南から西側部分に集中して調査を行っている。調査地における埋土の状況は学校用地造成工事の深度にばらつきがあり、その残存度が地点によって異なっている。従って現表土直下で地山面が検出される部分も多かったが、造成深度の浅い所では本来の埋土の状況が確認できた部分もあった(図51・図版46下)。

ここで確認された土層堆積のうち調査地の多くにわたって存在したと考えられる基本土層には次のものがある。

- 第I層 現表土(小学校造成時の整地土)、
- 第II層 暗灰褐色土(旧耕作土)、
- 第III層 黄灰褐色土(床土)、
- 第IV層 灰褐色土(中世土)、
- 第V層 暗茶褐色粘質土・暗茶褐色砂質土(包含層1)、
- 第VI層 暗茶褐色粘質土(砂粒と土器片を多量に含む包含層2)。

実際の調査にあたってはバックホーによって包含層上面までの埋土を除去し、以下を人力によって掘削を行い遺構の検出に努めた結果、後述する多くの遺構を確認することができた。

(2) 調査区の地区設定について

旧小学校用地の調査の地区設定は第23・27・31・33次(1～4次)調査と第47・48(5・6)次調査では設定が異なっている。第23・27・31・33次調査は学校用地西北の隅を基点としてクリノメーターを用いて南北・東西軸を設定して割付が行われている(図6-青)。この区画は南北軸をアラビア数字で、東西軸はアルファベットで表記し、基準杭は方4mを1区画としてメッシュ杭が打設されている。

また、区画名は西北隅で交わる地点の杭の番号をもって呼称しており、対象地の西北隅にあたる部分の区画名称は1A地区となる。なお、この調査においては後の調査に備えて東西軸にあたるOラインと南北軸にあたる20ラインの端部に基準杭を設置したとの記録があるが、現時点では杭の存在は確認できていない。

第47・48次調査は初めて日本測地系の国土座標に基づく基準点測量が実施され、座標軸に則って調査区の割付が行われている。それまでの調査とは異なり、ここでは南北軸をアルファベットで、東西軸をアラビア数字で表記し、前回と同様に方4mを1区画としてメッシュ杭が打設されている。

このうち旧小学校用地のほぼ中央を貫くVラインの南北軸線は座標値が $Y=-14,400,000$ 、1ラインの東西軸線は座標値が $X=-161,840,000$ の座標軸に合わせて設定されており、この2本の軸線の交差によって分割される4つの地区のうち北西部は7H区、北東部は7J区、南西部は8H区、南東部は8

J区と、昭和51年刊行の報告書「縦向」において遺跡全域に設定された地区割に準じて地区名称が与えられている（図6-赤）。

なお、今回の報告書作成にあたりトレンチ配置図などは第23・27・31・33次調査と第47・48次の調査の図面の合成を行っているが、これは第47次調査において第23次調査で設置された任意の杭であるO-12杭などの杭位置が判明していることから、これを利用して個々のトレンチの位置関係を特定したものである。個々の遺構図に記載した座標値については第23・27・31・33次調査分が任意で設定されたメッシュ杭の番号を基準として表記し、第47・48次調査分は日本測地系の国土座標の数値を表記することとしている。

※地区割の名称のうち、I区は他の記号・数字などと混同する可能性があるため縦向遺跡全域に設定された地割名称からは除外されている。

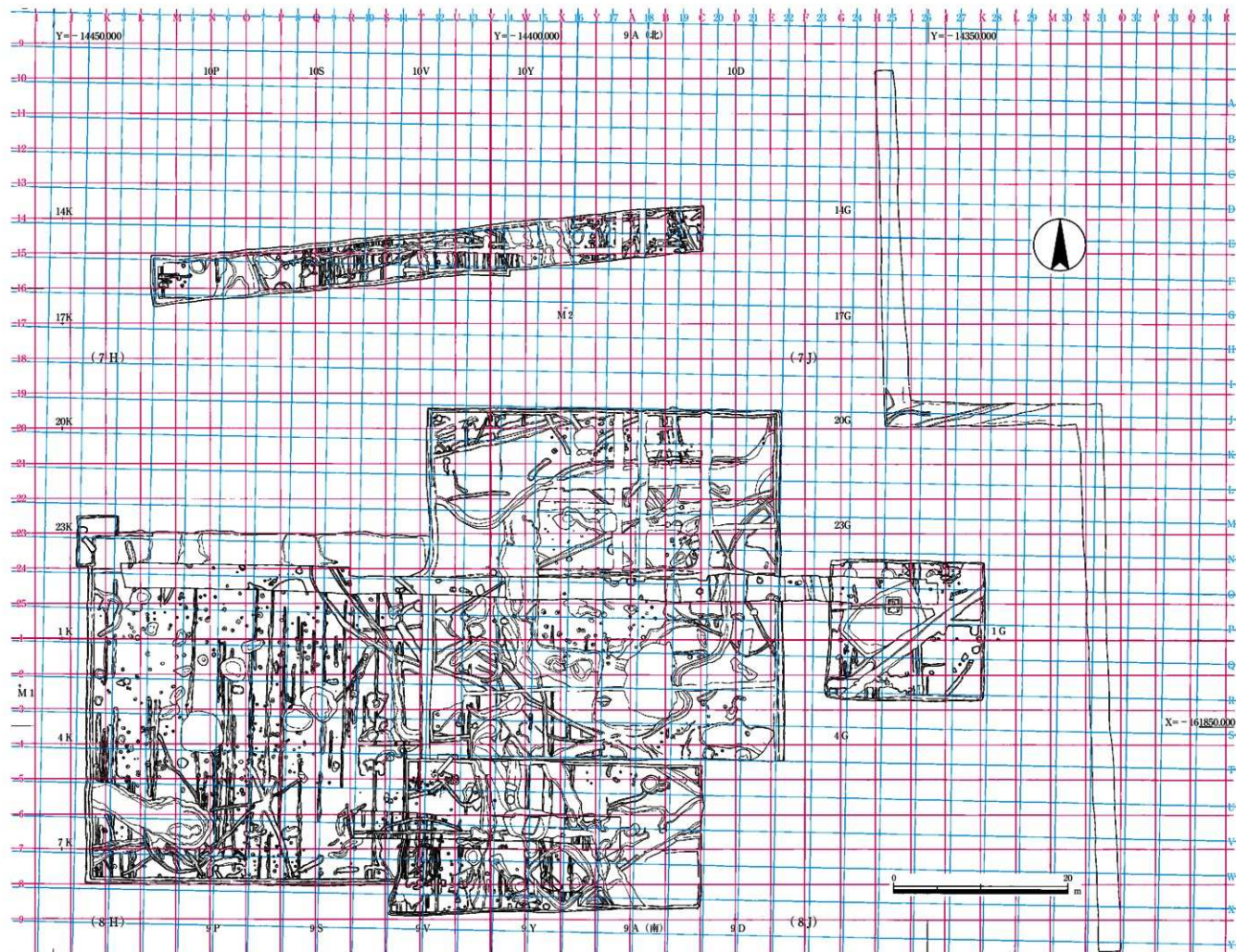


图6 调查地区剖图 (1/400)

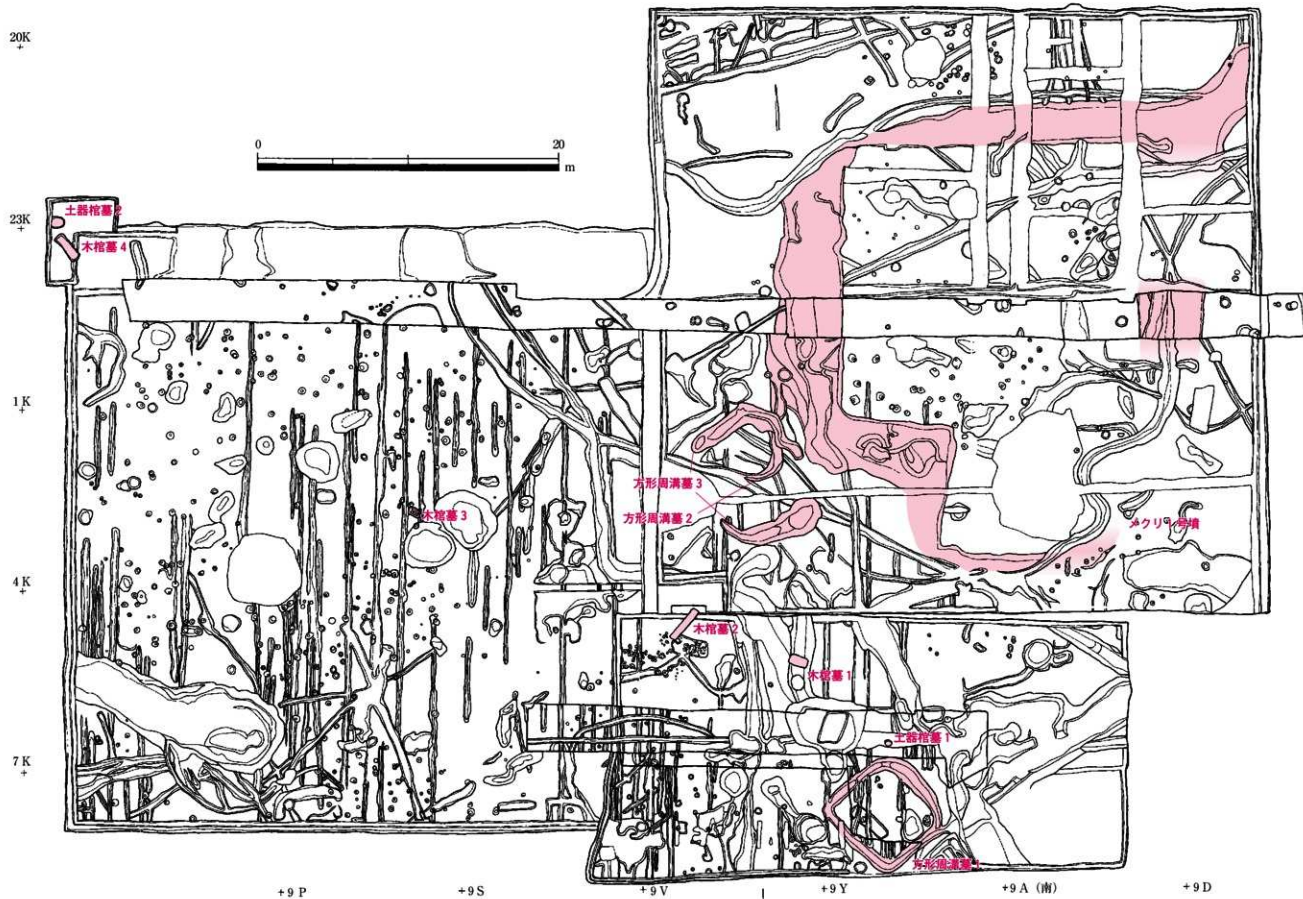


図7 古墳時代前期の墳墓の分布 (1/250)

第2節 検出された遺構

今回の調査で確認された古墳時代前期に属する墳墓群には前方後方墳1基と方形周溝墓3基・木棺墓4基・土器棺墓2基がある。遺構の分布は旧小学校用地のほぼ中央に前方後方墳であるメクリ1号墳が位置し、これの西に隣接して方形周溝墓2・3が切り合って存在している。方形周溝墓1と土器棺墓1はメクリ1号墳の南14m、対象地の中央部南端に位置している。また、方形周溝墓1と2・3の中間に木棺墓1・2が、距離は少し離れるが方形周溝墓2・3の西側19mには木棺墓3が、メクリ1号墳の西45mには木棺墓4と土器棺墓2がある。(図7)

(1) 土器棺墓

1. 土器棺墓1 (図8,9・図版9.10,59)

第27次調査第1トレンチのほぼ中央にあたる8J-V16区、方形周溝墓1の北コーナー部より北1mの地点で検出されたものである。土器棺は径40cm、深さ45cmのほぼ円形の土壇に納められたもので、断面の観察からは墓壇掘削後に暗灰色砂質土を厚さ3cmにわたって敷き詰め、底面を整えた後に口をやや北東に傾斜した状態で納められた様子が窺える。なお、蓋は別個体の壺の胴部を打ち欠いたものが使用されていた。

墓壇の埋め戻しにあたっては黒色の粘質土・暗灰色粘土と淡灰色粘質土(地山)の混在土・白黄淡灰褐色粘質土で行われており、棺が据えられると同時に一気に埋め戻されたようである。

棺内埋土は2層が確認でき(図8)、棺内底には下部に細砂を多く含んだ黒色粘質土混じりの暗灰色粗砂質土が、その上部には黒色粘質土が堆積していたが、棺内上半は空洞のままであった。

棺身となる土器はやや尖り気味の底部を持った壺だが(図9-2・図版59-2)、頸部から上が打ち欠かれているため本来の型式などは判然としない。残存高は25.2cm、胴部最大径27.3cmを測り、外面にはナメ方向のスリナデI Aaが、内面にはケズリAが顕著な個体である。

棺蓋に使われていた土器はやや下彫れの体部を持つ壺だが、頸部から上と胴部下半から底部にかけて人為的に打ち欠かれ失われており、本来の型式は不明と言わざるを得ない。

この個体は胴部の約1/2が残存する

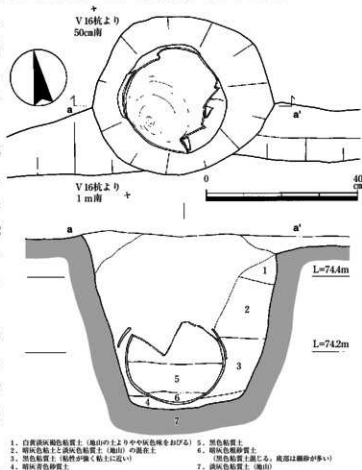
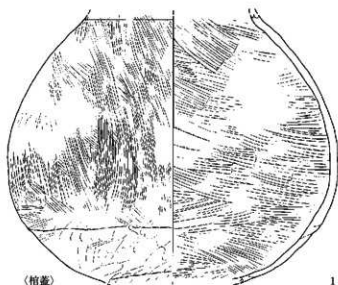
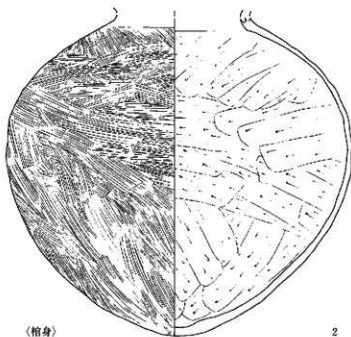


図8 土器棺墓1 平・断面図(1/10)



〈棺蓋〉

1



〈棺身〉

2



図9 土器棺墓1 (1/3)

のみだが外面にはタテ方向のスリナデ I Aa が施されており、体部下半には押捺 A が顕著であった。

なお、内面の調整にはヨコ及びナメ方向のケズリ B が顕著で、器壁の平滑化がはかれている。

本遺構の埋葬時期は棺および蓋材に使われた土器から類推するしかないが、いずれの個体も時期を考える上での決め手となる部分が打ち欠かれているため細かな時期を比定するのは困難である。土器そのもののプロポーシオンや調整技法などからは概ね庄内式期の新相から布留式期の古相に位置付けられるのではないかと考えられる。

2. 土器棺墓 2 (図10.11・図版11.60)

第48次調査において旧小学校用地の西端、7H-22J区で検出された埋葬遺構で木棺墓4に隣接して確認されたものである。

この遺構は本来包含層上面から切り込んで構築されたものと考えられるが包含層上面で墓壇の輪郭を検出することができずに地山面で墓壇を確認したため、土器棺が墓壇検出面より上部まで残存した状態で検出されることとなったものである(図10)。

検出時の墓壇輪郭は長径92cm、短径71cmのやや楕円形を呈しており、墓壇の深さは12cmであった。棺身とされていた壺は胴部の最大径が復元で48.0cmと非常に大きなもので、出土状況からは口部分のレベルを若干高めにして横倒しの状態で埋葬されていた様子が判明しているが、後世の削平により埋葬時の上部にあたる半身が欠失してしまっている。今回出土した部位は底部から頸部までがあり、本来は口縁部のみを打ち欠いて棺にしたものと考えられる。

蓋材については棺身と同様に削平を受けておりその構造を知ることはできないが、埋葬墳内からは棺身とは別個体となる白灰色を呈した壺胴部小片が1点出土しており、本来は壺の胴部を転用した壺が被せられていたものと推定される。

さて、棺身とされていた壺についてはあまり突出しない平底を持つもので、その大きさや頸部の状況からは大型の広口壺になるものとみられるが、やや軟質な焼成のため器壁の磨減が著しい。

確認できる調整技法は少なく、体部外面は本来精緻なミガキAが施されていたものと考えられるが、現状ではミガキAの前段階に施されたスリナデI Aaがわずかに認められるのみで、内面では横あるいは縦方向のケズリBが確認できる。

本遺構の埋葬時期について

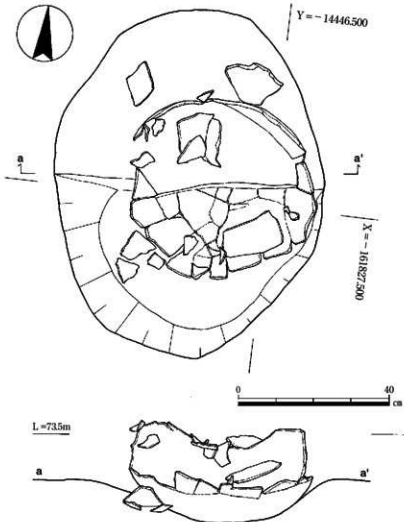


図10 土器棺墓 2 平・断面図 (1/10)

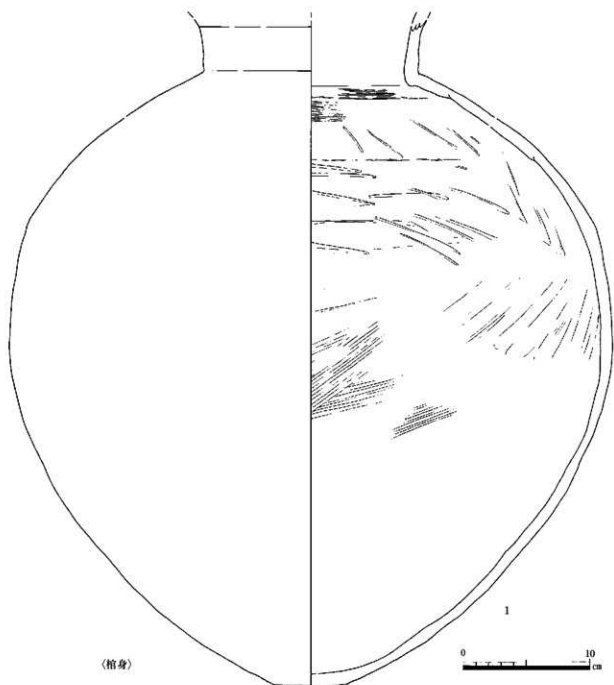


図11 土器棺墓2 (1/3)

は土器棺墓1と同様、棺および蓋材に使われた土器から類推するしかないが、蓋材とみられる個体は小片であり、所属時期の検討はおろか図化することさえも困難な状況である。

また、棺身に使われた個体についても時期を考える上での手掛りとなる口縁部などが打ち欠かれてしまっているため時期の比定は困難だが、胴部下半から底部にかけてはやや尖り気味のプロポーシオンを持つこと、調査区周辺に普遍的に存在する包含層を切り込んで掘削されたものであることなどを考え合わせると庄内式でも古い段階のものとは考えられない。ここでは南に隣接する木棺墓4と同様に庄内式期の新相から布留1式期頃のものと考えておきたい。

(2) 木棺墓

1. 木棺墓1 (図12~14・図版12~16.61-上)

第27次調査第1トレンチ、8 J-T14区で検出された主軸をMN-73°-Wに持つ木棺墓である。この木棺墓は先行する幅約1.6m、深さ50cmの溝遺構の埋没後に埋葬されたもので、全長1.28m、最大幅69.5cm、残存する深さ17cmとやや小型の墓壇に長さ1.1m、幅42~50cmの組合式の木棺が納められていた。

棺内の調査では遺構検出面より16cm掘り下げた地点で木棺の蓋材とみられる2枚の板材が検出されている。これらは棺底板の直上に重なりあうようにして出土しているが(図12・図版14)、底板との間には埋土が存在しなかったことから、埋葬後比較的早い段階に蓋材が棺内に落ち込んだものと考えられる。出土した蓋材には長さ1.13m、幅15cmの板材と最大幅23cm、残存長58cmの板材の2枚があるが、この2枚の合計幅41cmは棺身幅の42~50cmとほぼ一致することから、この2枚の板材のみで蓋が加構され、隙間部分は小さな材などで塞がれていたものと推定される。

棺身の構造は墓壇底に板材を並べて底板とした後に左右の両側板で底板及び小口板を挟んだだけの簡単なもので(図13・図版15~16)、個々の材の固定には釘などは使用されておらず、土圧によってのみバランスがとられていたものと考えられる。棺底の板材はいずれもが厚さ2~3cm前後のもので、中央に幅約20cm、長さ約1.1mの板材があり、これを挟んで南には残存長78cm、幅10cmの長めの板材と長さ29cm、幅10cmの短めの板材の2枚が、北側には残存長79cm、幅10cmの長めの板材と長さ53cm、幅12cmの短めの板材の2枚、計5枚の板材が並べられて棺底とされていた。

なお、中央の棺底材の西端近くには用途不明の6cm×10cmの長方形の穴が穿たれていた。これについては長さ1.1m、幅42~50cm程度の小規模な木棺にもかかわらず小さな板材を複数枚利用して棺底を築いていることなどとあわせて考えると、この木棺は何らかの構造物からの転用材で構築されている可能性も考えられる。

側板は南北それぞれ厚さ2cm前後の1枚板で構成されている。北側の側板は長さ1.24mのもので一部に木質の残存は確認できたもののその多くは土壌化が進んでおり、材そのものの情報は明らかではない。南側の側板は現状では長さ1.21cmを測るものだが、中央から西にかけては外側からの土圧により材がやや内側へと押されて変形していることから本来の長さは数cm長かったものと考えられる。この材も南側の側板と同様に一部木質の残存は確認できたものの多くは土壌化が進み、材そのものの情報は明らかではない。

小口板は東西両小口に板材が残存していた。材の厚みは両小口ともに2cm程度で、東小口は長さ44cm、西小口は長さ50cmと西小口にやや長めの板材が使用されていることから、埋葬頭位は西頭位であった可能性が考えられる。

なお、これら棺材の材質については調査当時に嶋倉巳三郎氏に鑑定を受けている。これによると主要な材のすべてがヒノキとのことである。

さて、本遺構からの出土遺物には棺内東側から出土した2本の加工木がある。先述した棺蓋材より

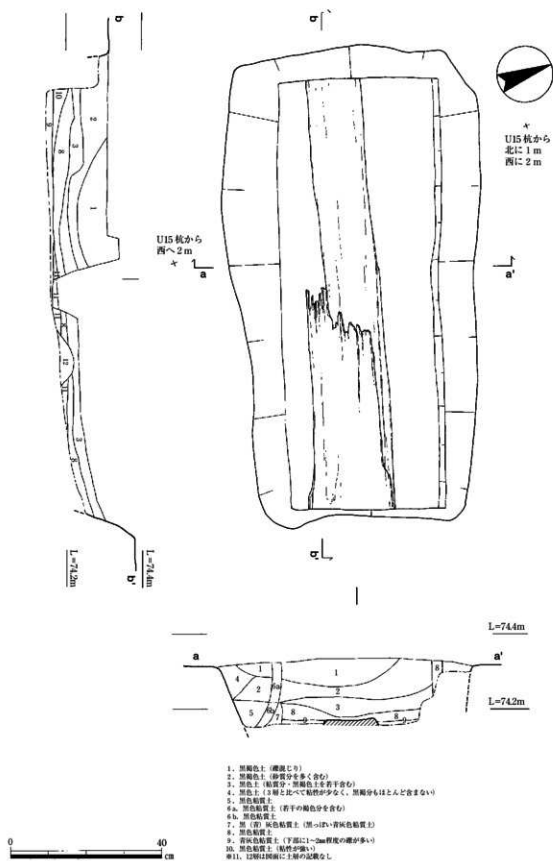


図12 木棺墓1 棺蓋材検出状況 (1/10)

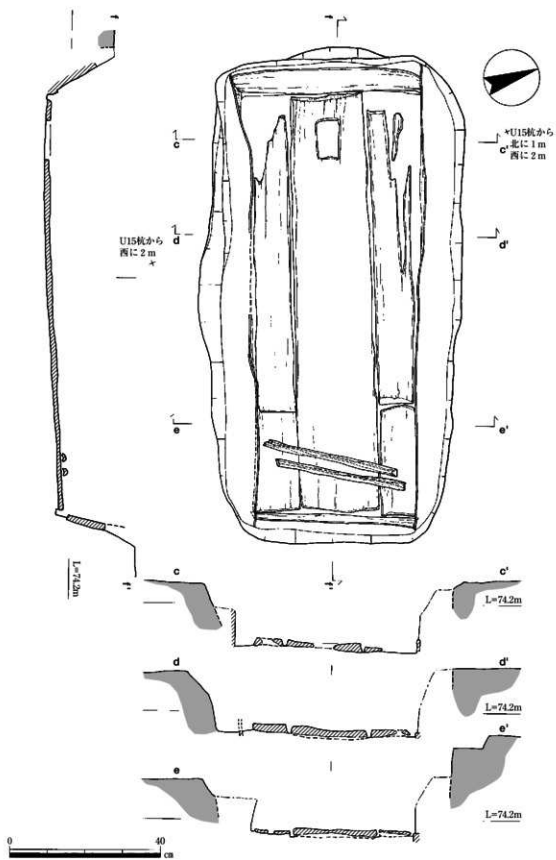


図13 木棺墓1 棺内完掘状況 (1/10)

も下部、ほぼ棺底直上から出土したもので、いずれもが長さ36cm、径2cm程度の棒材であるが棺材の一部、或いは副葬品か否かも含めてその用途は不明である。このほかには棺内からの遺物の出土は皆無であったが、棺蓋崩壊後の窪みに堆積したと考えられる①層 黒褐色土からは古式土師器の出土があった。点数は多くなかったが図化した個体には図14に示した布留形甕の口縁片と小型器台の2点があり、埋葬施設の下限を示すものである。



図14 木棺墓1 出土土器 (1/3)

本遺構の構築時期は埋葬施設に直接伴う遺物が皆無でありこれを特定するのは困難であるが、下層に存在する溝遺構が庄内3式期に埋没したと考えられていることや、墓壙上部に堆積した①層からの出土遺物の様相などから庄内3式期から布留式期の古相段階に位置付けられるものと考えたい。

2. 木棺墓2 (図15・図版17~24-上)

第27次調査第1トレンチ、8H-T12区で検出された主軸をMN-39°-Eに持つ木棺墓である。この木棺墓は全長2.7m、幅約40~50cm、残存する深さ33cmの細長い長方形の墓壙に長さ2.54m、幅36~40cmの組合式木棺が納められていたもので、墓壙は木棺とほぼ同じ大きさに合わせて掘削されたものであった。

棺内の調査では埋土下部上面から棺蓋材が出土している。蓋材は腐植が進み5片に分かれてしまっているが、本来は厚さ2~3cmの一枚であったとみられ、北側小口部にあたる部分は後述する棺身の形状に合わせて斜めにカットが施されていた(図15・図版19-下~20-上)。

棺身の構造は墓壙底に2.52m、幅40cmの一枚板を置いて底板とし、両小口板及び東側板はこの上に据えられていたが、西側板のみが底板の外側に据えられていた。これらの材の固定は木棺墓1と同様に釘などは使用されておらず、周りからの土圧によってバランスがとられていたものと考えられる。

西側の側板は残存長2.53m、幅20cmの一枚板であったが、東側は残存長1.84mと短い板材に残存長59.5cmの板材を継ぎ足して側板としていたものの、さらに板材を継ぎ足して両側板の長さを揃えることは行っておらず、西側板に対して東側板は約20cm短いままとされている(図版21-下)。このため小口板は棺の南側では両側板に直交して挟まれているのに対し、北側では西側板から東側板へと斜めに挟みこまれており、北小口部分はいびつな形状となってしまう。

なお、これら棺材の材質についても木棺墓1と同様、調査当時に嶋倉巳三郎氏に鑑定を受けている。これによると主要な材のすべてがヒノキのことである。

さて、これらの板材のうち、西側板の上部北端には本来木棺には不要の切込みが加工されているほか、先述したように東側板が長さの違う複数の材で構成されていること、東側板のうち南側の材の中央下部には幅58cm、高さ5cmの突起部があることなどから、本埋葬施設の棺材は何らかの構造物からの転用材が多用されていると考えられる。

棺内埋土a-a'

1. 厚褐色土 (若干の植物片 (白褐色土) が混入)
2. 暗褐色粘板状土 (1層より植物片が少い)
3. 厚褐色土 (植物片はみられないが1層の土と心る)
4. 黒色粘板土 (砂混じり)

墓壁断面別りa-a'

1. 厚褐色粘板土 (粘板状)
2. 暗褐色粘板状土 (凝灰状土)
3. 灰褐色粘板状土 (凝灰状土)
4. 暗褐色粘板状土 (凝灰状土)

棺内埋土b-b'

1. 厚褐色土 (若干の植物片 (白褐色土) が混入)
2. 暗褐色粘板状土 (1層より植物片が少い)
3. 厚褐色土 (植物片はみられないが1層の土と心る)
4. 厚褐色粘板土 (塊の薄片が若干みられる)
5. 灰褐色アツツ多き混入 (墓壁の埋土上)
6. 5層と比べてみれば若干砂質
7. 暗褐色粘板土 (塊の混入でみられる)

5. 暗褐色粘板土 (若干砂質)
6. 暗褐色粘板土 (砂混じり)
7. 暗褐色粘板状土 (砂混じり、6層と同様)
8. 暗褐色土 (棺内埋土層別りb-b'の14層に相当)

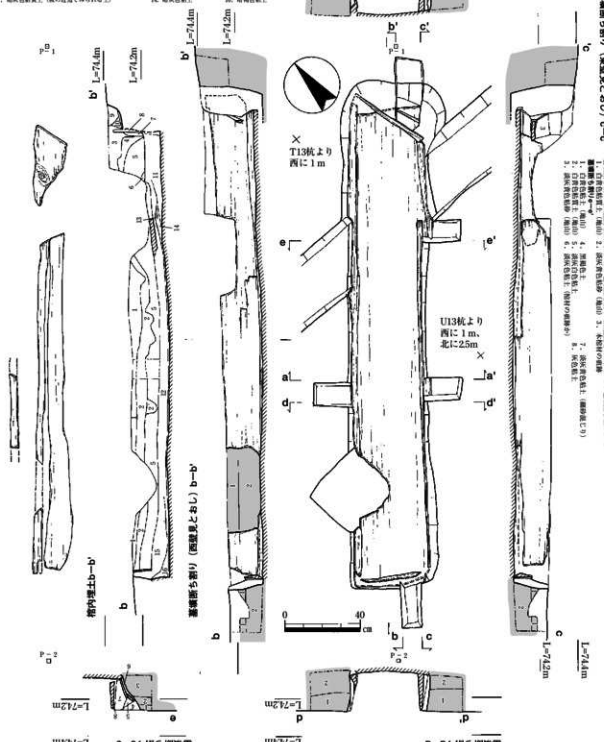
棺内埋土a-a'

L=74.4m

L=74.2m

L=74.4m

L=74.2m



- 墓壁断面別り (断面見とちり) a-a'-a'-a', 墓壁断面別り (断面見とちり) b-b'-b'-b'-b', 墓壁断面別り (断面見とちり) c-c'-c'-c'-c', 墓壁断面別り (断面見とちり) d-d'-d'-d'-d'
1. 白褐色土 (厚土)
 2. 灰褐色土 (厚土)
 3. 灰褐色粘板土 (厚土)
 4. 厚褐色土 (厚土)
 5. 厚褐色粘板土 (厚土)
 6. 厚褐色粘板土 (厚土)
 7. 灰褐色粘板土 (厚土)
 8. 厚褐色土 (厚土)
 9. 厚褐色粘板土 (厚土)
 10. 厚褐色粘板土 (厚土)
 11. 厚褐色粘板土 (厚土)
 12. 厚褐色粘板土 (厚土)
 13. 厚褐色粘板土 (厚土)
 14. 厚褐色土 (厚土)
 15. 厚褐色粘板土 (厚土)
 16. 厚褐色粘板土 (厚土)

図15 木棺墓 2 棺蓋材検出状況及び棺内完掘状況 (1/20)

本埋葬施設の構築時期については棺内・棺外ともに遺物の出土が全く無く、これを特定するのは困難であるが、その構造などからは木棺墓1に近い時期のものと考えている。

3. 木棺墓3 (図16.17・図版24-下~26.81-中央左)

第48次調査、8H-2P区で検出された主軸をGN-68°-Wに持つ木棺墓である。この木棺墓は上部の大半と墓壇の東側が後世の削平により失われているが、全長78cm以上、幅52cm、残存する深さ6cmの小規模な長方形の墓壇に長さ69cm、幅29cmの組合式木棺が納められていたことが判明している。木棺の内寸は長さ42~45cm、幅18cmと非常に小さなもので、棺材はすべてが土壌化していたがその痕跡は明瞭に残されており、これによって棺の構造を知ることができる。

棺身の構築にあたっては墓壇底に幅29cm、長さ69cm以上の板材を設置して棺底とした上に南北両側板と小口板を載せたもので、北側板は厚さ5cm前後、長さ56cm以上の板材が、南側板は厚さ6cm前後、長さ60cm以上の板材が据えられていたようである。

小口板は側板の端部より7cm程度内側に入った部分に挟みこまれている。西側の小口板は厚さ4cm前後、長さ19cmの板材で、東側の小口板は厚さ3~5cm前後、長さ20cmの板材が使用されていた。

これらの材の固定にはやはり釘などは使用されておらず、周りからの土圧によってバランスがとら

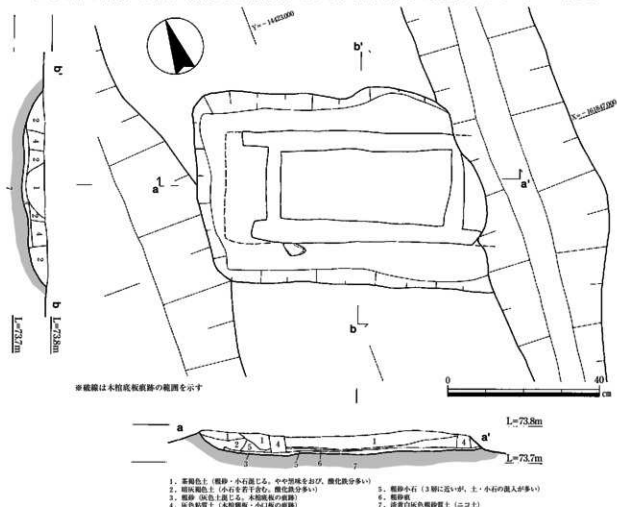


図16 木棺墓3 平・断面図 (1/10)

れていたものと考えられる。

本遺構からの出土遺物には棺内西側棺底より出土したガラス小玉2点がある(図17・図版81-中央左)。1は高さ5mm、径6.2mmの丸みを持った小玉で、やや暗いがターコイズブルー5 B5.5/8.5の色調を呈するものであり、2は高さ4.5mm、径4mmのやや重なる形状の小玉で、色調はターコイズブルー5 B5.5/8.5を呈するものであった。

なお、本埋葬施設の構築時期は出土遺物に先述したガラス小玉のみでありこれを特定するのは困難であるが、その構造などからは他の木棺墓に近い時期のものと考えている。

4. 木棺墓4 (図18～20・図版27,28,61-中,81-中央右)

第47次調査、7H-23J区で検出された主軸をGN-40°-Wに持つ木棺墓である(図18・図版27,28)。この墓については調査当初は木棺痕跡が検出されなかったため土壌墓として調査が行われていたが、後の断面精査の段階で側板の痕跡が明瞭に確認できたことから木棺墓として扱うこととなったものである。従って調査時には木棺そのものの記録が作成されておらず、ここではその詳細な構造や規模について報告することができない。

さて、調査で確認された墓壇は全長1.98m、幅60cmの長方形の平面プランを持ち、断面の形状は浅いU字形を呈している。残存する墓壇の深さは約20cmで、唯一作成された墓壇中央部での断面図には木棺の側板材が土壌化したものと判断される④層 暗灰褐色粘質土と⑤層 暗灰褐色粘質粗砂が確認でき、木棺の幅が内寸で約40cmであったことがわかる。

棺床の構造に関しては④層と⑤層の間に棺底材が挟まれた痕跡や底板の土壌化層が認められないことから、本棺は旧小学校用地内の木棺墓に多い底板の上に側板を据える構造であったと考えている。

しかしながら、この場合棺底材の土壌化した土層には⑥層があたると思われるが⑥層の堆積は墓壇底から⑦層の外側を貫いて墓壇上面まで達しており、棺底材の土壌化層とするには不自然な点もあることから、ここでは棺床の構造については保留しておきたい。

本遺構からの出土遺物には棺蓋崩落後に堆積したと

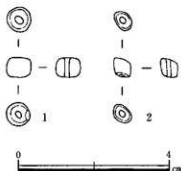
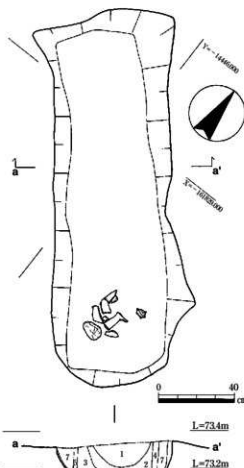


図17 木棺墓3
出土ガラス小玉(1/1)



1. 暗灰褐色粘質土 (粗砂・灰灰が混じる)
2. 暗灰褐色粘質土 (粗砂混じる。1層に比し灰灰が濃い)
3. 暗灰褐色粘質土 (本棺側板の表側)
4. 暗灰褐色粘質土 (本棺側板の裏側)
5. 暗灰褐色粘質粗砂 (本棺側板の裏側)
6. 暗灰褐色粘質粗砂 (0.0-25cm程度の層が混入)
7. 灰褐色粗砂

図18 木棺墓4 平・断面図(1/20)

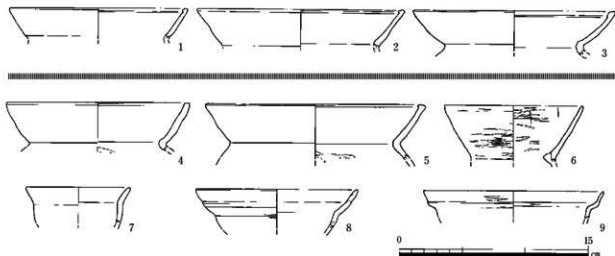


図19 木棺墓4 出土土器 (1/3)
1～3 木棺墓覆土 4～9 棺内埋土1層 粗砂混じり暗灰褐色粘質土層

みられる土器群の出土があった(図19・図版61-中央)。

これらの土器群は棺内でも南側の①層および墓壙上面から出土したものが多く、遺構の下限を示すものといえるが、厳密には埋葬の時期を示すものではない。図化できた土器の内訳は墓壙上面から3点、棺内埋土から6点の計9点で、墓壙上面からの土器はいずれもが布留形甕の口縁片、棺内埋土からの土器は布留形甕の口縁片2点と小型丸底壺1点、小型鉢1点、有段鉢2点がある。

これらの土器の所属時期は墓壙上面・棺内埋土ともに布留1式期のものとみられることから本遺構の構築時期もこれと同時期、或いはその直前頃のものではないかと考えられる。

なお、本遺構に伴うものとは断定できないが墓壙周辺の包含層掘削時には図20・図版81に示した鏡形とみられる土製品が1点出土している。これについては鏡形という特殊な遺物であることや、出土した位置関係からは本来木棺墓4に伴う遺物であった可能性も考えられることからここに実測図を提示しておくとともに、合わせて資料の詳細な紹介をしておくこととした。

鏡形土製品は重量25g、直径5.5cmの正円形に近い円盤状のもので、1面には鈕を表現したものとみられる突起が作り出されている。鏡面とみられる面は緩やかな凸面を呈しており表面の一部には何らかの工具による擦痕が認められ、鏡背は緑の部分を残し鈕の周囲を指頭による押捺Aで窪められている。鈕はこの押捺Aによって周囲を窪めることによってより高さを出しているが、緑部より鈕の頭は2mmほどしか突出していない。鈕の造形は粘土の貼り付けによるものではなく、鏡本体から粘土を摘まむことによって作られたものとみられ、鏡背面からは鈕へは緩やかに移行して突起部が作り出されていた。なお、鈕の高さは約5mm、基部の径は約2.5cm、頂部の径は約1cmであった。

緑部の形状は側面に平坦な面を持つもので、面の幅は部分的には2mmと薄いところもあるものの大半は7mm程度と一定の厚みがある。この側面の平坦面には全体にわたって縦方向にヘラ状工具による刻み目が多数付けられているが、本来の鏡にはこの刻み目にあたる造形は無く、何を表現したものであるのかは不明である。

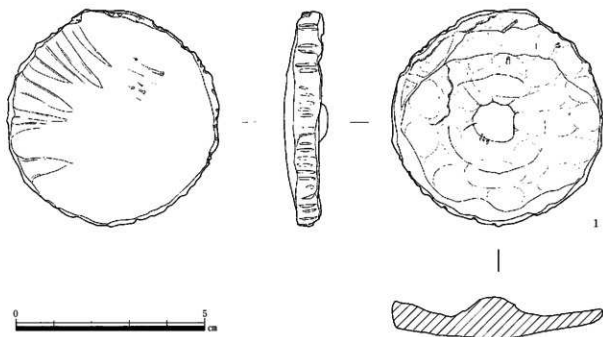


図20 7H-22J区包含層出土鏡形土製品(1/1)

(3) 方形周溝墓

1. 方形周溝墓1 (図21~24・図版29~33,61-下~62-上)

第27次調査第1トレンチにおいてその存在が確認された方形周溝墓で、調査時には直角に曲がる2ヶ所のコーナーが確認されるとともに、墳丘の約半分が調査されたもので、その後の第31次調査においてトレンチを拡張して墳丘の全体像を明らかにしたものである。

方形周溝墓1は8J-V15、16・W15、16・X15、16の6区にまたがって検出されたもので、墳丘の主軸は磁北に対してMN-42°-Wであった(図21)。

墳丘は一辺4.72m×5.12mの規模を持つが墳丘盛土は削平を受けて存在していない。周溝は墳丘の周囲を全周するもので東北辺の溝は中央部で幅94cm、深さ25cm、東南辺の溝は中央部で幅64cm、西北辺の溝は幅74cm、深さ20cm、西南辺の溝は幅82cm、深さ28cmであった(図22・図版32)。

周溝の底面の状況は比較的平らで溝の中央部が深く、コーナー部がやや浅くなっている。東北辺と西北辺の接点では特にこの傾向が顕著であったほか、東南辺の溝は東北辺の溝とのコーナー付近で分岐し、方形周溝墓1の東を流れる南北溝に接続していた。

本方形周溝墓に伴う埋葬施設は判然としないが墳丘の中央よりやや西寄りではMN-50°-Wに主軸を持った長さ2.8m、幅80cm、深さ10cmの墓壇状の土坑が検出されている(図21・図版30-下~31)。この土坑は埋土が灰褐色粘質土の1層で検出地点が墳丘の中央からはやや西にずれていることや、埋土に棺の痕跡が確認できなかったこと、遺物の出土が皆無であったことなどから積極的に埋葬施設とは判断しがたいが、その平面プランや墳丘と土坑の方位が一致することなどからは中心的な埋葬施設とは考え難いものの、方形周溝墓に伴う埋葬施設の一つとなる可能性も考えておきたい。

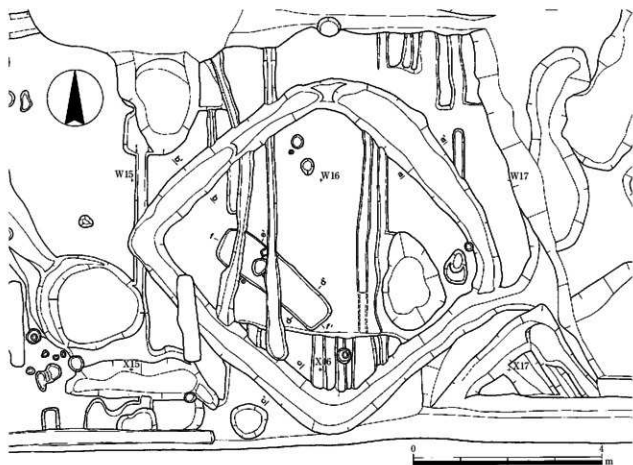


図21 方形周溝墓1 平面図 (1/80)

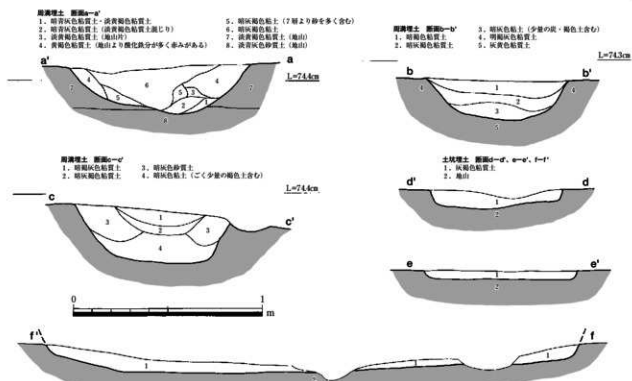


図22 方形周溝墓1 周溝及び土坑断面図 (1/20)

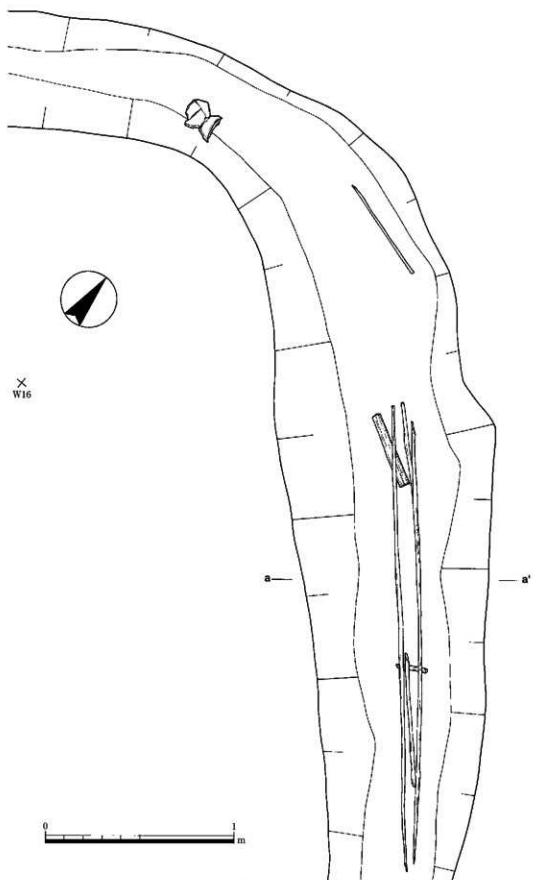


图23 方彩周溝墓1 東北辺周溝遺物出土状況 (1/20)

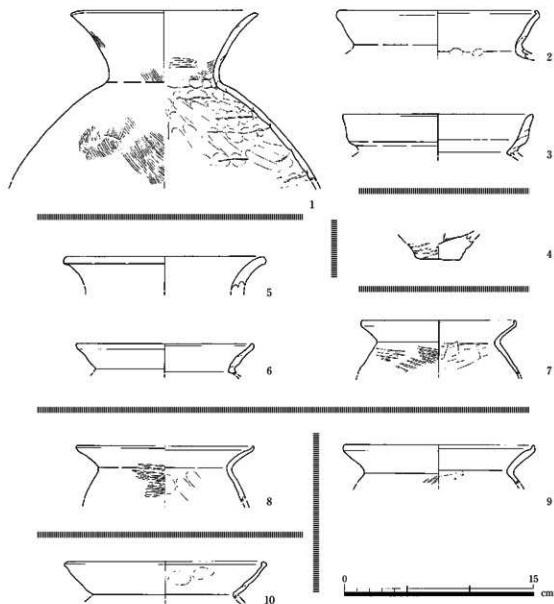


図24 方形周溝墓1出土土器 (1/3)

1～3北東溝第5・6層 4北西溝第1層 5～7南西溝第1層 8南西溝3層 9南西溝4層 10南東溝2・3層

遺物については遺構に伴うものはあまり多くない。周溝からの遺物は各辺ともほぼ均等に土器の出土があったが、中でも西南溝からの土器の出土が若干多い傾向にあった。木製品は東北溝のほぼ中央部、層的には図22-⑥層から細長い棒材を含めて数点の加工木が出土しているが(図23・図版29-下)、用途の明確なものはない。

出土遺物のうち図示できたものには図24・図版61-下～62-上に示した土器群がある。図には各周溝から出土したものをまとめて示しており出土した層位にもばらつきがあるが、先述したように残存する周溝の深さは約30cm程度であり、遺構の残存状況から考えると殆どが本来の埋土の下層にあたるものと考えている。これらの土器群の所属時期は布留0式期と考えられることから、方形周溝墓1の構築時期は布留0式期を下限としてそれ以前と言えるが、上限については不明と言わざるを得ない。

2. 方形周溝墓 2 (図25~31・図版34~36,62-下,63)

第47次調査において検出された方形周溝墓で、直角に曲がるコーナー部と東辺と南辺の周溝が確認されている。地区的には7 J-25V、8 J-1 V・2 V、7 H-2 Uの4区にまたがって検出されており、墳丘の主軸は東辺周溝を基準にするとはほぼ座標北を示している(図25)。

墳丘は大きく削平を受け盛土が確認できない上に、周溝もコーナー部が1ヶ所しか確認されていないため正確な規模を知ることは困難であるが、残された周溝の状況から墳丘の規模は一辺6.16m以上

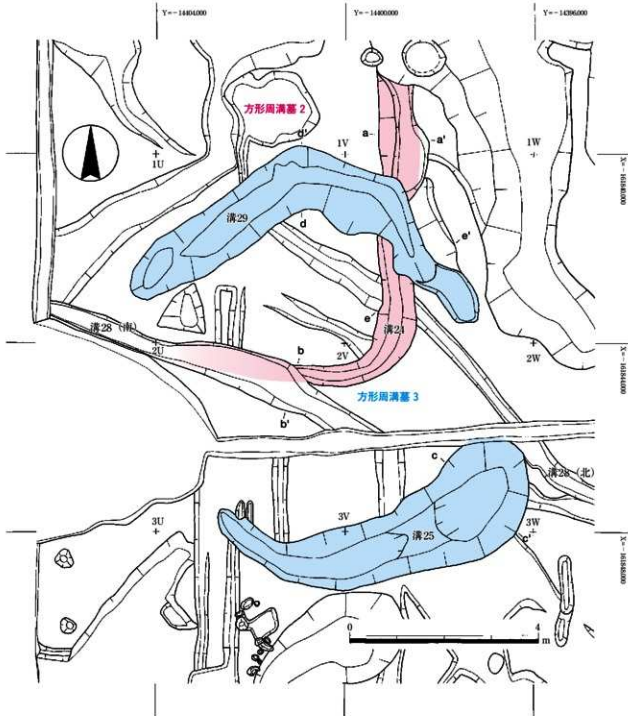


図25 方形周溝墓2・3平面図(1/80)

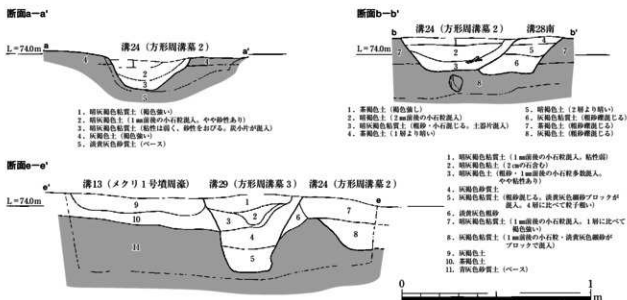


図26 方形周溝墓2 周溝断面図 (1/20)

×4.8m以上の規模を持つことが判明している。周溝はその多くが失われているが、本来は墳丘の周囲を全周するものであったとみられ、東辺の溝は残存長約6m、中央部で幅77cm、深さ16cm、南辺の溝は残存長約5.2m、幅63cm、深さ17cmであった(図25・図版34.35)。

この方形周溝墓は他の遺構との重複関係が多く、東辺の溝の中央部では溝28北溝及び後述する方形周溝墓3の北東辺の溝との切り合い関係が確認されている。調査時に作成された断面図の観察では方形周溝墓2は溝28北溝よりは新しく、方形周溝墓3北東辺溝よりは先行するものであることが確認されている(図26・図版36)。

また、南辺の溝は南東方向から延びてくる溝28南溝との重複関係がある。図25に示した遺構平面図では方形周溝墓2の南辺溝が溝28(南)に切られたような完掘状況となっているが、これは遺構の深度の違いによるもので、本来は図26のb-b'断面図からも確認できるように南辺溝が後出するものであり、図25にアミ掛けで示した部分まで周溝の存在が確認されている。

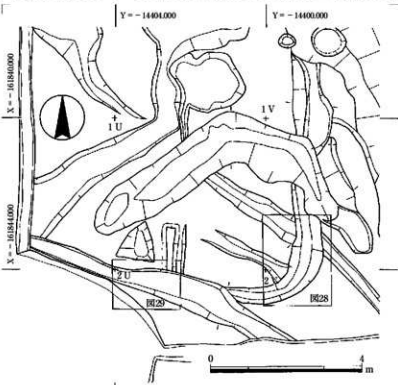


図27 方形周溝墓2 遺物出土状況割付図 (1/100)

これら周溝底面の状況は比較的平坦なもので溝の断面形状は逆台形を呈するが、方形周溝墓1のようにコーナー部が浅くなる傾向は認められなかった。

周溝埋土は東辺溝で3層があり、①層が褐色の強い暗灰褐色粘質土、②層が1mm前後の小さな石粒を含み、やや砂質の強い暗灰褐色土、③層はやや砂質を帯びた暗灰褐色粘質土であり、この層には炭の薄片が少量混入していた。南辺溝の埋土もやはり3層で、①層が茶褐色土、②層が2mm前後の小さな石粒を含んだ暗褐色土、③層が粗砂や小石の多く混じる暗灰褐色粘質土であった。

方形周溝構築時の基盤層の状況を見ると南辺溝周辺では⑦層の粗砂や礫の混じった茶褐色土や⑧層の粗砂や礫の混じった灰褐色土がベースとなっており、東辺溝周辺では④層の褐色の強い灰褐色土や⑤層の淡黄灰色砂質土がベースとなっていた。

これらはいずれもが扇状地上の2次的な堆積物であり、色調や土質は異なるものの今回の調査地は全域が同様の土壌によって構成されている。

遺物の出土状況について見てみよう。この遺構からの出土遺物は南東隅のコーナー部（図

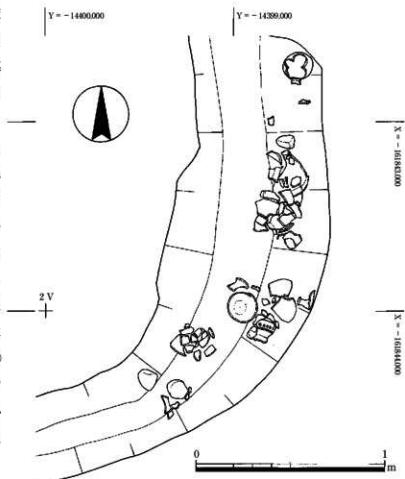


図28 方形周溝墓2 周溝南東コーナー部遺物出土状況 (1/20)

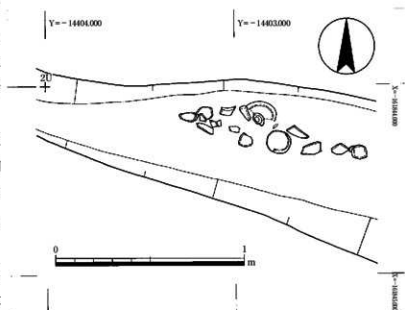


図29 方形周溝墓2 南辺周溝遺物出土状況 (1/20)

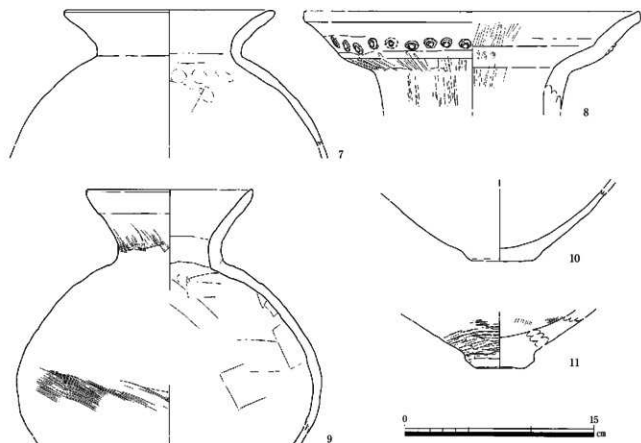
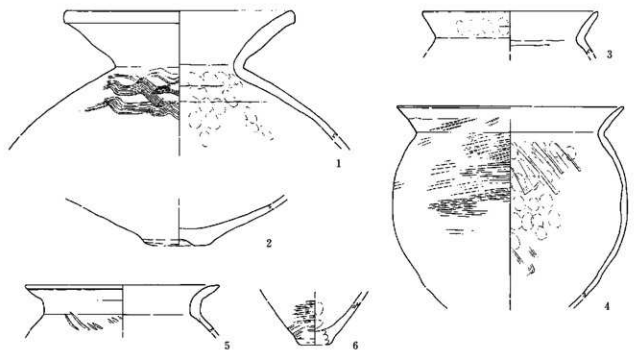


图30 方形周溝墓2 出土土器1 (1/3)
1~6 茶褐色土 7~11 暗灰褐色粘質土

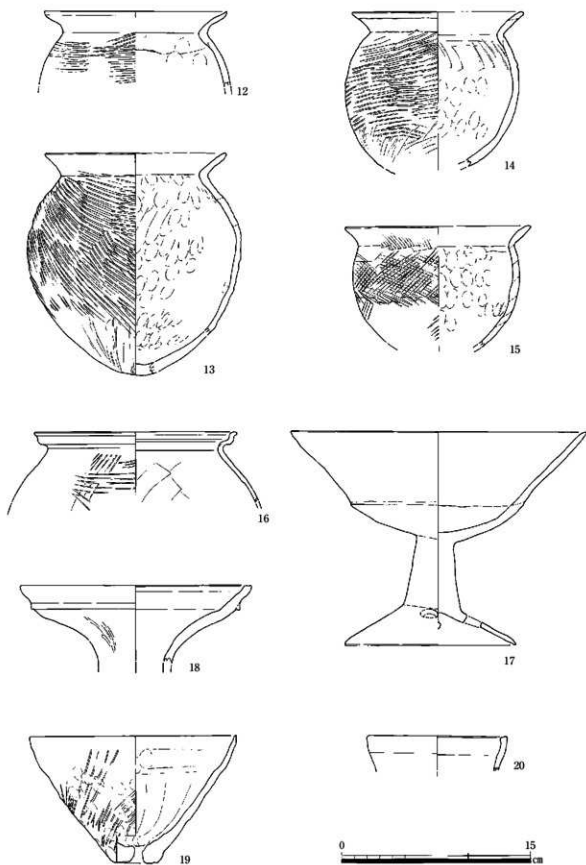


图31 方形周溝墓2 出土土器2 (1/3)
12~20暗灰褐色粘質土

28・図版34,35-上)と南溝中央よりやや西側(図29・図版34,35-上)の2ヵ所から出土しているが、遺構の残存状況の悪さとは対照的に遺物の出土量は比較的多い。

図30・31には本方形周溝墓から出土した土器を提示しているが、このうち図30-1と図31-12・16・18・20に示したのが南溝から出土した土器、他は南東隅コーナー部から出土した土器である。

量的には圧倒的にコーナー部分に集中して出土する傾向にあり、ここを中心に土器の投棄が行われたものと考えられる。

層位的には図30の上段に示したものが最上層にあたる①層に相当する部分から出土したもので埋没時期に最も近い土器であり、下段及び図31に示したものが下層にあたる③層上面周辺から出土したもので、構築時期に最も近い土器群といえる。

これらの土器群から考えられる遺構の構築時期は、上・下層出土土器ともに庄内3式期に属するものと考えられることから本遺構の構築時期も厳密には庄内3式期を下限としてそれ以前としか言えないが、遺構や遺物の出土状況などからは概ね庄内3式期のものと考えておきたい。

3. 方形周溝墓3(図25,32~47・図版34,37~41,64~68-上,81-下左,82-1)

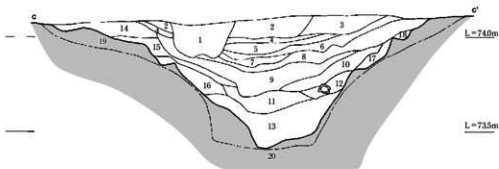
第47次調査において検出されたもので後世の削平による途切れはあるものの、溝25と溝29によって区画された方形周溝墓である。地区的には8J-1V・2V・3V、7H-25U、8H-1U・2U・3Uの7区にまたがって検出されており、墳丘の主軸は座標北に対してGN-43°-Wであった(図25・図版34)。

墳丘は先述したように方形周溝墓2と重複するもので、一辺約6.3m×約5.6mの規模を持つが、墳丘盛土は削平を受けており存在していない。周溝は本来墳丘の周囲を全周するものであったとみられるが南西辺と北東辺がそれぞれ途切れてしまっており、便宜的に残存する南東~南西辺の周溝を溝25、北西~北東辺にかけての溝を溝29と命名して調査を行っている。

溝25は周溝南西辺にあたる部分が幅48cmと最も狭く、南東辺にあたる部分の中央部では幅1.28mの溝状遺構だが、東に行くほど幅が広くなり東端では幅2mの不自然な土坑状の窪みとなっている。溝の深さは西端で3cm、南西隅コーナー部で46cm、南東辺中央で40cmあり、南東隅コーナーにあたる周溝の東端部分では最大68cmと各コーナー部分がやや深い傾向にありながら東へ向かうほど深くなっていく様子が伺えた。本遺構出土の遺物は図41・42に示したとおりだが、土器以外には図36に示した木炭なども出土している。

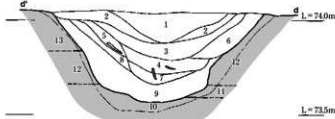
周溝埋土の状況を見ていくこととしよう。溝25は遺構東端の土坑状に深くなっている部分で断面図が作成されている(図32の断面c-c')。これとみると断面の北側に確認できる⑭・⑮層や南側の⑰・⑱層は中央に位置する④・⑨層や⑧・⑩層に切られるような堆積状況を呈していることから、先行して存在した径約2mの土坑の埋没後に溝25が掘削されていたものを調査段階で同一遺構として完掘してしまったのではないかと考えられる。この考えに立てば北側から④・⑨・⑩・⑧層を結んだ線が本来の溝25の埋土とみられ、遺構の規模も幅1.5m、深さ40cmと他の周溝部分と整合性のある規模となる。従って、溝25から出土したとされる遺物には先行する土坑からのものが混入している可能性

断面c-c'



- | | |
|----------------------------------|--|
| 1. 暗灰色粘質土（2～3cmの層状になる） | 11. 灰褐色粘土（9層に比べて明るく粒が粗い、2m前後の小石散り混入） |
| 2. 暗灰色粘質土（1層より粘性弱い） | 12. 灰褐色粘質土（やや砂性をおびる） |
| 3. 暗灰色粘質土（やや砂性をおびる） | 13. 灰褐色粘質土（砂質土混じる。全体に砂性をおびるが粘性強い、5m前後の小石粒や中混入） |
| 4. 暗灰色粘質土（砂質土混じる） | 14. 灰褐色土（粗砂混じる。褐色強い） |
| 5. 暗灰色粘質土（細砂混じる） | 15. 灰褐色土（粗砂混じる。14層より強い） |
| 6. 灰褐色土（粗砂混じる） | 16. 暗灰色粘質土（13層より暗く、砂り強い） |
| 7. 暗灰色粘質土（厚小片や中混入。やや粘質） | 17. 灰褐色土（砂性おびる） |
| 8. 灰褐色粘質土（面砂・5m前後の小石粒が混入） | 18. 17層とほぼ同じ |
| 9. 暗灰色粘土（やや砂性おびる。2m前後の小石粒や中混入） | 19. 暗灰色粘質土（粗砂粒が混入） |
| 10. 暗灰色粘質土（粗砂・5m前後の小石粒や中混入。粘性強い） | 20. 青灰色砂質土（酸化鉄分散により褐色をおびる） |

断面d-d'



- | |
|------------------------------|
| 1. 茶褐色土（2～3mmの小石粒混入。硬く、やや粘質） |
| 2. 茶褐色土（粗砂混じる） |
| 3. 灰褐色粘質土（紋子細かい。褐色強い） |
| 4. 暗灰色粘土（上部片・本器片混入） |
| 5. 灰褐色砂質土（褐色強い。土器片混入） |
| 6. 暗灰色粘質土（褐色強い。粘性強） |
| 7. 褐色粘土 |
| 8. 暗灰色粘質土（6層より褐色強い） |
| 9. 灰褐色粘質土（砂質土混じる） |
| 10. 青灰色細砂 |
| 11. 茶褐色細砂 |
| 12. 灰褐色土（砂質土混じる） |
| 13. 茶褐色土 |



図32 方形周溝墓3 周溝断面図（1/20）

も考えられるとともに、図35に示した遺物出土状況図や図36に示した木鎌は厳密には溝25、土坑いずれの遺構に伴うものかの特定は難しい。また、図41・42に示した土器類についても個々の出土位置の記録が無く遺構の時期を判断する材料としては慎重に扱う必要があるが、これについては後の遺構の構築時期を考える中で検討することとした。

さて、溝25出土とされる遺物の中には特殊な遺物として木鎌がある。縦向遺跡ではこれまでの調査で10例の出土が確認されているが、そのうち8例がこの旧小学校跡地内での調査で発見されたものである。図36に示した木鎌は先述したように土坑出土遺物の可能性も残るものの、出土例の少ない遺物であることからその詳細を報告しておくこととした。

溝25出土の木鎌（図36・図版81-下左）は僅かに茎の先端が欠損しており、正確な全長は不明だが残存長は6.1cm、鎌身の長さ4.3cm、茎の長さ1.8cmを測る。鎌身は茎に近づくにつれてなだらかに窄ませて作られており、鎌身部分の断面形状は二等辺三角形に近く長辺8mm、短辺5mm、基部は長径5mm、短径4mmと円形を呈している。材の樹種については奈良教育大学の金原正明氏に分析をお願いし、モ

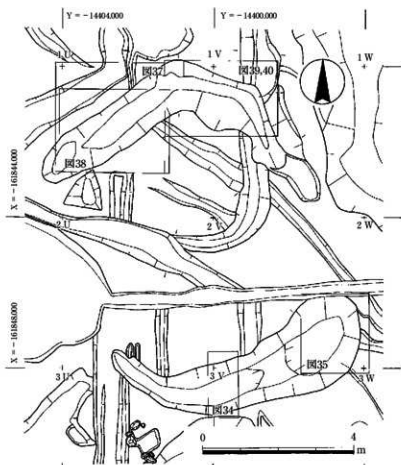


图33 方形周溝墓3 遺物出土狀況剖付圖 (1/100)

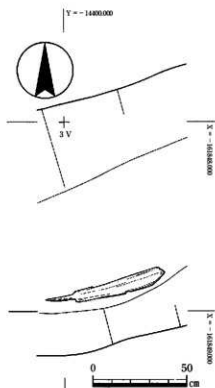


图34 方形周溝墓3 溝25遺物出土狀況圖1 (1/20)

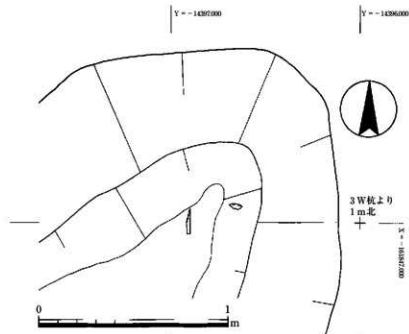


图35 方形周溝墓3 溝25出土狀況圖2 (1/20)

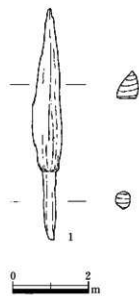


图36 方形周溝墓3 溝25出土木劍 (1/1)

ミ属製との鑑定結果を頂いている。

溝29は周溝北西辺にあたる部分は幅約1.2m、北東コーナー部で幅1.4mとほぼ一定の幅を持つものであるが、北東辺では幅80cmと南に向かうほど徐々に細くなり途中で途切れてしまっている。溝の深さは西端で26cm、中央部で30cm、北東コーナー部で67.7cm、北東辺で30cmであり、コーナー付近が著しく深くなる傾向にあった。本遺構出土の遺物には若干の木製品および図43～46に示した土器群があるが、その殆どは周溝北西辺の西部及び北東コーナー部より出土したものである。

周溝の埋土は概ね灰褐色系の粘土あるいは粘質土で構成されるもので、北東コーナー部の断面図(図32の断面d-d')では⑤・⑧層が③・④・⑦層に切られたような痕跡があり、再掘削が行われている可能性も考えられるが、後述する図26のe-e'断面には再掘削の痕跡が認められないことから判断は保留しておきたい。なお、埋土の中位にあたる④・⑤・⑦層には土器や木製品が多く含まれる

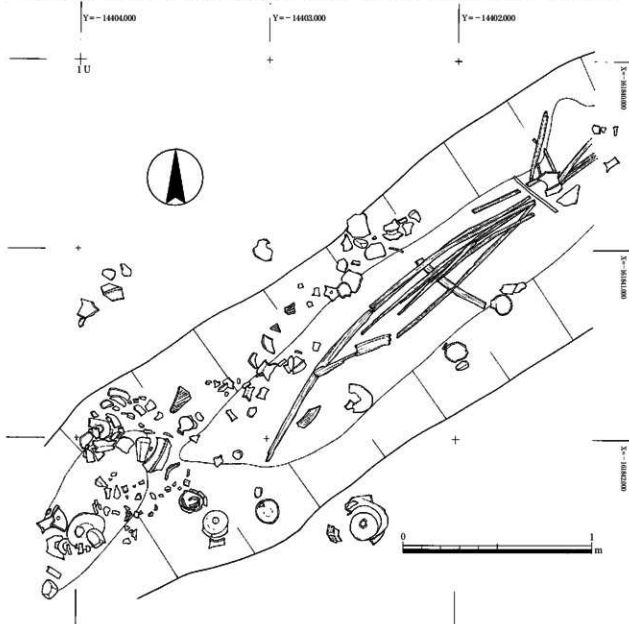


図37 方形周溝墓3 溝29上層遺物出土状況(1/20)

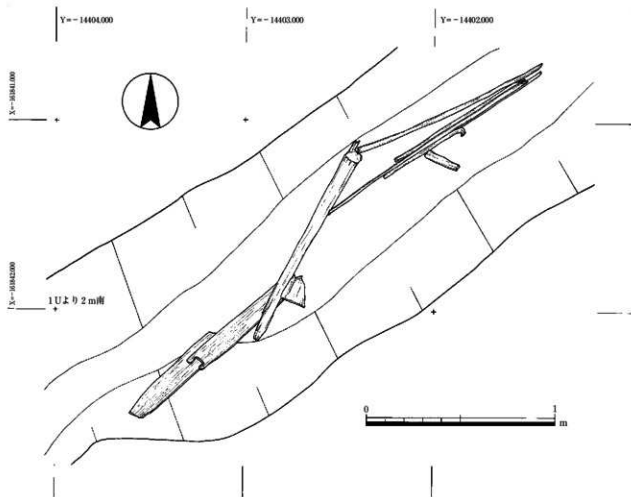


図38 方形周溝墓3 溝29下層遺物出土状況(1/20)

傾向があり、図43～46に図示した多くの土器はこの層位から出土したものと考えられる。

北東辺の南端、図26の断面 e - e' 地点の埋土も灰褐色系の粘土や粘質土で構成されている。この地点からの遺物の出土は少なく、古式土師器の小片が数点あったのみである。断面の形状は逆台形で深さ40cm、幅52cmと他の地点に比べて深く幅の狭いものであった。

これら周溝からの遺物の出土量は溝29からのものが多く、先述したように北西辺の西部及び北東コーナー部の2ヵ所にまとまって遺物の出土があった。このうち周溝北西辺からの遺物には古式土師器と加工木があり、溝中央部から西端にかけての埋土下層上面から上層にかけては図37・図版40-上、に示したように多くの遺物が集中しているが、土器については総じて上層からの出土が多い傾向にあった。加工木については用途の不明な棒材や板材の出土があったが土器群よりも下部に位置するもので、下層上面に位置する物のほかに図38・図版40-下に示したように溝中央部の下層内からもまとまった出土があった。この傾向は北東コーナー部においても同様で、溝中央部から西端部よりも出土量は少ないものの図39に示したように下層上面から上層にかけて遺物の出土が顕著であり、土器群は上層からの出土が目立つものであった。加工木については量が少ないものやはり土器群よりも下部の下層上面に位置するものと、図40に示したように下層内に位置するものが確認されている。

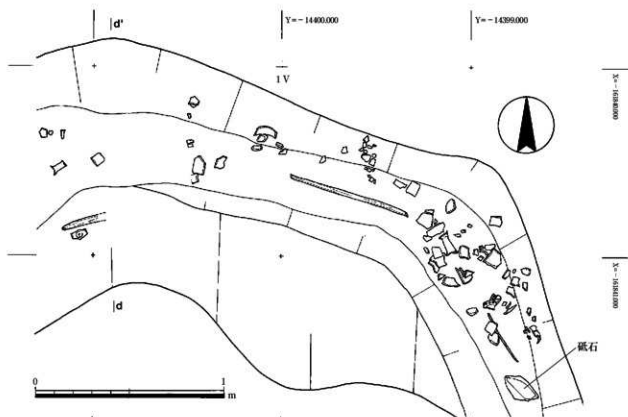


图39 方形周溝墓3 溝29上層遺物出土狀況 (1/20)

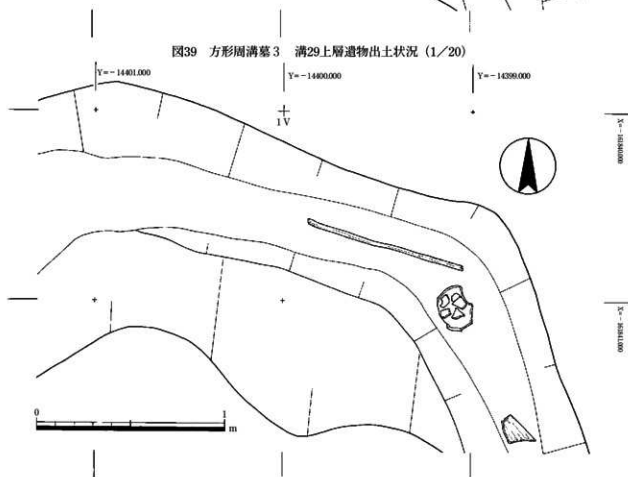


图40 方形周溝墓3 溝29下層遺物出土狀況 (1/20)

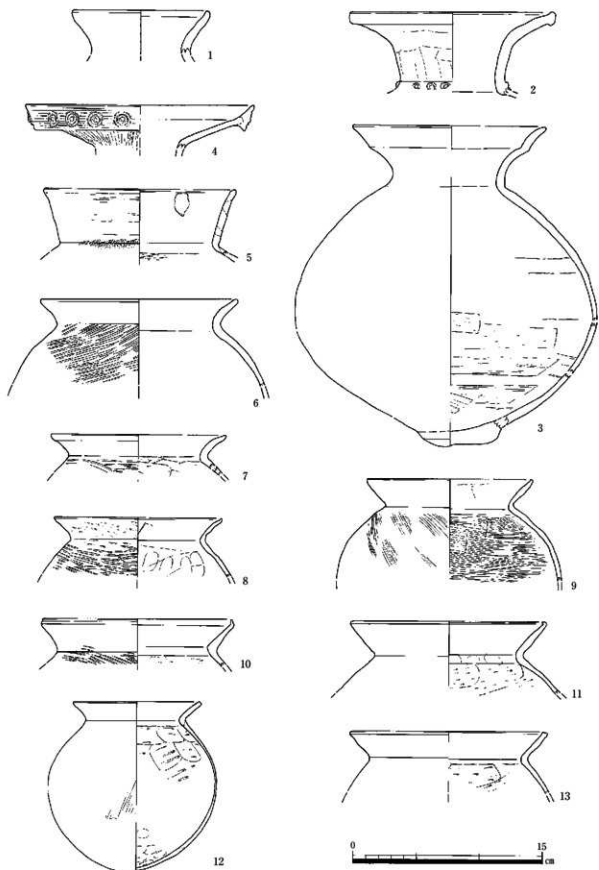


图41 方形周墓3 冢25出土土器1 (1/3)

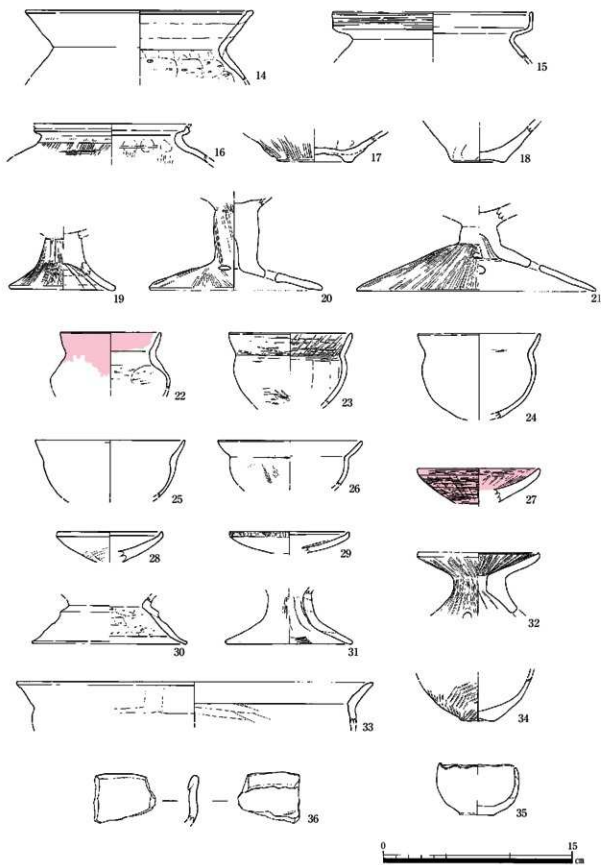


图42 方形周溝墓3 溝25出土土器2 (1/3)

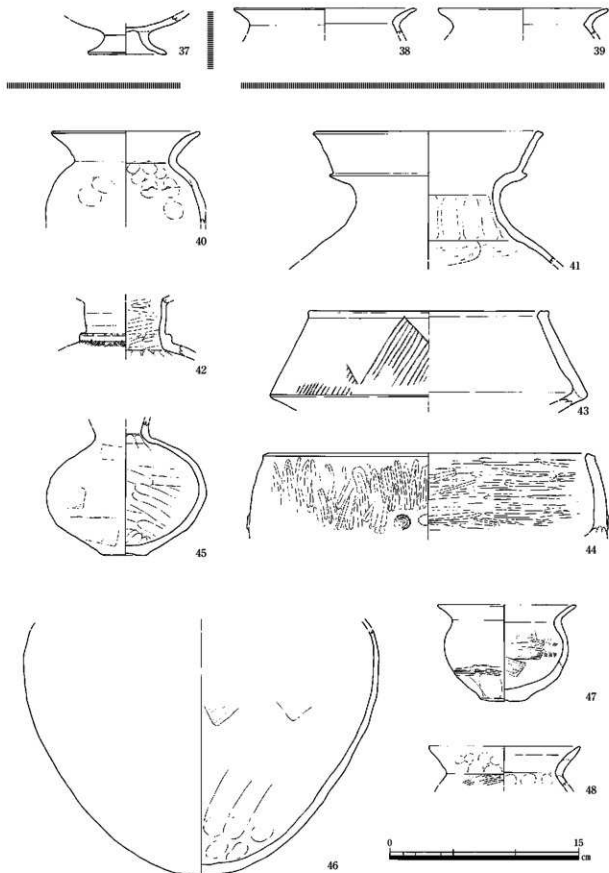


图43 方形周溝墓3 溝29出土土器1 (1/3)
37茶褐色土 38·39灰褐色粘質土

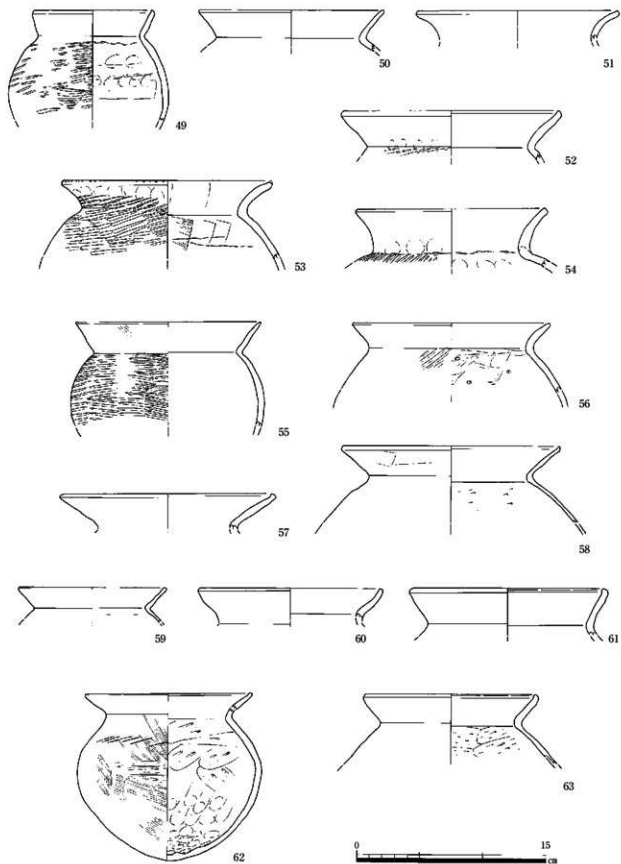


图44 方形周溝墓3 溝29出土土器2 (1/3)

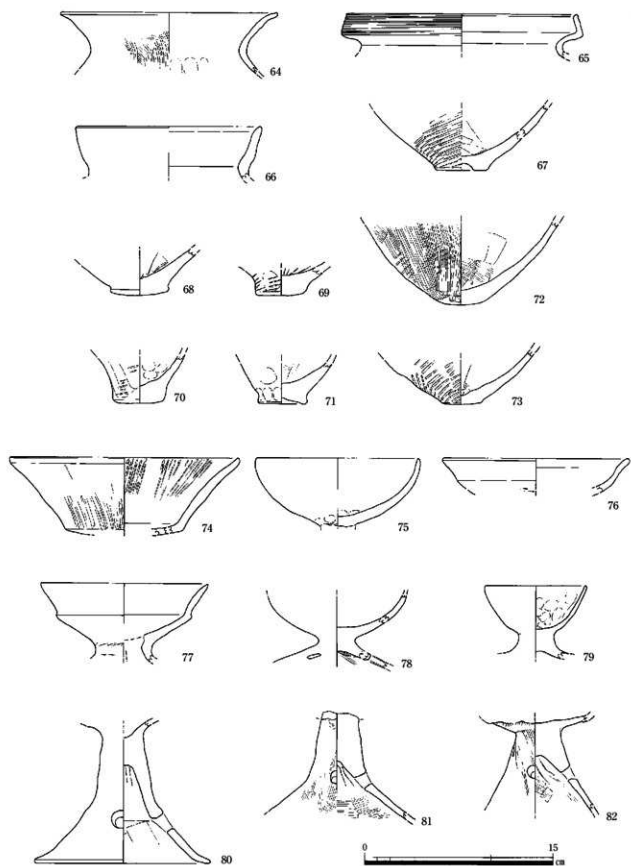


图45 方形周溝墓3 溝29出土土器3 (1/3)

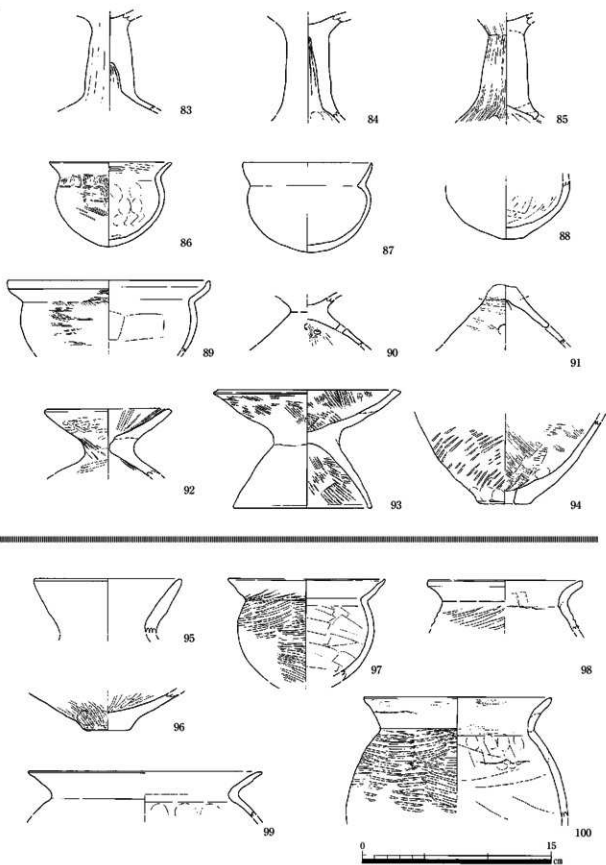


図46 方形周溝墓3 溝29出土土器4 (1/3)
95~100暗灰褐色粘質土(腐植土混じる)

なお、溝29からは土器・加工木以外に比較的大型の砥石が1点出土している(図47・図版82)。出土状況は図39・図版40-上に示したとおり周溝北東辺の埋土下層上面から上層内に含まれるが大型砥石が隣接するメクリ1号墳の後方部西側周溝にあたる溝13からもまともに出ており、これらと同時に投棄された可能性も考えられる。

砥石は途中で破断しているが長さ19.6cm、幅10.8cm、重量は1.1kgのもので、奥田尚氏に分析をお願いしたところ竜王山付近でとれる黒雲母

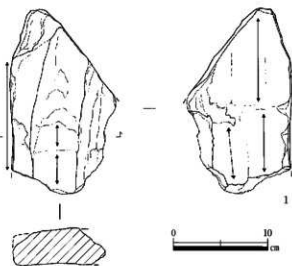


図47 方形周溝墓3 溝29出土砥石(1/4)

花崗岩製の鑑定結果を頂いている。この砥石は図に示したように両面及び片方の側面に滑らかな部分が確認でき、少なくとも3面は使用されていたようで、この部分には幅の広い研磨面と縦方向の擦痕が確認でき、石材の大きさと合わせて大型の鉄製品を研いだ物と考えられる。

溝25からの遺物の総量は溝29より少ないもので、図化できたものには図41、42・図版64～65-上に示した土器群があるが、出土状況図などの記録に不備があるため個々の個体の出土位置や層位などを細かく特定することはできなかった。

遺構の構築時期について見てみよう。本方形周溝墓の構築時期を知るには溝25・29から出土した土器の年代観に頼るしかないが、先にも触れたようにこれらの溝からの遺物には出土した層位の土色名、出土状況図、レベル高など何らかの記録が残されていたものの、土層断面図に記載された土色と遺物に付された土色との対応が無いこと、出土状況図は下層遺物から上層遺物までの多くの層位にまたがる遺物が同時に図化されており、個々の遺物が本来所属していた層位が正確に確認できない状態となってしまう。

このため、溝25出土土器は上・下層の遺物が混在する状態で図示しており、溝29出土土器では図43-37が図32の断面d-d'①層 茶褐色土、38・39が③層 灰褐色粘質土と上層に属する遺物であることと、図46-95～100がラベルには溝底部との記載がされていたことから最下層に属する遺物であることは確認できているが、他の図43-40～図46-94までの個体については下層上面から上層上面までの遺物が混在した状態でしか図示することができなかった。

この様な状態で本遺構の構築時期を類推するのは非常に困難である。最下層出土土器には図示した弥生形甕のほかに庄内形甕などの小片が含まれる一方、明らかに布留式期に下る個体の存在は確認できないことから、ここでは庄内3式期に構築された可能性が高いとしておくが、確実に同層に伴うことが判明している遺物は量的に少ないことから上・下層混在遺物に含まれる土器のうち最も新しい要素である布留0式期まで下る可能性も考えておきたい。なお、遺構の埋没時期についても溝25・29の土層断面、上・下層混在遺物の様相から布留0式期には完全に埋没していたものと考えられる。

(4) メクリ1号墳

1. はじめに

旧小学校用地中央部、標高74m前後の地点において検出された前方後円墳である。この古墳は第23次調査において後方を東西に横断する形でトレンチが設定され、東西周濠と後方部の一部の調査が実施されていたが、調査区が矮小であったことから当時は古墳とは認識されずに西側周濠をO-15溝、東側周濠をO-20溝と、別遺構として調査が行われていた。

その後、第47次調査において広範囲な調査が実施されるに至り遺構の全容が明らかにされたもののこの段階においても前方後方墳の存在は認識されておらず、調査終了後に行われた調査検討会の席上において初めて前方後方墳の可能性が指摘されたものである。(図48)

なお、この古墳の東側の墳丘及び周濠は第23次調査区部分を除いて未検出となっている。これについては第47次調査時の遺構検出レベルが後方部西側では標高74.2m前後であったのに対し、後方部東側では74.4m前後と東側の検出面が一段高いレベルで検出されていることと、調査時点ではO-20溝などが前方後方墳の周濠にあたることは考えられていなかったため、図版53-下に示したように第47次調査の遺構検出段階には第23次調査時の遺構検出面より数10cm高い包含層上面で調査が行われてしまったためだと考えられる。

2. 墳丘

墳丘主軸は方位に則って築かれているが、先述した調査面の事情により墳丘及び周濠の多くが未検出になっていると考えられるため各部の規模は測点によって異なるが、墳丘規模は基底部で全長28mを測る。後方部は北・東・西辺が直線的に延びるのに対して南辺は東西のコーナー部からクビレ部へと向いつつ前方部側へと若干張り出しており、コーナー部では南北長が18.7mであるのに対し、クビレ部では南北長19.2mと50cm長くなっている。後方部の東西長は20mと若干東西長が長いものの本来は正方形を志向したものと考えられ、前方部はクビレ部からの長さで8.8m、後方部の南辺両コーナーを結ぶラインと墳丘中軸線との接点からの長さは9.3mを測る(図82)。

土層観察の結果、墳丘盛土は削平により全く確認できておらず、埋葬施設についても同様である。本来の墳丘高やその詳細な構築状況を知ることはできないが、墳丘規模や周濠の状況からはあまり大きな墳丘を持っていたとは考えられず、低い墳丘を持つものであったと考えられる。外表施設については周濠内からの出土遺物には葺石や埴輪などの存在を窺わせるものは皆無であり、これらはもともと存在しなかったものと判断される。

3. 周濠

残存状況は非常に悪いものの、墳丘の周囲からはこれを取り巻くように周濠が検出されている(図48)。後方部北側の濠は最も残りの良い部分では幅2.8m、深さ35cmを測るが他の遺構との切り合いの影響から西へ向かうほど遺構の残りが悪く幅が狭くなり、西端部では後方部西側の周濠との接続も不明瞭なものとなっている(図版42)。周濠の東端、東側周濠との接続部にあたるコーナー部分では導水溝とみられる北東方向から延びてきた幅3.2mの溝と接続しており、溝の底面のレベルは

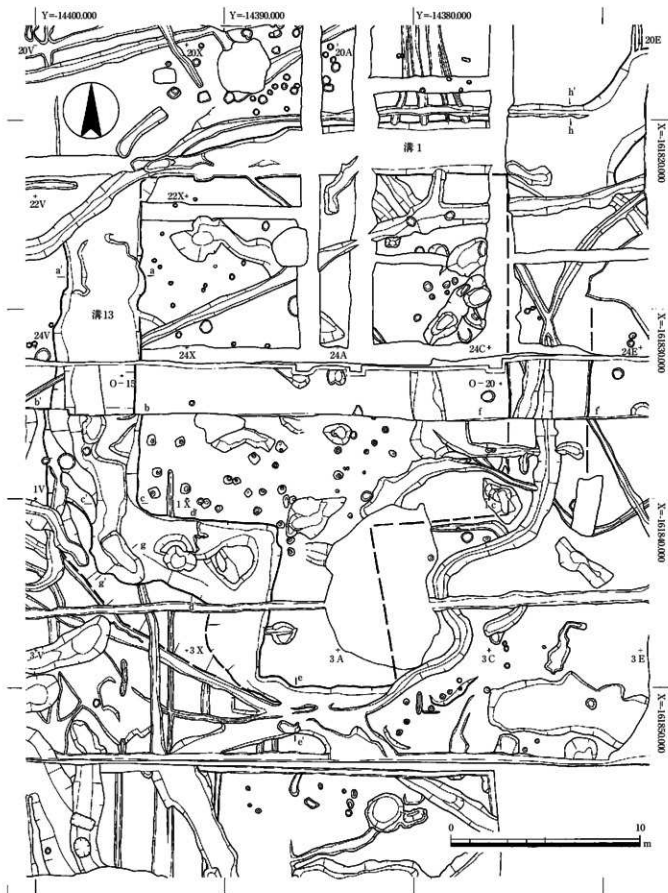


図48 メクリ1号墳 平面図 (1/200)

74.15mと導水溝部分が周濠部に比べて約15cm高くなっている（図版46-上）。これらの部分の周濠埋土については調査時に断面図などの記録が作成されておらずその状況は不明である。

後方部西側の周濠は最大で幅5m、深さは地点によってばらつきがあるが最も深い場所の標高は73.40m、深さにして約60cmを測るものである。後世の削平により北辺周濠と接続する遺構北端外層部の状況が判然としないものの比較的その残りは良好である。なお、溝の断面形状は浅い皿形を呈し、埋土の多くは暗灰色や暗灰褐色の粘質土で占められている（図49上段③～⑦層）。

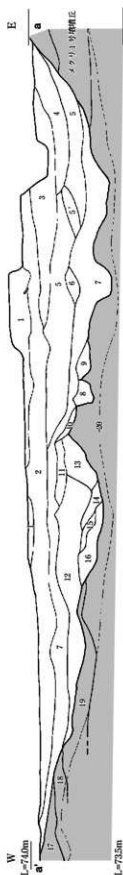
後方部東側の周濠は先述したように未検出の部分が多いことから、第1次調査で検出されO-20溝として調査された部分でしかその様子を知ることができない（図版54-上）。周濠の規模は幅4.2mを測り、濠の中央から西半には墳丘に沿って走る布留式期の溝16の一部とみられる溝状の落ち込み（図51下段の⑬・⑭層）と、周濠の一部となるのか溝状の別遺構となるのか判然としない深さ50cmの窪み（図51下段の⑮・⑯層）があるが、この2つの窪みを別遺構と仮定すると周濠そのものの深さは15cm程度の窪みに過ぎない状況にある。

また、遺構の埋土についても先述した2つの窪みを別遺構と仮定すると周濠部分には周濠全域を覆うV層暗茶褐色粘質土しか埋土が存在しないこととなるが、V層は周濠のみならず周辺で普遍的に存在する包含層と認識されていることから南壁部分では本来の遺構埋土は確認できない状況にある。本来は検出された周濠の中央から北側に南壁断面には表れない埋土が存在していたとみられるが、これについては埋土に関する記録が無く詳細は不明である。

前方部西側面の周濠は本来墳丘に沿う形で廻るものと考えられるがその状況はやや複雑で、周濠の外枠のラインは図48に破線で表したように後世の遺構である溝28の肩部と重なる形で後方部南西コーナーに対応する付近から前方部前面へと丸く廻るものであり、周濠へ向かっての勾配はごく緩やかなものであった。この周濠外枠のラインの内側には墳丘の形状に沿って後方部南西コーナーからクビレ部の方向へとクランクしていく明瞭な落ち込みの肩部が検出されており、むしろこちらが本来墳丘に対応する周濠の肩部になるものと考えている。この落ち込みは前方部を東西に横断する溝状の攪乱を境に遺構平面図には記載が無くなくなってしまっているが、調査時点ではその存在は認識されていたようで、その様子は図版7-下段や図版58の写真からも窺うことができる。平面図への記載が欠落している理由は不明だが調査時の記録作成時点で図化が失念された可能性も考えられ、ここでは写真などの記録を基に破線でそのラインを復元することとした。周濠底面の状況は比較的凹凸があり、あまり平坦ではない（図版55）。周濠の深さはクビレ部付近が標高73.8mと最も深く、周濠肩部からクビレ部へとやや播鉢状に落ち込むもので、深さは最大で45cm程度のものであった。埋土の状況は図50上段に示したとおり暗灰色の砂質土や黒褐色粘土・粘質土で構成されており他の地点よりは比較的水平的な堆積状況を呈しているが、北側には灰褐色の土や砂質土が墳丘側から流れ込んだような堆積状況を呈しており土質から考えて墳丘盛土が流出した可能性が考えられる。

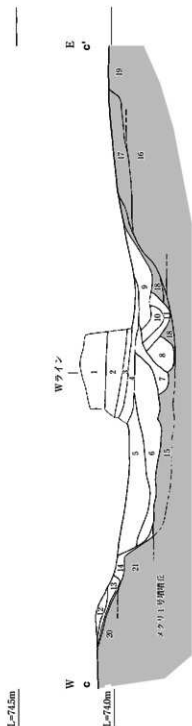
前方部前面の周濠は時期の異なった複数の溝の切り合いにより、その肩部の判定が非常に困難な状況となっている。図52の平面図及び図50中段の土層断面図にその切り合い関係を整理して提示したが、

後方部側面掘埋土 断面a-a'



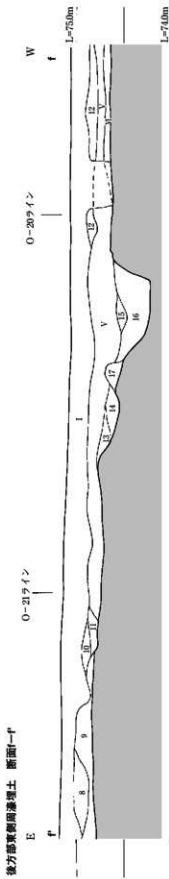
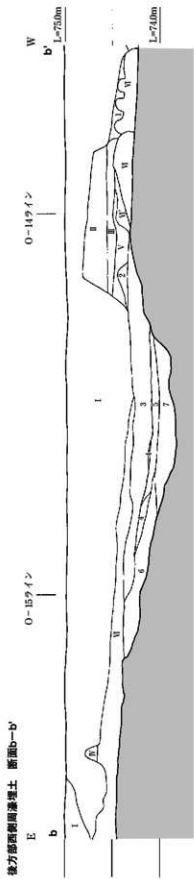
1. 黒灰色粘土 (厚1・粗砂混じる)
2. 黒灰色粘土 (厚の層が少し厚くなる。埋め土下?)
3. 黒灰色土 (黒灰色白粘土片混じる。埋め土下?)
4. 黒灰色粘土 (厚1.5m。埋め土下?)
5. 黒灰色粘土 (厚1.5m。埋め土下?)
6. 黒灰色粘土 (厚1.5m。埋め土下?)
7. 黒灰色粘土 (厚1.5m。埋め土下?)
8. 黒灰色粘土 (厚1.5m。埋め土下?)
9. 黒灰色粘土 (厚1.5m。埋め土下?)
10. 黒灰色粘土 (厚1.5m。埋め土下?)
11. 黒灰色土 (粗砂混じり)
12. 黒灰色粘土 (黒灰色白粘土層混じる)
13. 黒灰色粘土 (粗砂混じる)
14. 黒灰色粘土 (粗砂混じる)
15. 黒灰色粘土 (粗砂混じる)
16. 黒灰色粘土 (粗砂混じり)
17. 黒灰色粘土 (粗砂混じり)
18. 黒灰色粘土 (粗砂混じり)
19. 黒灰色粘土 (粗砂混じり)

後方部側面掘埋土 断面c-c'



1. 黒灰色土 (厚2.5m前後の小石散入)
2. 黒灰色粘土 (厚2.5m前後の小石散入)
3. 黒灰色粘土 (厚2.5m前後の小石散入)
4. 黒灰色粘土 (厚1.5m前後の小石散入。やや砂性を帯びる)
5. 黒灰色粘土 (厚1.5m。厚5m前後の小石散入。粗砂混じり)
6. 黒灰色粘土 (厚1.5m。厚5m前後の小石散入。粗砂混じり)
7. 黒灰色粘土 (厚1.5m。厚5m前後の小石散入。粗砂混じり)
8. 黒灰色粘土 (厚1.5m。厚5m前後の小石散入。粗砂混じり)
9. 黒灰色粘土 (厚1.5m。厚5m前後の小石散入。粗砂混じり)
10. 黒灰色粘土 (厚1.5m。厚5m前後の小石散入。粗砂混じり)
11. 黒灰色粘土 (厚1.5m。厚5m前後の小石散入。粗砂混じり)
12. 黒灰色粘土 (厚1.5m。厚5m前後の小石散入。粗砂混じり)
13. 黒灰色粘土 (厚1.5m。厚5m前後の小石散入。粗砂混じり)
14. 黒灰色粘土 (厚1.5m。厚5m前後の小石散入。粗砂混じり)
15. 粗砂 (黒灰色粘土混じる)
16. 黒灰色粘土 (粗砂混じる)
17. 黒灰色粘土 (粗砂混じる)
18. 黒灰色粘土 (粗砂混じる)
19. 黒灰色粘土 (粗砂混じる)
20. 黒灰色粘土 (粗砂混じる)
21. 黒灰色粘土 (粗砂混じる)

図49 メクリ1号墳側面断面図1 (1/20)



基本土層

- I. 現成土 (小学校造成時の影塚土)
- II. 黒灰色粘土 (田表土)
- III. 黄灰色粘土 (床土)
- V. 灰褐色土 (中實土)
- VI. 暗茶褐色粘質土 (包含層1)
- VII. 暗茶褐色粘質土 (包含層2)
- W. 暗茶褐色粘質土 (砂粒と土団片を多量に含む、包含層2)

後方部西側周濠埋土 断面b-b'

1. 灰褐色土
2. 黒褐色粘質土 (周濠埋土最上層)
3. 黒色粘土 I (周濠埋土上層)
4. 黄褐色粘土 (周濠埋土下層)
5. 黄褐色粘土 (中實土)
6. 砂礫 (暗灰色粘土混じり、周濠埋土下層)
7. 黒色粘土 (暗灰色砂混じり、周濠埋土最下層)

後方部東側周濠埋土 断面f-f'

8. 暗褐色土 (おすみに包含む)
9. 暗褐色土 (おすみに包含む)
10. 暗褐色粘質土 (標準的)
11. 暗褐色粘質土
12. 砂
13. 砂
14. 灰褐色土
15. 灰褐色土
16. 黒褐色粘質土 (標準的)
17. 黒褐色粘質土 (標準的)



図51 メクリ1号塙周濠断面図3 (1/40)

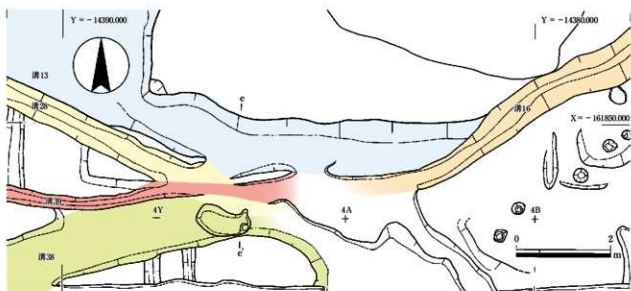


図52 メクリ1号墳前方部前面遺構の切り合い詳細図(1/80)

ここでは前方部前面の周濠埋土は図50の溝13とされた⑫～⑬層がこれに相当するものと考えられ、周濠と切り合いがあるのか否か、或いはその前後関係は不明だが周濠の南側には埋土が①～④・⑪層で構成された溝38が存在している。この溝38と前方部周濠である溝13との接点付近には溝28と溝39が存在している。両溝の切り合い関係は溝39が溝28を切り込んで掘削されたものであり、溝39の埋土には⑨・⑩層が相当し、溝28の埋土には⑤～⑧層が相当する。なお、前方部東側にはコーナー部をかすめて溝16が南西方向に走っているが、溝28・39いずれの溝に接続するものかは不明である(図版56)。

以上のような複雑な切り合い関係のため、前方部前面の周濠にあたる溝13の南肩部を平面的に確認するのは非常に困難な状況である。前方部前面において唯一作成された土層断面図である図50中段の断面では周濠肩部が溝39によって破壊されているものの、その幅は1.3m分が確認でき、他の遺構との位置関係や底面の地山のりなどを勘案すると本来は幅1.5m程度であったと推定される。

4. 遺物の出土状況

メクリ1号墳の遺物はすべて周濠から出土しており、出土地点は後方部北側と後方部西側、前方部西側面、前方部前面の4ヵ所に大きく分けられる。個々の出土状況は図53に出土状況図の割付図を提示し、図54～61には調査時点で作成された出土状況図を提示しているので参照されたい。

(1) 後方部北側周濠(図54～57・図版42～46-上)

後方部北周濠からの遺物の出土状況は図54～図57に示している。この区域からの出土土器は小片が多いことから掘削の過程で取り上げられてしまったとみられ、出土量に比べて出土状況図では土器があまり図化されていない傾向にあると考えられる。

なお、調査担当者からの聞き取りによると図上でその範囲は明確に示されていないが後方部北側の周濠は旧校舎の建物基礎によって東西方向に長い攪乱を受けていたうえに、周濠埋土と後世の遺構との切り合い関係が激しかったため個々の遺構を厳密に分けて調査することができず、別遺構からの遺物が混在している可能性が高いとのことであった。実際、遺物の整理過程において後方部北周濠出土

土器の詳細な検討を行ったところ、不自然な時期の遺物の存在が多数確認できたことから、この部分の遺物については別遺構からの混入資料が多いと判断し、今回の報告からは除外することとした。

しかしながら、出土状況図に示された木製遺物の多くは現在所在不明な遺物ながら、その殆どが周濠堆積の下層部分からの出土とみられ、上部に混在した土器資料とは異なりメクリ1号墳に伴う遺物である可能性が高いと判断されることから、出土状況について概観しておくこととする。

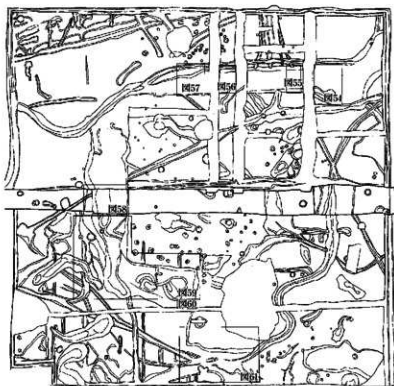


図53 メクリ1号墳遺物出土状況割付図(1/400)

図54に示したのは後方部北東隅部付近の遺物出土状況図で、先述したように図のすぐ北東側には導水溝と考えられる溝が接続している。この部分から出土した木製遺物には幅54cm、長さ2.2mの板材のほかに長さ20cm前後の木端が多く認められる(図版43)。いずれもがその用途は不明であるが、木端は図で見る限り鋭利な金属製の刃物で裁断されたようにみられるものが多く、よく似た事例として勝山古墳の第3次調査の北側クビレ部において出土した木端が挙げられよう。

図54の西側に隣接する部分の遺物出土状況は図55に示している。用途不明な木製遺物が数点出土しているが、図54に近い地点ながら、先にみられたような裁断された木端はあまり見当たらず、遺物の量もやや少量である。

後方部のほぼ主軸線上に位置する周濠部分の遺物出土状況は図56に示している。この地点では土器片の出土が目立ち、木製遺物は用途不明のものが少量認められるだけである。土器片については下層出土のものが多いと判断され、メクリ1号墳に伴うものが多いと考えられるが、取り上げ時点で他の遺物と混ぜられてしまったとみられ、これらを抽出することはできなかった。

後方部の主軸線上よりやや西側からの出土遺物は図57に示している。この地点からの出土遺物は周濠内でも北側に集中して出土する傾向にあり、用途は不明ながら長さ98cm、径4cmの棒材や長さ27cm、幅8cmの板材などの加工材の存在が確認できる。

(2) 後方部西側周濠(図58, 59, 64~72・図版46-下~53, 68-下~76-118)

図58は第23次調査において作成された後方部西側周濠中央部からの遺物の出土状況図である。メク

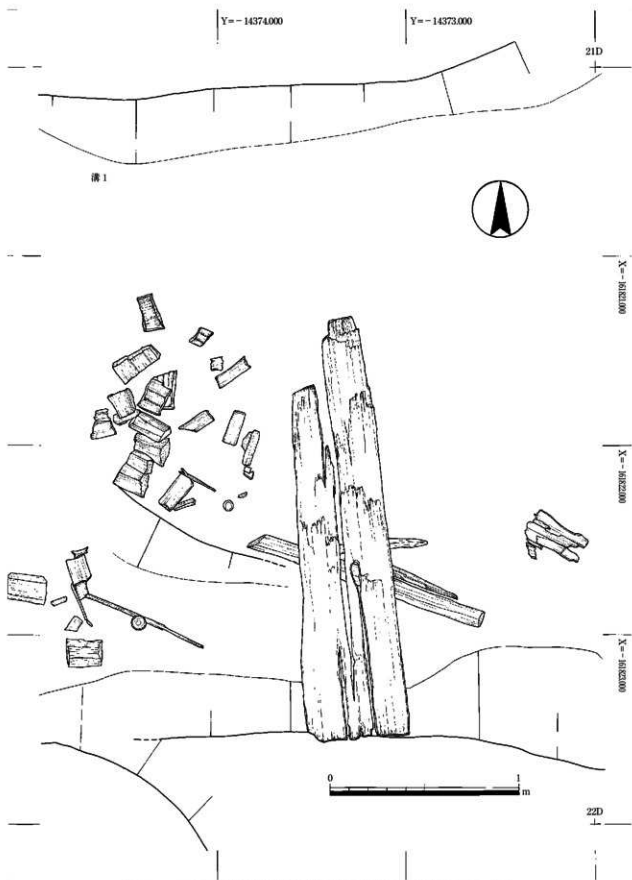


図54 メクリ1号墳後方部北側周溝（溝1）遺物出土状況1（1/20）

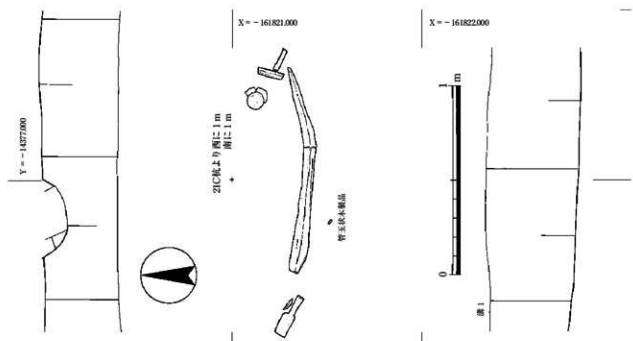


図 55 メクリノ草場後方部北側周濠 (溝1) 遺物出土状況2 (1/20)

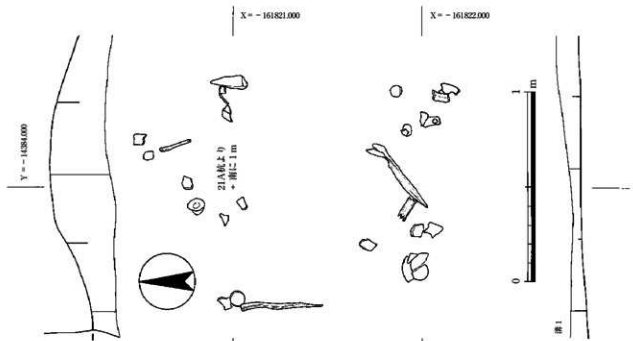


図 56 メクリノ草場後方部北側周濠 (溝1) 遺物出土状況3 (1/20)

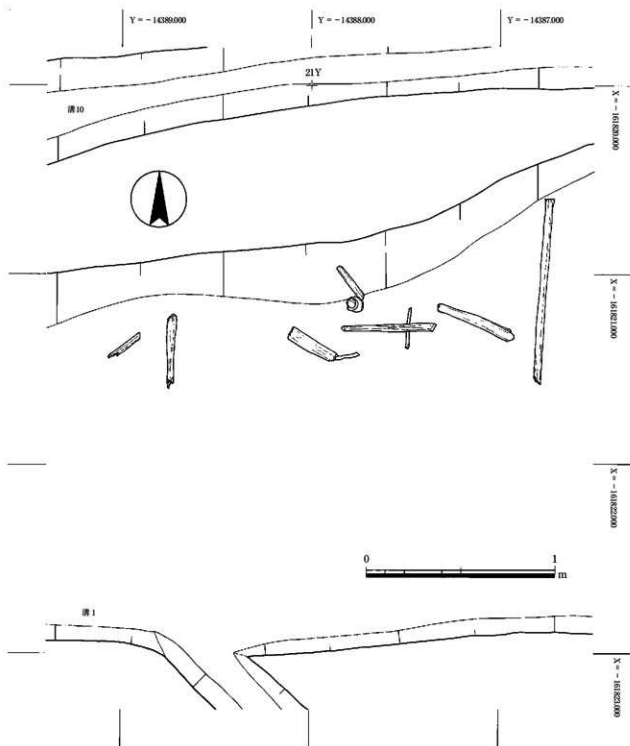


図57 メクリ1号墳後方部北側周濠（溝1）遺物出土状況4（1/20）

リ1号墳の調査においては本地点が唯一、層位的に出土状況図が作成された部分であり、ここでは主に周濠埋土の上層にあたる図51上段の③層下部及び下層にあたる⑤層上面に集中する遺物が図化されているがこれらの土器群は周濠内に最下層埋土にあたる⑦層と下層埋土にあたる④～⑤層が推積した段階のものであり、その時間幅は不明ながら築造時期とは若干のタイムラグがあるものである。

これには図64-9～図65-26に示した土器群が含まれており、弥生形甕や庄内形甕の他に有段高坏

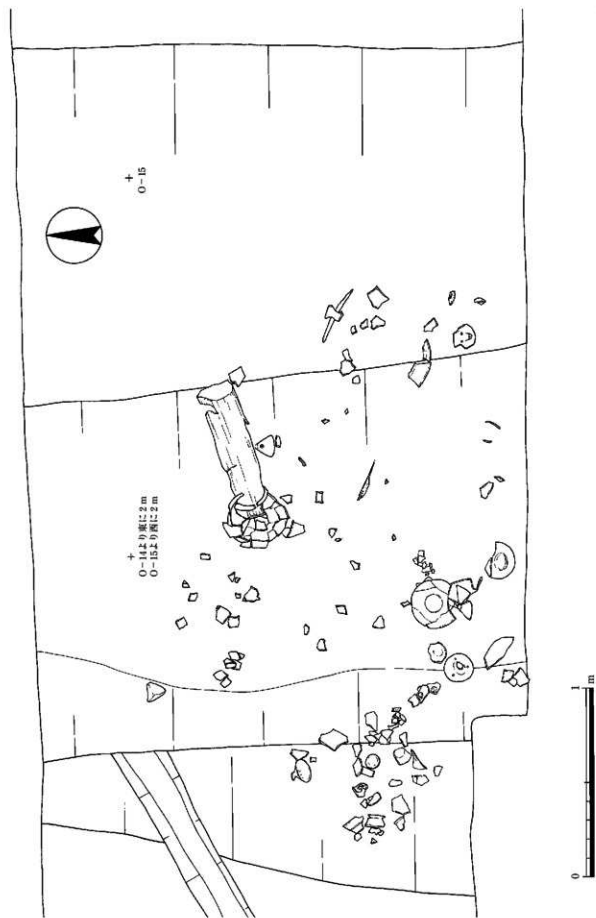


図58 メクリ1号墳後方部西側周濠(0-15溝)遺物出土状況(1/20)



図59 メクリ1号墳後方部西側～前方部西側周濠(溝13) 遺物出土状況 (1/40)

や小型の鉢、ミニチュア土器などがあつた。詳細は築造時期の項目で細述するが、数多いメクリ1号墳に伴う土器群の中で出土層位や地点を特定できる数少ない資料の一つである。

この他、出土状況が図化されたものではな

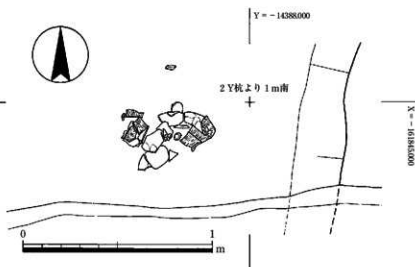


図60 メクリ1号墳前方部西側周濠（溝13）遺物出土状況（1/20）

いが第23次調査地より北側の23～24ラインにかけても少量の遺物の出土があつた。図66～29～40に示した土器群がこれにあたり、量は少ないながらも周濠底部からも遺物が出土しているようである。

後方部西側周濠では第23次調査区の南隣接部分からも土器溜りとして図59に示したように周濠西側から投棄されたような状態で多量の遺物の出土が確認されている。これらの遺物については他の部分と同様に出土した層位の土色の記載はあつたものの、周濠埋土についての記録が少なく個々に出土層位を特定することはできていない。このことから出土遺物を提示するにあたっては土器に添付されたラベルの土色単位に遺物を提示することとしているが、その順序は必ずしも層位的な上下関係を示すものではないことを断つておく。

さて、土器溜りとして一括で取り上げられた出土遺物は図67～41～図72～112に示すことができた。これらについては先述したように周濠埋土との対応は不可能ながら、暗灰褐色土と記載されたラベルが添付されており、図72～113～118に示した土器群には暗灰色粘質土と記載されたラベルが添付されていた。

(3) クビレ部・前方部西側周濠（図59.60.73～76～157.79.80・図版51.54～下.55.76～119～79～157.82～1～9）

後方部西側の南コーナー部からクビレ部・前方部西側にかけての周濠部分からの出土遺物は小さな単位でまとまりを持ちつつも各地に散在する傾向がみられる（図59・60）。この部分からの出土遺物は図73～119～図76～157に示しているが、やはり殆どの個体が周濠埋土との関係が特定できなかったためラベルに記載された土色単位にまとめて図示することとした。このうち図73～119・120は暗灰褐色土、図73～121～図75～152には暗灰色粘質土、図75～153には暗灰色土（粗砂混じり）のラベルが添付されていたが、図76～154～157に図示した土器群のみは先述した周濠断面図（図50）のd-d'断面の④層に対応することが判明しており、比較的上位の堆積層にあたることから周濠の埋没時期を示すものとして注目される。

なお、前方部西側周濠からの出土遺物には特筆すべきものとして図79・80に示した8点の砥石があ

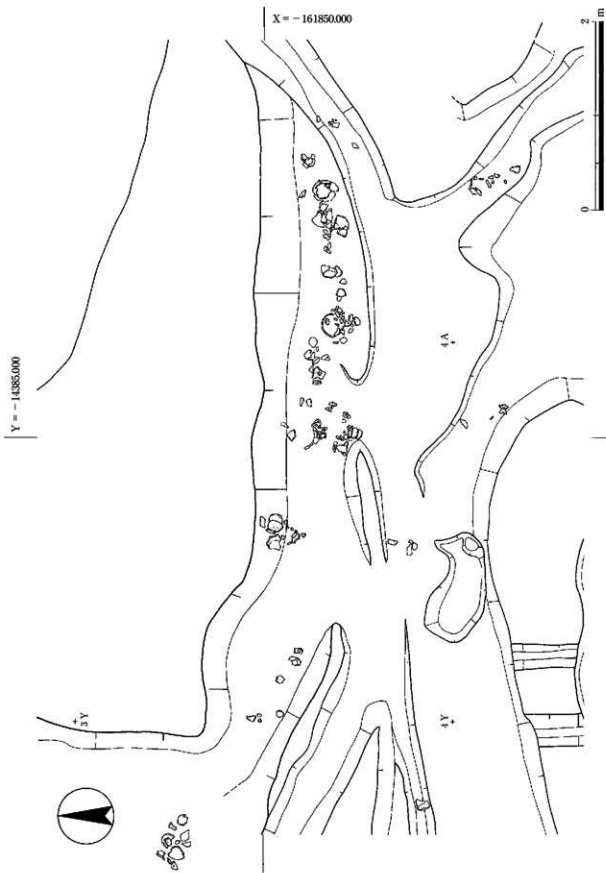


図61 メクリ1号墳前方部前面周濠濠遺物出土状況(1/40)



图62 メクリ1号墳周濠内検出足跡 (1/100)

る。原因は不明だがそのすべてが端部を破損しており、正確な大きさは不明ながら最も大きな個体で全長37cmを超えるものがあり、非常に大型の礫石が集中して出土していることは注目すべきことである。出土層位は図79-1～図80-6までの6点が周濠断面図（図50上段）のd-d断面の④層に対応することが判明しており、図80-7～9は暗灰色粘質土と記載されたラベルが添えられていた。

（4）前方部前面周濠（図61.76-159-78.81・図版56.57-上.79-158-81-182.82-10）

前方部前面の周濠部分からは図61に示したように前方部前面に沿って落ち込む細い溝状の周濠内の墳丘裾部から東西方向に列を為した状態で土器の出土があり、量は多くないもの図76-158～図78-182に示したように25点の土器を図示することができた。

このうち図76-158は淡黄灰褐色粘質土と記載されたラベルが添付されており、図50中段のe-e'周濠断面図の④層からの出土遺物であることが判明している。次に、図76-159～図77-173は暗灰褐色粘質土からの出土を示すラベルが添付されていたが図50中段のe-e'周濠断面図では上層にあたる②層と下層にあたる⑦層の双方に同一名称の埋土があり、どちらの層位に属するものかは明確に記録が無い。しかしながら、図版56に示した出土状況写真や調査時に作成された出土状況図記載のレベル高などを勘案するとこれらは周濠下層埋土にあたる⑦層からの出土遺物であると判断している。

なお、図77-174～176・78-177～182は添付されたラベルには暗灰色粘質土と記載されているが、土層断面図との照合は不可能であった。

5. 足跡状遺構（図62・図版55.57-下）

周濠埋土除去後のメクリ1号墳後方部西側から前方部にかけての周濠底面からは多くの足跡状遺構が検出されている。この足跡状遺構は後方部北東隅の周濠と導水溝との接点付近においても若干確認されているが、ここではその存在が顕著であった前方部側のものを図62に示しておくこととする。

足跡状遺構の分布は後方部西側周濠から前方部前面にかけては周濠内に限定して検出されており、周濠部分の掘削時、或いは周濠掘削後のぬかるんだ地盤を人が歩行したことによりその痕跡が残されたものと考えられるが、前方部前面から東側にかけては周濠の推定範囲を外れてさらに東方向の調査区外へと痕跡が続くことが確認されている。

周濠外へと続く部分については調査時の記録が無く地盤面の状況が不明であるが、足跡状遺構が残された当時は何らかの要因により地盤が湿潤な状態にあったものと推定される。残された記録によると調査段階には個々の足跡状遺構について足の左右や前後関係についての詳細な検証が行われたようであり、これについての記録も作成されていたが、個々の足跡の対応関係や人の歩行ルートを示すような規則性は認めることはできなかった。

6. 出土遺物（図63～81・図版68-下～80.81-上.81-下右.82）

メクリ1号墳からの出土遺物のうち本報告に図示できたものは土器資料182点、石製品10点、木製品2点と総数194点にのぼる。このうち第23次調査分を除く第47次調査出土遺物の殆どが先の方形周濠墓の出土遺物と同じく出土した層位の土色名、出土状況図、レベル高などの記録が残されていたが、周濠埋土の土層断面図に記載された土色と遺物に付された土色とに対応が全く無いことに加え、出土

状況図は下層遺物から上層遺物までの多くの層位にまたがる遺物が同時に図化されており個々の所属層位が正確に確認できない状態となってしまっている。

また、遺物の出土状況の項目でも述べたように後方部北側周濠からの出土遺物については旧校舎建築時の基礎による攪乱や、周濠と同一の東西方向に延びる溝状遺構などとの切り合い関係が激しかったことから遺物の取り上げに混乱が起り別遺構からの遺物が数多く混入した状況にあったため、後述する管玉状木製品を除いて今回の報告からはこれを除外することとした。

このため本書では基本的に遺物を第23次調査分と第47次調査分に大きく分けた上、第47次調査分については後方部西側周濠出土遺物とクビレ部・前方部西側周濠出土遺物、前方部前面出土遺物の3ヶ所に分割して提示することとしている。

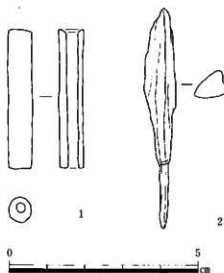
なお、この3ヶ所からの遺物のレイアウトについては個々の地点で土器に添付されていたラベルの記載を尊重し、ラベル記載の土色単位でまとめて図示することとしたがその順序は必ずしも層位的な上下関係を示すものではないことを断っておく。

(1) 木製品 (図55.63・図版44.45-下.81-下)

第47次調査の墳墓遺構における木質遺物のうち特筆すべきものは後方部北側周濠の7 J-21 B地区暗灰色粘土層から出土した管玉状木製品とされる木製品 (図55.63-1・図版44.81-下) の他に、7 H-22 T地区の木鏝 (図63-2・図版81-下)、明確な出土地点は不明ながら後方部北周濠出土の円座状樹皮製品 (図版45-下) が挙げられる。

管玉状木製品の名称については調査段階で命名されたものだが現時点では穿孔部分も含めて人為的な遺物か否かの判断が難しい。木鏝については添えられたラベルには北側周濠と同一名称の溝1からの出土との記録が残されているが、22 T地区はメクリ1号墳の周濠の範囲からはかなり西側に離れた場所にあっている。これについては調査段階で北側周濠と周濠の北側を東西に走る溝遺構とを明確に区別して調査が行われなかったことを表すものと考えられ、木鏝はその出土地点の記録からは本来周濠北側の溝遺構に伴うものと考えられるものである。円座状樹皮製品についても溝1との記録があるだけで出土状況の写真が残されているものの地点についての記録が無く、後方部北側周濠に伴うものか、木鏝と同じ別遺構の可能性が高い溝に伴うものかは判然としにくい。

このような状況からこれらの木製品とメクリ1号墳との関係については積極的な評価は避けておきたいがいずれの遺物も出土例のあまり多くない特殊な遺物であることを鑑み、ここでは資料紹介も兼ねてその詳細について報告しておくこととする。



管玉状木製品は全長3.7cm、直径7mmの円筒形のもので、図63 メクリ1号墳溝1出土木製品 (1/1)

火を受けたとは断定できないが材のすべてが黒く炭化してしまっている。材の長軸方向には径2.5mm前後の穴が貫通しており、この穴は小口部では片側にやや偏って開いているもので、一見人為的に開けられたもののように考えられるが、本来このような自然の穴が貫通した樹木が存在するのかが不明であり、穴が人為的なものか否かについては保留しておきたい。なお、材の側面部分が自然のままだと仮定した場合、穴が自然のものであるならばその配置は等しく小口部の中央にくるはずであるが、小口部において穴が片側に偏るといことは材の側面を丸く加工する研磨の工程を経た可能性が考えられる。

木鐮は残存長5.8cm、鐮身の長さ4.1cm、茎の長さ1.7cmを測り、鐮身は茎に近づくにつれてなだらかに窄ませて作られている。鐮身の断面形状は長辺が9mm、短辺が4.5mmの重な三角形を呈しており、茎の形状は径2.5mm前後のやや重な円形であった。なお、材の樹種については奈良教育大学の金原正明氏に分析をお願いし、ヒノキ製との結果を頂いている。

円座状樹皮製品は写真のみしか記録が無い大きさや材質等は一切不明であるが、過去の出土事例や写真から判断するとヒノキあるいはスギなどの樹皮を丸く円座形に束ねたものを同じくヒノキあるいはスギの樹皮で結束したものと見られる。この樹皮製品は纏向遺跡においては過去にも古墳周濠や集落域から十数例の出土が確認されているものである。

(2) 土器 (図64～78, 図版68下～81上)

第23次調査出土土器は図64・65に図示している。図64-1・2は図51上段に示した周濠断面図のうち、周濠埋没後に上部に堆積したVI層からの出土で、図64-3～6は断面図では一部にしか現われていないが平面的には広範囲に分布していた周濠埋土最上層にあたる②層からの出土、図64-7・8は埋土上層にあたる③層からの出土、図64-9～図65-26に示したものは③層下部から⑤層上面にかけての出土、図65-27・28は⑤層からの出土遺物である。

このうち、図64-1～6は周濠の完全埋没からその上部に包含層が形成される時期を示すものであり、図64-7・8は上層堆積層の時期を、図64-9～図65-26は下層堆積層と上層堆積層の間の時期を示し、図65-27・28は下層堆積層の時期を示すものである。

これらの土器群のうち比較的まとまった土器の出土があった下層堆積層と上層堆積層の間に含まれる土器の年代は庄内3式期に属するものと考えられる一方、最上層・上層・下層出土土器は量的に少なく細かな時期を特定するのは困難であったがいずれも庄内式期を外れる時期の個体の出土は確認していない。なお、第VI層出土土器では1の山陰系甕などは新しい様相を持つものであり、布留式期に入ってからのものであると考えられる。

第47次調査出土土器を見ていこう。図66に示したものは後方部西側周濠のうち、第23次調査トレンチよりも北側の周濠内から出土した土器群である。29の短頸直口壺は埋土内での層位は不明ながら暗灰色粘質土との記載のあったものである。ラベル記載の取り上げ日の日付からは比較的早い段階に出土した遺物とみられることから上層付近からの出土遺物ではないかと考えられる。中段に示した30～34は暗灰褐色粘質土の記載があるもので、図49上段のa-a'断面図の⑤層に対応する遺物と考えら

れる。35～40は暗灰褐色粘質土と先に挙げた30～34と土色は同じながら、ラベルには溝底部との記載があり、最下層内でも底面からの出土であることが判明している。

これらの土器群はいずれの層位に属するものも出土した個体数が少なく、所属時期を明らかにするのは困難であるが、上層に属するとみられる29は口縁内部に布留形甕の影響と見られる内側への肥厚が認められることなどから布留式期に入ってからのもと考えられるほか、30～34も33の高坏や32のS字甕の脚台の存在などからは庄内式期の新相段階から布留式期古相段階にかけてのもだと判断される。35～40は庄内式期に属するものと判断されるが細かな時期は不明である。

図67～72は第23次調査区よりも南側の後方部西側周濠より出土した土器群である。この地点の土器群は調査時点では土器溜り一括として取り上げられていたものが多く、メクリ1号墳内でも最も豊富に遺物の出土があったものである。図67-41～図72-112に示したのものには土器溜り一括暗灰褐色土、図72-113～118に示したのものには暗灰色粘質土と記載されたラベルが添えられていた。

このうち図67-41～図72-112の土器群の中には図70-79に示した布留形甕が唯一1点だけ含まれていたが、他の個体の属性はいずれもが庄内式期でも新相頃におさまる様相を持つもので79だけが異質な存在となっている。これについては上層や別遺構からの混入品と考えており、79を除いて考えると暗灰褐色土出土土器の所属年代は概ね庄内3式期と判断することができよう。暗灰色粘質土出土土器は図72-113～118に示している。ここからの遺物は出土点数が少ないが113・117・118の個体は明らかに布留式期に下る時期のもだと判断されることから、暗灰色粘質土の形成時期もこの頃のもと考えられる。

図73-119～図76-157にはクビレ部・前方部西側周濠からの出土土器を図示している。このうち図73-119・120は暗灰褐色土からの出土を示すラベルが添えられていたが取り上げ日の記録は後述する暗灰色粘質土よりも約1ヶ月早い日付が記されていたため、暗灰色粘質土や他の地点で出土している暗灰褐色土出土土器よりは上位に位置する上層堆積層内に含まれるものと判断される。図73-121～図75-152に示しているのは暗灰色粘質土からの出土土器であるが、すべての器種に新しい要素がみられることから所属年代は布留0式期と判断している。図75-153は暗灰色土（粗砂混り）からの出土土器である。層位的にはその所属も不明であり、1個体のみの出土であるため時期については不明と言わざるを得ない。図76-154～157の土器群は黒褐色粘土層出土のものであり、図50上段d-d'断面図では上層に位置する④層に対応するものである。遺物は量的にも少ないものの布留形甕の存在が顕著に認められることからこれらの土器群も他の上層出土土器群とともに布留0式期に所属するものと判断している。

図76～78には前方部前面出土の土器群を提示している。図76-158は淡黄灰褐色粘質土、図76-159～図78-173は暗灰褐色粘質土、図77-174～図78-182は暗灰色粘質土からの出土であった。このうち上層に含まれる158は1点のみの出土であり、時期を推定するのは困難であったが、下層埋土からは比較的多くの土器の出土があり、ある程度時期を絞り込むことができる。これら下層埋土に所属する159から173の土器群のうち161の弥生形甕や163～166などの高坏には庄内1式期に遡るかと思われる。

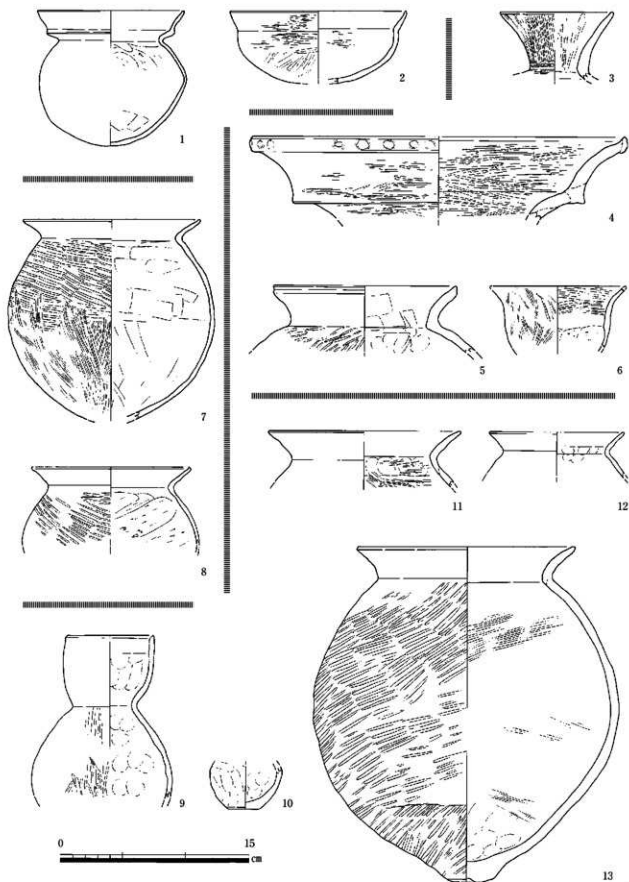


図64 メクリ1号墳出土土器1 (1/3)
 後方部西側周濠 (0-15溝) 1・2周濠上面 3-6黒褐色粘質土 7-8黒色粘土 9-13黒色粘土1下部

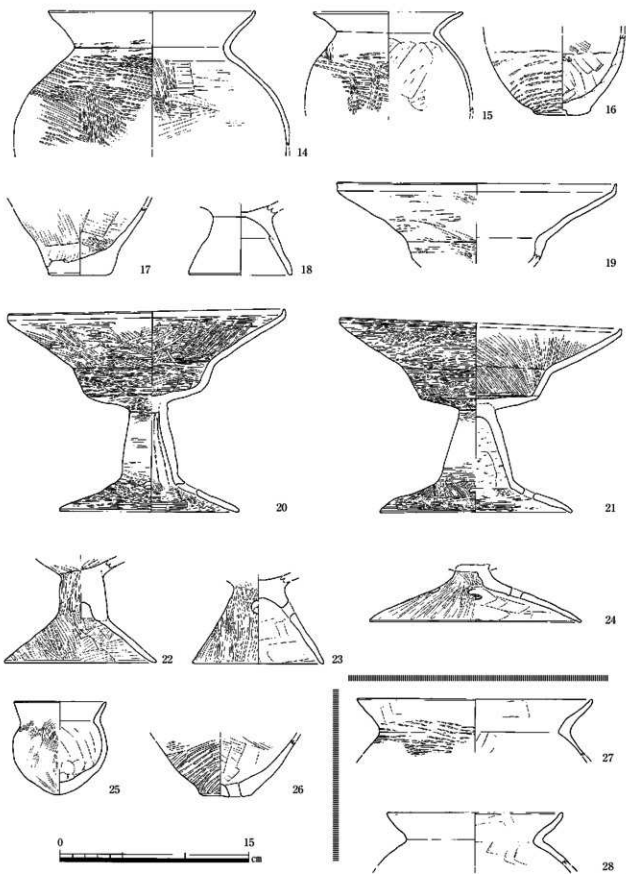
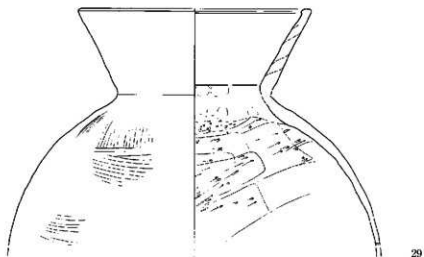
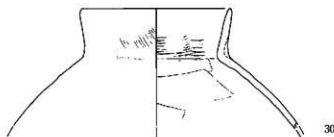


図65 メクリ1号墳出土土器2 (1/3)
 後方部西側周濠 (O-15溝) 14~26黒色粘土1下部 27・28黒色粘土2



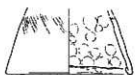
29



30



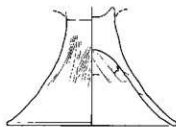
31



32



33



34



35



36



37



38



39



40



図66 メクリ1号墳出土土器3 (1/3)

後方部西側周濠 (溝13 23V・W地区) 29暗灰色粘質土 30~34暗灰褐色粘質土 35~40暗灰褐色粘質土 (周濠底部)

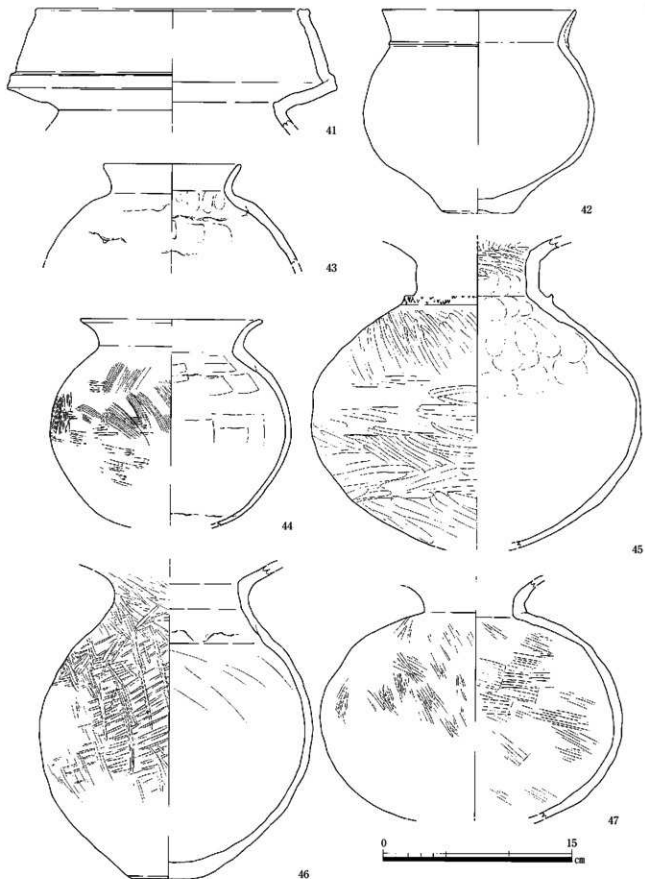


図67 メクリ1号墳出土土器4 (1/3)
 後方部西側周濠 (溝13 24V・W~25V・W地区) 41~47土器溜まり暗灰褐色土

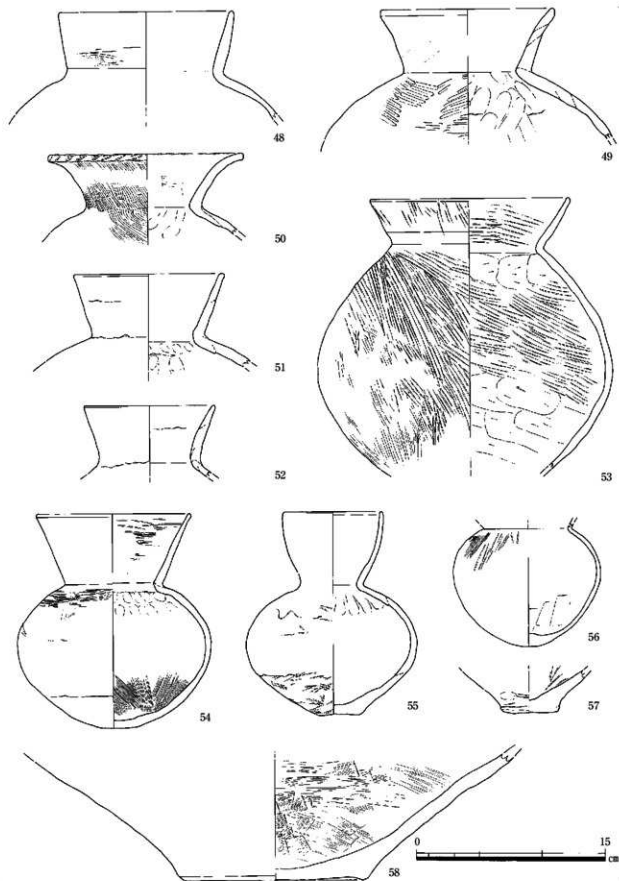


図68 メクリ1号墳出土土器5 (1/3)
後方部西側周濠 (溝13 24V・W~25V・W地区) 48~58土器溜まり暗灰褐色土

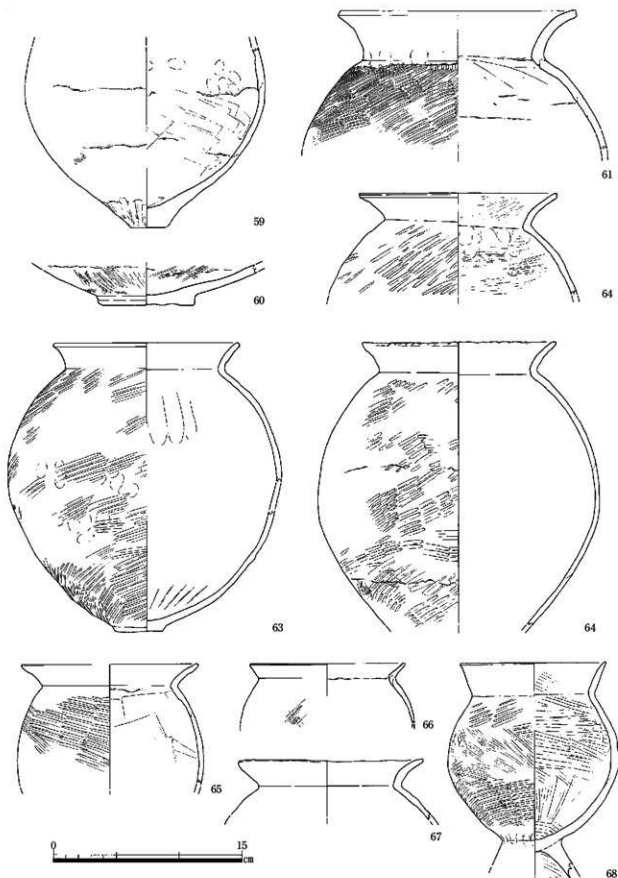


図69 メクリ1号墳出土土器6 (1/3)
 後方部西側周濠 (溝13 24V・W~25V・W地区) 59~68土器溜まり暗灰褐色土

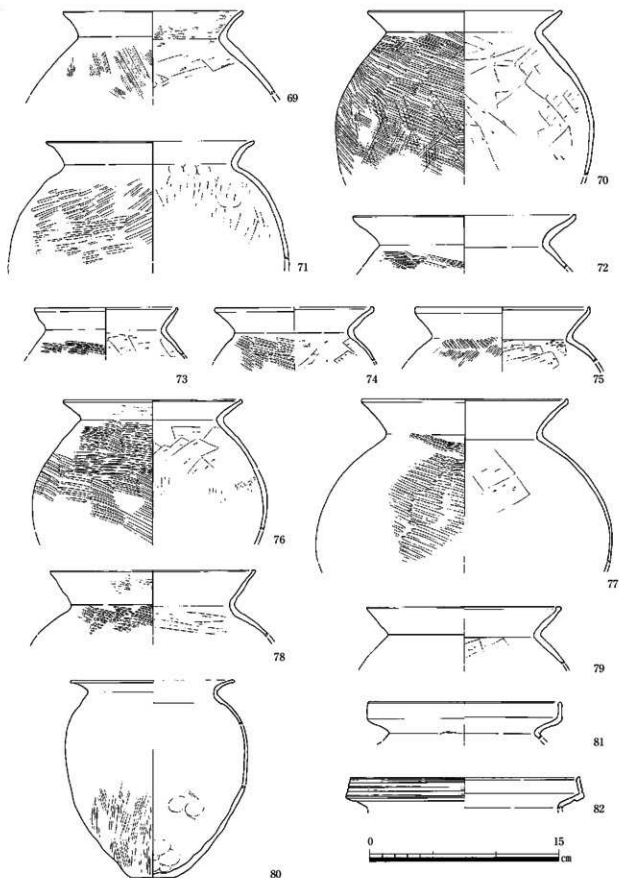


図70 メクリ1号墳出土土器7 (1/3)
 後方部西側周濠 (溝13 24V・W~25V・W地区) 69~82土器溜まり暗灰褐色土

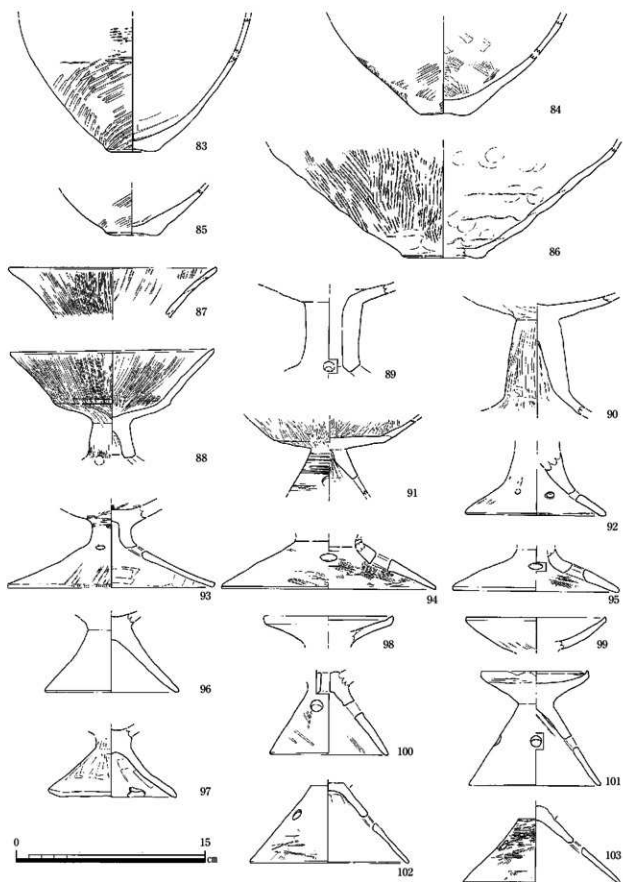


图71 メクリ1号墳出土土器8 (1/3)
 後方部西側周濠 (溝13 24V・W~25V・W地区) 83~103土器溜まり暗灰褐色土

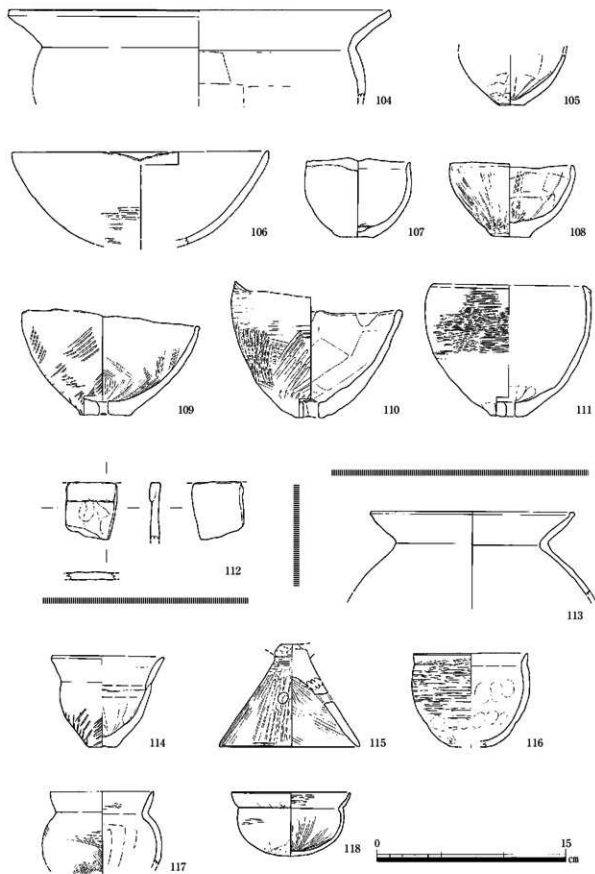


图72 メクリ1号墳出土土器9 (1/3)

後方部西側周濠 (溝13 24 V・W~25 V・W地区) 104~112土器溜まり暗灰褐色土 113~118暗灰色粘質土

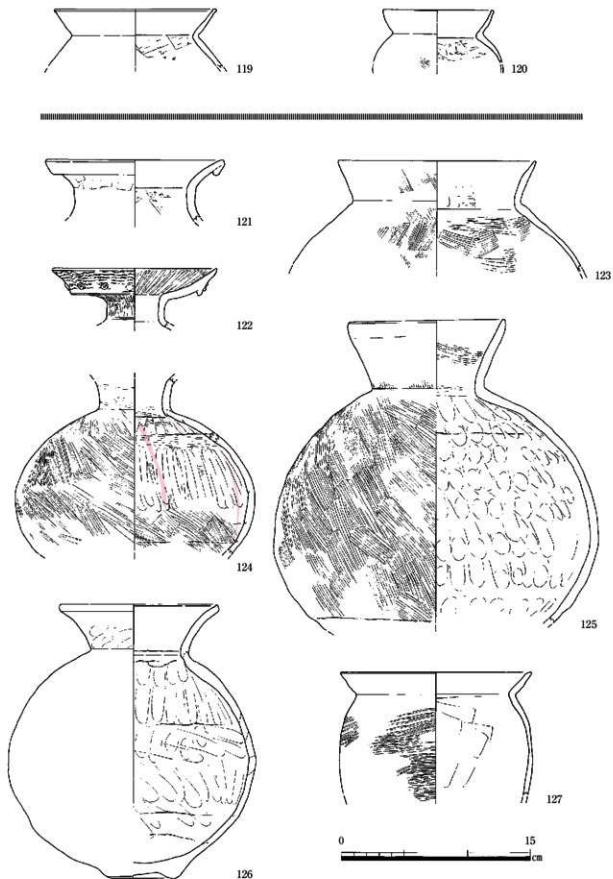


図73 メクリ1号墳出土土器10 (1/3)
 クビレ部・前上部西側周濠 (溝13 1V~1Y以南) 119~120暗灰褐色土 121~127暗灰色粘質土

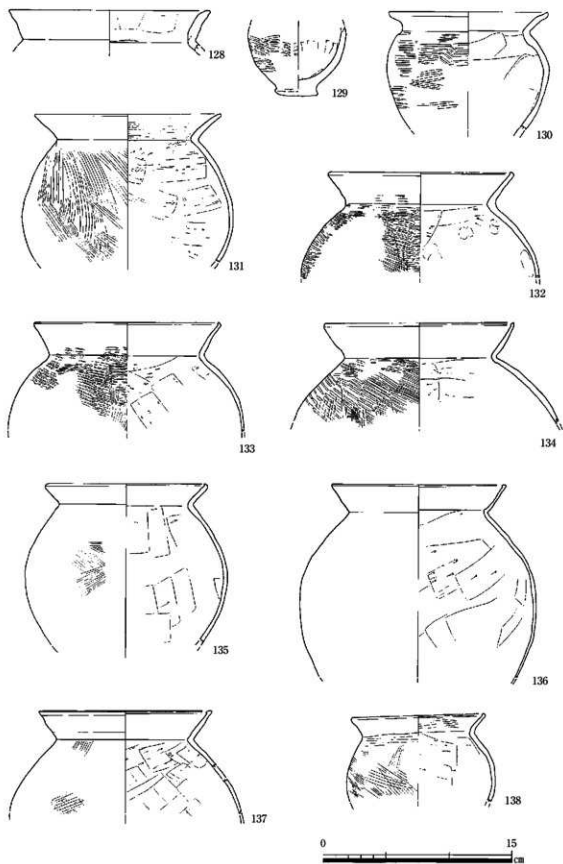


図74 メクリ1号墳出土土器11 (1/3)
 クビレ部・前方部西側周濠 (溝13 1V~1Y以南) 128~139暗灰色粘質土

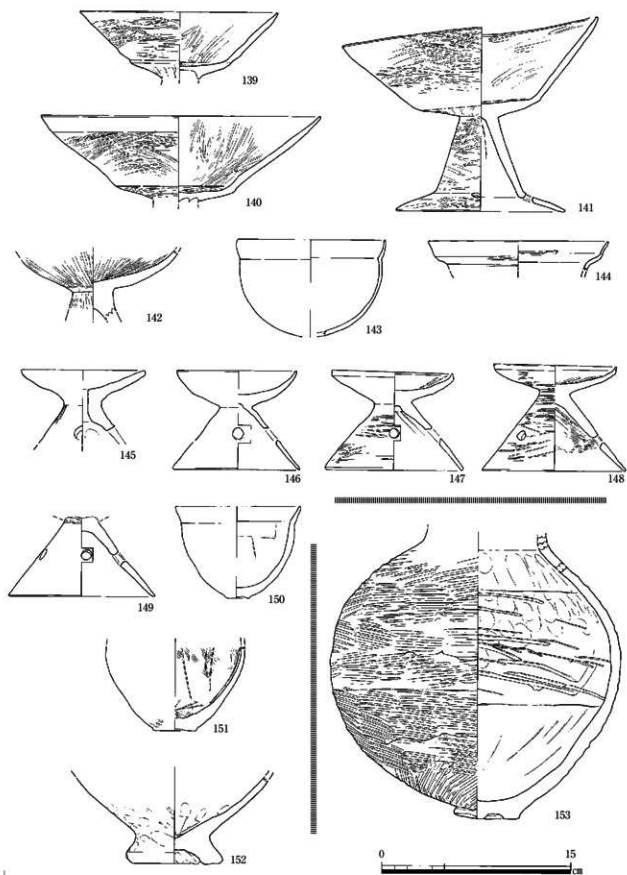


図75 メクリ1号墳出土土器12 (1/3)

クビレ部・前方部西側周濠 (溝13 1V~1Y以南) 140~152暗灰色粘質土 153暗灰色土 (粗砂混じり)

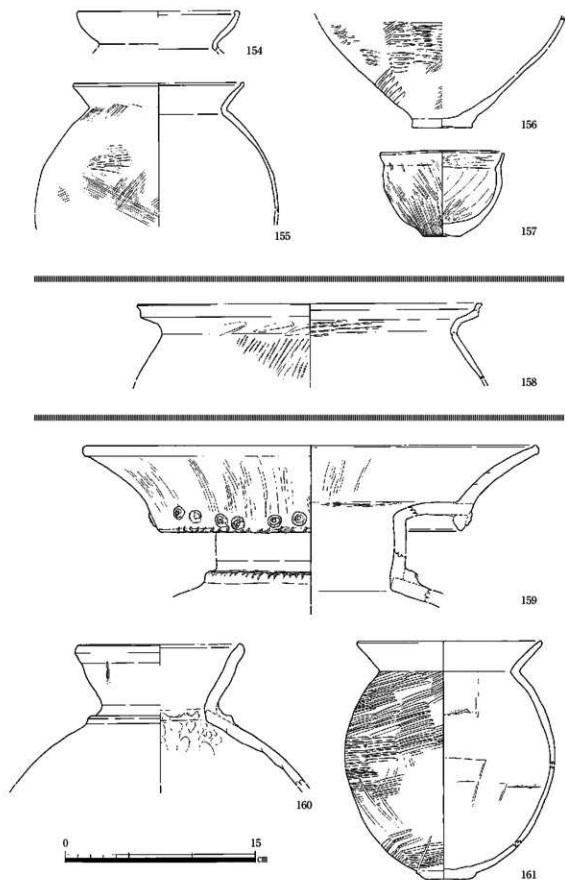


図76 メクリ1号墳出土土器13 (1/3)

クビレ部・前方部西側周縁 (溝13 1V~1Y以南) 154~157黒褐色粘土 前方部前面周縁 158淡黄灰褐色粘質土 150~161暗灰褐色粘質土

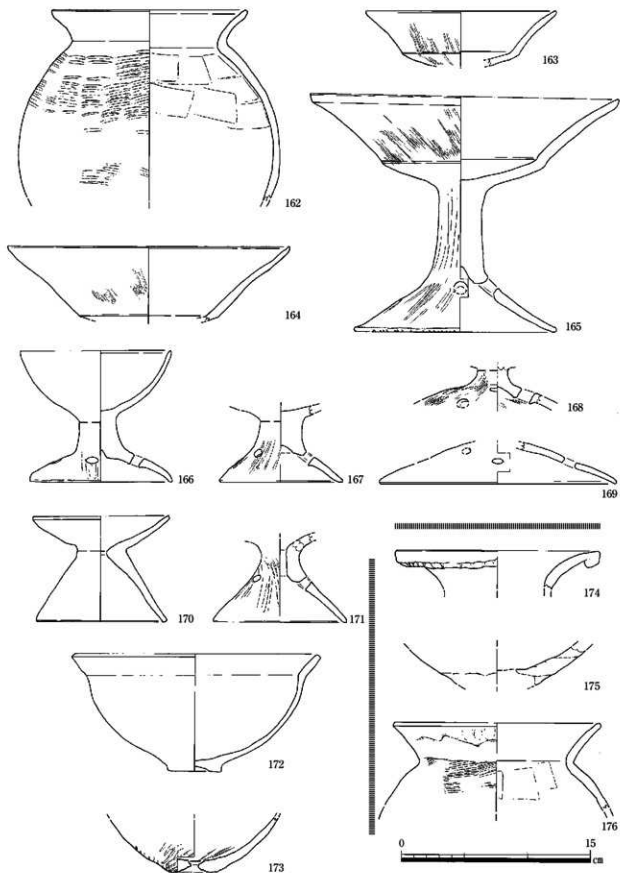


図77 メクリ1号墳出土土器14 (1/3)
 前方部前面周濠 162~173暗灰褐色粘質土 174~176暗灰色粘質土

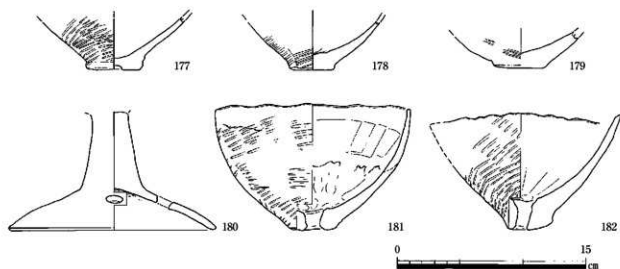


図78 メクリ1号墳出土土器15(1/3)
 前方部前面周濠 177~182暗灰色粘質土

る古い要素が認められる一方、168・169の低脚高坏や170・171の器台などには比較的新しい要素も認められるため、下層土器群の年代については庄内2式期頃かと考えておきたい。

なお、出土した層位は判然とししないものの、174から182に示した土器群はその様相から先の下層埋土土器群の年代観に近いものと考えているが器種のバリエーションが少なく、細かな時期の特定は不可能なものであった。

以上、メクリ1号墳周濠出土土器を概観してきたが第23次調査部分では周濠下層堆積層からは庄内式期、上層堆積層下部～下層堆積層上面からは庄内3式期、上層堆積層からは庄内式期に属する土器群の出土が確認されている。

これに対して、第47次調査出土土器はその多くが記録上、上・下層の所属層位が明確にされていないものの、各地点において取り上げられた土器群は大きく分けて暗灰色粘質土・暗灰褐色土(粘質土)の2層に属するものが殆どであることが判明している。先にみてきたように、このうち暗灰色粘質土からの出土とされる土器群はいずれの地点においても布留式期に入ってから、或いは布留0式期のものと判断されることから、第23次調査区の成果と照らし合わせると周濠の上層堆積土からの出土であると判断することができよう。

一方、暗灰褐色土出土とされる土器群は基本的には布留式土器を含まない段階、或いは庄内3式期と判断されることから、これらは第23次調査で検出されている上層堆積層下部から下層堆積層上面出土の遺物に対応するものと考えられる。

この他、前方部前面出土の土器群のうち図76・77の159～173は先の検討から周濠下層堆積からの出土と認定されるものである。所属時期は庄内2式期に遡る可能性があり、本古墳出土土器の中では最も古いものであり、これらの土器群は第47次調査後方部西側周濠底部出土土器(図66-35～40)などとともメクリ1号墳の築造時期を示唆するものとして注目されるものである。

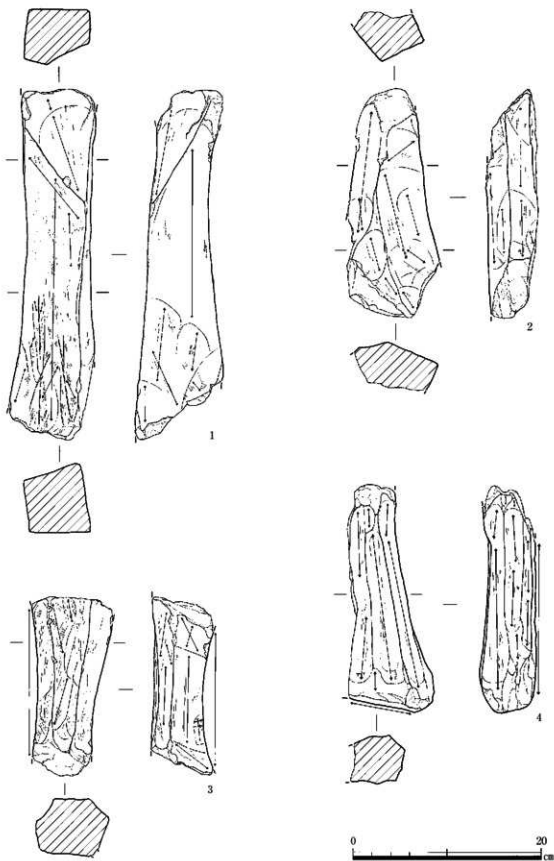


图79 メクリ1号墳出土底石(1/4)
クビレ部・前部西側周濠(溝13 1V~1Y以南) 1~4 黒褐色粘土

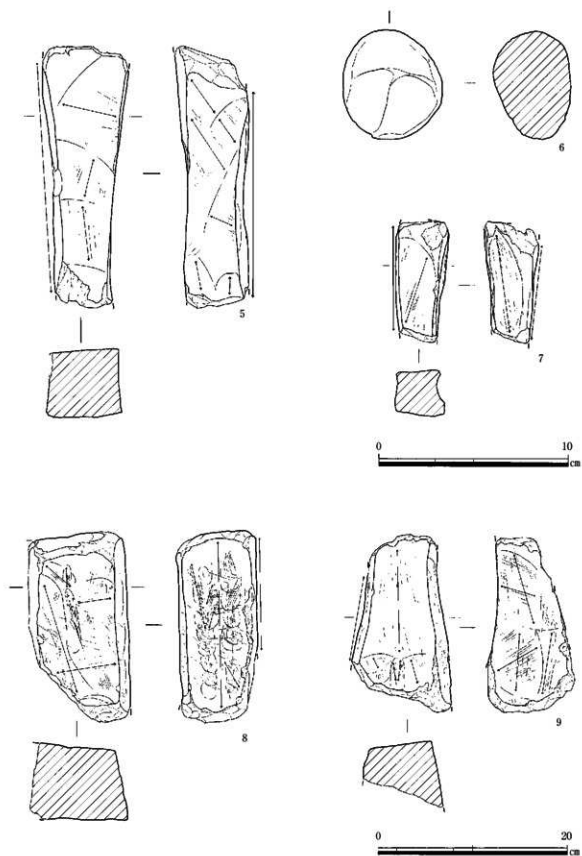


図80 メクリ1号墳出土砥石・磨石 (5～7は1/2、8・9は1/4)
 クビレ部・前方部西側周濠 (溝13 1V～1Y以南) 5・6黒褐色粘土 7～9暗灰色粘質土

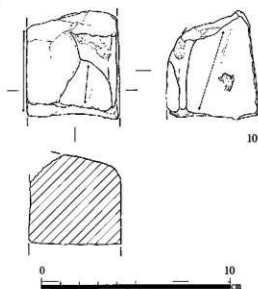


図81 メクリ1号墳前方部前面周濠出土砥石(1/2)

(3) 石製品 (図79~81・図版82)

石製品は図79~81に示した10点が出土している。出土した石製品は6が摺石と考えられる他は全てが砥石であった。このうち1~6はクビレ部西側で設定された土層観察用のセクション付近から出土したもので、出土層位は図50上段d-d'周濠断面図④層の黒褐色粘土層に属するものである。7~9の出土地点は先の1~6とほぼ同じだが層位的には暗灰色粘質土からの出土であり、1~6よりは層位的には若干上位に位置づけられるものと考えている。10は前方部前面の周濠下層堆積から出土したもので、図50中段のe-e'周濠断面図⑫層の暗灰褐色粘質土

に属するものである。砥石はすべての個体が端部を破損、或いは中央部分で破断しており正確な大きさは不明だが中には1のように全長37cmを超えるものも含まれている。他の個体についても個々の破片が非常に大きく、集落域において出土する砥石のサイズを凌駕するものが多く、研磨痕跡からは大型の鉄製品を砥いだものと考えられる。摺石は径5.7cmのやや重なる円形を呈し、石材の表面は極端に滑らかなものではないが全体的には使用による弱い磨滅痕の確認できるものであった。

なお、石材の材質については奥田高氏に実物を鑑定して頂いた。奥田氏の御教示によると図79・80の1~5・8・9の砥石は細粒~中粒の違いはあるもののいずれもが春日山付近に分布する砂岩とのことで、7の砥石は耳成山に分布する流紋岩、図81-10の砥石は細粒変輝緑岩、図80-6の摺石は流紋岩質溶結凝灰岩(室生火山岩)が使用されているが、図80-6は初瀬川に流れ込んだ石材を採集して使用した可能性が高いとのことである。

これらの遺物のうち、前方部西側で出土したものの所属時期については出土遺物の項目において先述したように黒褐色粘土層からの出土土器が布留0式期のものと判断されていることから共存する砥石・摺石もこの頃に周濠に入ったものと考えており、やや上位に位置する暗灰色粘質土出土の砥石もほぼ同じ時期と考えている。一方、前方部前面出土の10は先に報告した周濠下層堆積からの土器群と共存するものであり、所属時期も庄内2式期の可能性が考えられる。

なお、これらの遺物は1~9が周濠上層堆積層に所属することから集落部分で使用されていたものが周濠へと投棄されたとみられるもので古墳に直接伴うものとは考えていない。10については前方部前面周濠出土の土器群が古墳の築造とはあまり時間をおかずに周濠に入った可能性を考えていることから砥石も同じ段階のものと思われるが、古墳に直接伴うものか否かは不明と言わざるを得ない。

いずれにせよメクリ1号墳の周辺において大型の鉄製品を砥ぐという行為が行われていたのは間違いないが、これに使用された大型砥石が数多く出土したことは注目すべき事柄であろう。

7. 築造時期

メクリ1号墳からは豊富な遺物の出土があったものの、築造時期を限定するのは非常に困難な状況にある。出土状況が明らかな遺物の中では後方部西側の第23次調査地点を中心として出土した庄内3式期に属する多くの土器群があるがこれらは周濠下層堆積層上面に位置するものであり、これらの資料だけでは古墳の築造時期は庄内3式期を含めてそれ以前としか言えない状況である。

周濠内下層や底部からの出土とされる遺物には第47次調査後方部西側周濠底部出土土器(図66-35~40)、第47次調査前方部前面周濠内①層出土土器(図76-159~図77-173)などがある。このうち第47次調査後方部西側周濠底部出土土器(図66-35~40)は庄内式期におさまるものだが、遺物の量的な問題から厳密な時期を絞り込むのは困難である。強いて言えば庄内式期でも2~3式頃に属するものではないかと考えるが確実ではない。

一方、第47次調査前方部前面周濠内①層出土の土器(図76-159~図77-173)は内容的には高坏などには庄内1式期に遡るかともみられる古い様相が認められるものの、中空器台や高坏の一部にはやや時期が下るとみられる新しい要素も認められる資料であり、所属時期は庄内2式期と判断していることからこれらの土器群はメクリ1号墳出土土器中では最も古い様相を持つ一群と言える。

これら前方部前面出土土器を積極的に評価するとメクリ1号墳の築造年代は庄内2式期と考えることが妥当と考えるが、前方部前面にしか確実な該期の遺物の集積が認められないことや、前方部前面出土の土器群と他の地点で出土した土器群とは様相が大きくかけ離れていることなどからは以下の3つの状況を想定することにより築造時期が下る可能性も残るものとする。

- I. 偶然古い様相を持つ資料だけがかたまっても出土した可能性。
- II. 前方部前面という特別な地点において故意に古い様相の土器群を用いて供献が行われた可能性。
- III. 前方後方墳という墳形から被葬者に大和以外の地域出身者が葬られていた場合、古い様相を持った土器を使用する地域のもを主として土器群の供献が行われた可能性。(前方部前面出土土器のうち図76-78・160・161・170・173・174~178・180・181はよく似通った暗く黄色みの強い非在地系の胎土が用いられている。)

いずれの可能性もあまり高いものとは考えにくい、それぞれの可能性が皆無とは言えない状況にあることからここではメクリ1号墳の築造年代については断定を避け、庄内2式期と庄内3期の双方の時期にその可能性があることを明記しておくこととしたい。

【註記】

- 1) 寺沢薫編『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊 奈良県立橿原考古学研究所 1986
以下、本報告における土器の年代観・土師器の調整技法はすべてこれに準ずる。
- 2) 財団法人日本色彩研究所監修『標準色カード230』編・発行 日本色研事業株式会社© 1988
- 3) 橋本輝彦「第7節 桜井市域出土の木織・銅織について」『奈良県桜井市 平成8年度国庫補助事業による発掘調査報告書』桜井市教育委員会 1997
- 4) 萩原儀征「II A調査地」『橿原遺跡-昭和54年度遺跡範囲確認発掘調査概報-』桜井市教育委員会 1980
- 5) 橋本裕行・南部裕樹「勝山古墳第4次(橿原遺跡第122次)発掘調査概要」『奈良県遺跡調査概報2000年度』奈良県立橿原考古学研究所 2001

第4章 まとめ

(1) メクリ1号墳の築造規格とその構造

今回の調査により確認されたメクリ1号墳の存在は前方後円墳誕生の地とされる纏向遺跡において、小規模ながらも東日本地域を代表する墓制ともいえる前方後円墳が纏向遺跡の中に築かれていたことを示すものであり、ヤマト王権と東日本の関係を探る上で重要な資料となろう。

墳丘の築造規格についても注意すべきである。メクリ1号墳の墳丘は東部分の検出状況に問題はあったものの、幾つかの手掛りによりほぼその全容を知ることができた。今一度その墳丘規模を確認しておくとして全長は28mを測り、後方部は北・東・西の3辺が直線的に延びるのに対して南辺は東西のコーナー部からクビレ部へと向いつつ前方部側へと若干張り出している。コーナー部間の規模は後方部の南北長が18.7mであるのに対し、クビレ部では南北長19.2mと50cm長くなっている。後方部の東西長は20mと南北長に比べて若干東西長が長いものの本来は正方形を志向したものと考えられ、前方部はクビレ部からの長さで8.8m、後方部の南辺両コーナーを結ぶラインと墳丘中軸線との接点からの長さは9.3mを測る。

以上の状況からメクリ1号墳の築造は後方部長18.7m、後方部幅20m、前方部長9.3mの規模に築造されたものであることが解る。これは後方部長に対して前方部長が二分の一となる纏向型前方後円墳の規格と全く一致するものであり、メクリ1号墳の築造規格は纏向型前方後円墳の築造規格を使用して築造されたものと考えられる。

なお、上記の所見に基づいてメクリ1号墳の墳丘プランの復元を試みたのが図82である。これには検出された古墳の墳丘図に推定される本来の墳丘プランを朱線で表しているがこの復元プランではメクリ1号墳は他の纏向型前方後円墳に比べて前方部の開きが直線的であることが一つの特徴と言える。これは前方部の開きを決定する前方部側線の設計上の交点が纏向遺跡の纏向型前方後円墳では後円部の中心に位置するのに対し、メクリ1号墳では後方部北辺の中央部にまで延長されていることに起因するものである。

最後に周濠の様子も整理しておこう。メクリ1号墳の周濠は本来墳丘の周囲を古墳に沿う形で全周するものであったとみられるもので、その規模は後方部北側で幅2.8m、西側で5m、東側で4.2m、前方部前面では幅1.5mを測るものであった。クビレ部から前方部側面付近の状況はやや複雑で周濠の外側のラインは溝28の肩部と重なる形で後方部南西コーナーに対応する付近から前方部前面へと丸く廻るものであったことが解っているが、この周濠肩部のラインの内側には墳丘の形状に沿って後方部南西コーナー部からクビレ部の方向へとクランクしていく落ち込みの肩部も検出されており、むしろこちらが本来墳丘に対応する周濠の肩部となる可能性が高いと考えられる。

周濠肩部の外側に周濠肩部へと向かうごく緩やかな斜面の存在は纏向石塚古墳の墳丘北側または東側周濠部分においても確認されているもので、他にも削平によって失われた古墳もあると思われることから纏向遺跡においてはこの時期の古墳の特徴の一つと言えるものかもしれない。

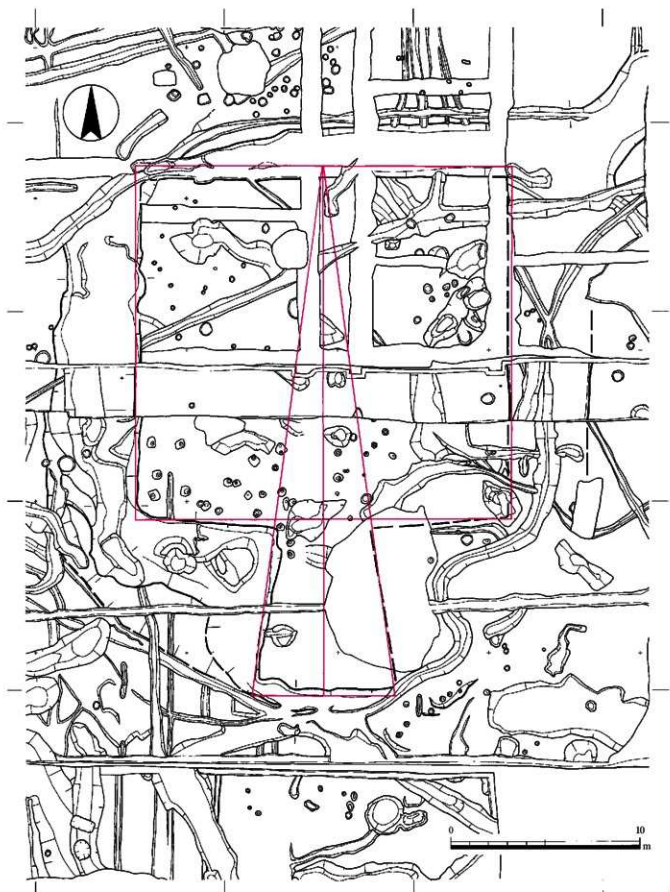


図82 メクリ1号墳の墳丘規格 (1/200)

(2) メクリ地区墳墓群の位置付け

旧纏向小学校用地の発掘調査では前方後方墳1基・方形周溝墓3基・木棺墓4基・土器棺墓2基が検出され、ここに報告を行うことができた。箸墓古墳が築造される以前の3世紀代の纏向遺跡においては前方後円墳と方形周溝墓・木棺墓・土器棺墓が遺跡内に散在することが判明しており、墳墓には大型墳墓と小型墳墓の2者が存在することが確認されていたが、ここに報告したメクリ1号墳の存在はこの間を埋めるものとして重要な資料となる。

纏向遺跡における過去の調査事例から具体例を挙げれば100m前後の規模を誇る纏向石塚古墳や勝山古墳・東田大塚古墳・矢塚古墳・ホケノ山古墳などの大型の前方後円墳の下に全長28mのメクリ1号墳が、さらにその下には方形周溝墓・木棺墓・土墳墓・土器棺墓が続くという形がみとれる。この中でメクリ1号墳は全長が28mと他の纏向型前方後円墳の1/4弱の規模しか持たないことや、前方後方形という纏向遺跡内においては特異な墳丘形状を具備することはこの古墳に葬られた被葬者の階層や出自を示すものと理解できる。

こういった視点に立てば旧纏向小学校用地内の墳墓群はヤマト王権の本拠地と目される纏向遺跡内の首長層の階層性を示すものとして極めて重要な位置を占めるものといえるが、私見では中型の墳墓の存在はメクリ1号墳1基ではなく、第51次調査で確認されている南飛塚古墳³⁾などもその候補と考えており、最終的にはむしろ大型の墳墓よりもその数は多くなる可能性があると思定しているし、墳丘の形状も一様ではない可能性を考えている。

纏向遺跡の調査は一部の事例を除いては極めて小規模な調査が殆どであり、調査区内に古墳の一部があつたとしてもこれを古墳と確認することは困難なケースが多い。これについては今後の調査の進捗の中で新たな類例が確認されていくことを期待しつつ筆を置くこととしたい。

【註記】

- 1) 丹羽恵二「第3節 纏向遺跡第144次(纏向遺跡第9次調査)概要報告」『桜井市平成17年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会2006
- 2) 横詰清孝「纏向遺跡南飛塚地区発掘調査概報」桜井市教育委員会1987

あとがき

いつものことになってきましたが調査の着手から30年、終了から22年もの時間を経て調査担当者不在・調査時の様子を知る者不在の状況下でまたしても編集者が報告書の作成を担当することとなり、旧纏向小学校用地で実施された纏向遺跡の調査における古墳時代前期の墳墓群についての報告書を刊行する運びとなりました。

実のところ、本報告書の刊行は文化財課内で計画されていた調査報告書の刊行スケジュールには本来含まれていなかったもので、矢塚古墳・勝山古墳・東田大塚古墳の「国指定史跡 纏向古墳群」への追加指定を検討するにあたり、メクリ1号墳と周辺に展開する方形周溝墓などの小規模な墳墓群もヤマト王権内部における墳墓の階層性を示す良好な資料であるから追加指定の候補として考えてはどうかとのアドバイスを榎田佳男氏と西藤清秀氏から頂いたことを受けて急速報告書の作成に着手したものであります。

しかしながら、本文にも記載しましたように旧纏向小学校用地の調査は過去に実施された纏向遺跡の調査の中でも最大級の調査面積を誇るもので、出土遺物の量もずば抜けて多いものです。一連の調査で検出された遺構は今回報告した墳墓群以外にも重要な遺構が多く、本来はすべての遺構・遺物を網羅した報告書の刊行が望ましいのは言を待ちませんが、実質1年という非常に短い整理期間で報告書を刊行するためには本報告を「墳墓編」として集落遺構から切り離す結果となってしまいました。

また、報告の内容についても遺構の詳細な検討や遺物の分析など、実行すべき多くの作業を割愛せざるを得ませんでしたし、出土遺物のうち木製品などは多くのものが調査終了後の長い年月の中で保存処理が行われることなく失われてしまったようで、今回の整理作業では所在が確認できずその殆どを報告することができなかったことが悔やまれます。

ともあれ、「墳墓編」が刊行された今、編集者に課された次の仕事は「集落編」の刊行と考えています。業務に忙殺される現状に加え、膨大な遺物量を考えると他日を約する自信は全くありませんが、歩みを止めることなく目標に向かって進み続けたいと思います。

最後になりましたが今回の報告書の作成に際しても多くの方々のご指導・御協力がありました。本報告書刊行のきっかけを作って下さった榎田佳男・西藤清秀両氏のほか、今回の報告に限らず日々の纏向遺跡の調査・研究全般にわたって種々の御指導を頂いている、石野博信先生・寺沢薫氏・関川高功氏、方形周溝墓及びメクリ1号墳出土の礫石・木炭の材質を鑑定していただいた奥田高・金原正明先生、調査内容に関して御教示頂いた萩原儀征氏・木場幸弘氏、そして報告書の作成担当でありながら業務に追われ作業に専従できない編集者にかわって遺物整理の指揮・監督から一部の実測図の作成、図版作成のすべてを引き受けた上、休日出勤はもとより業務の枠を超えて連日の深夜に及ぶ作業に従事して頂いた橋爪朝子さん。彼女の尽力が無ければ本書の刊行は不可能なものでした。皆様にして御礼申し上げます。

(平成21年3月 編集者記す)

纏向遺跡発掘調査報告書 2

——メクリ地区における古墳時代前期墳墓群の調査——

図版編



縄向遺跡全景（北西より）



調査地と周辺の様子（第31次調査時撮影）



第23次調査 調査区全景（東から）



第23次調査 調査区全景（南東から）



第27次調査 調査区全景（南東から）



第27次調査 調査区全景（西から）



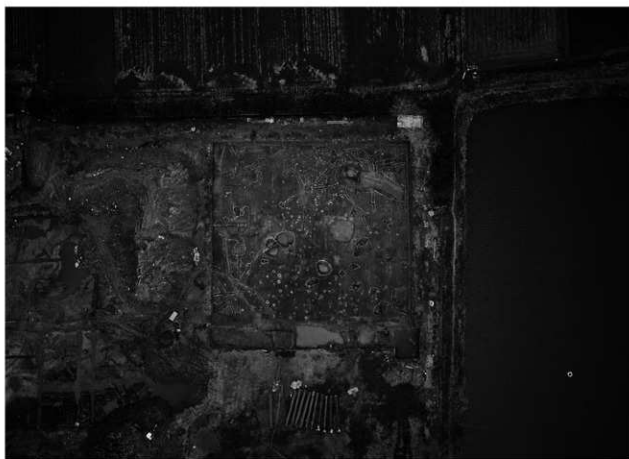
第31次調査 調査区全景 (南から)



第31次調査 第2トレンチ全景 (東から)



第48次調査 調査区全景（南から）



第48次調査 調査区全景（上が南）



第27次調査 第1トレンチ全景 (西から)



第27次調査 第1トレンチ全景 (西から)



第31次調査 第2トレンチ全景（西から）



第47次調査 調査区全景（西から）



第47次調査 調査区全景（北から）



第48次調査 調査区全景（東から）



土器棺墓1 土器棺検出状況（北から）



土器棺墓1 棺蓋取り上げ後の様子（北から）



土器棺墓1 完掘状況（北から）



土器棺墓1と周辺の遺構（北から）



土器棺墓2 土器棺検出状況（東から）



土器棺墓2 完掘状況（東から）



木棺墓1 棺蓋上埋土の様子（北から）



木棺墓1 棺蓋上土層断面 a-a'（東から）



木棺墓1 b-b'西半棺蓋上埋土堆積状況(南から)



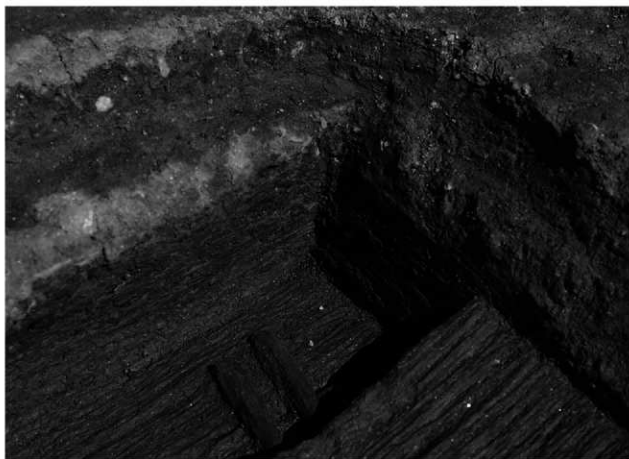
木棺墓1 b-b'東半棺蓋上埋土堆積状況(南から)



木棺墓1 棺蓋検出状況（北から）



木棺墓1 棺蓋検出状況（南から）



木棺墓1 木棺北東隅細部 (南西から)



木棺墓1 木棺南東隅細部 (北西から)



木棺墓1 棺内埋土除去後の様子 (南から)



木棺墓1 棺内埋土除去後の様子 (北から)



木棺墓2 検出状況（南西から）



木棺墓2 調査区北壁にかかる木棺墓断面（南から）



木棺墓2 棺内調査の状況（東から）



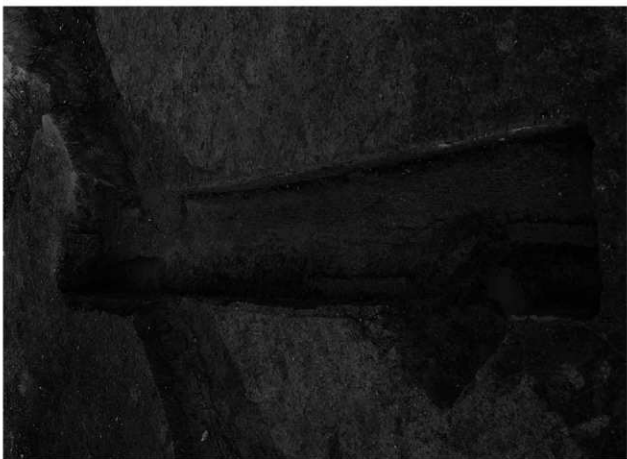
木棺墓2 a-a 棺蓋上埋土堆積状況（南西から）



木棺墓2 b-b'北側小口板付近墓壁内断面(南東から)



木棺墓2 棺蓋検出状況(南東から)



木造遺跡の相模溪出土状況（前四小分）



木造遺跡の相模埋土除去後の様子（前四小分）



木棺墓2 棺内埋土除去後の様子（南東から）



木棺墓2 木棺北側小口部（西から）



木棺墓2 木棺南側小口部（北から）



木棺墓2 b-b'北側小口部断ち割り（東から）



木棺墓2 e-e'東側板断ち割り (北から)



木棺墓2 a-a'西側板断ち割り (南から)



木棺墓2 b-b'南側小口部断ち割り(東から)



木棺墓3 検出状況(北から)



木棺墓3 棺内埋土の調査状況（北から）



木棺墓3 墓壇埋土及び棺内埋土の調査状況（北から）



木棺墓3 墓壇埋土及び棺内埋土埋置状況 (西から)



木棺墓3 墓壇埋土及び棺内埋土除去後の様子 (北から)



木棺墓4 墓壙上面土器溜り (北東から)



木棺墓4 墓壙内土層断面 (南西から)



長道遺跡第1層跡発後の墓子 (前米小)



長道遺跡第1層跡内土器出土状況 (前米小)



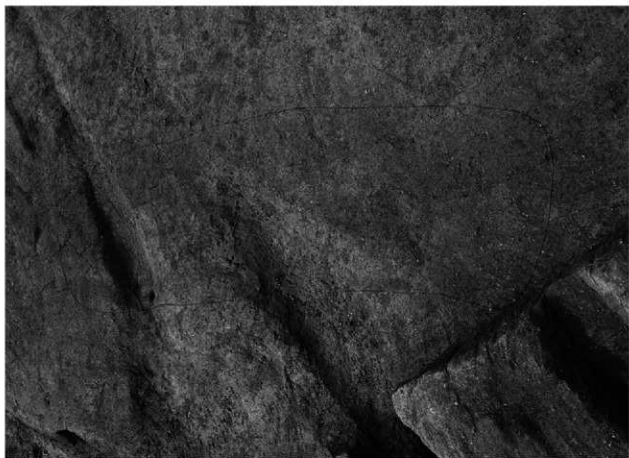
方形周溝墓 1 遺物出土状況（北東から）



方形周溝墓 1 木製品出土状況（北西から）



方形周溝墓1 土器出土状況（北から）



方形周溝墓1 墳内出土遺品状況（南東から）



方形周溝墓1墳丘内 f-f' 土坑埋土 (南西から)



方形周溝墓1墳丘内 c-d, e-e' 土坑埋土 (北西から)



方形周溝墓 1 b-b' 周溝内堆積状況 (南西から)



方形周溝墓 1 c-c' 周溝内堆積状況 (南東から)



方形周溝墓 1 完掘状況（北西から）



方形周溝墓 1 と周辺の遺構（北から）



方形周溝墓2・3遺物出土状況（南東から）



方形周溝墓2・3遺物出土状況（北西から）



方形周溝墓 2 溝24土器出土状況（北西から）



方形周溝墓 2 溝24 a - a'周溝内堆積状況（南から）



方形周溝墓2 断面b-b'溝24と溝28南溝の切り合い関係(西から)



方形周溝墓2・3 断面e-e'方形周溝墓とメクリ1号墳の切り合い関係(北西から)



大塚西遺跡の骨の埋物出土状況 (塚小の)



方形周溝墓 3 溝25 c - e 周溝内堆積状況 (南西から)



方形周溝墓3 溝25木製品出土状況（北から）



方形周溝墓3 溝25木製品出土状況（西から）



方形周溝墓3 溝25遺物出土状況(南東から)



方形周溝墓3 溝25下層遺物出土状況(南から)



方形周溝墓3 溝29遺物出土状況（北西から）



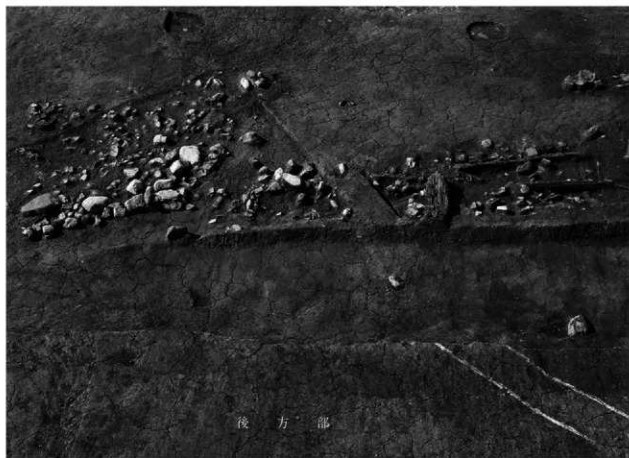
方形周溝墓3 溝29西半下層遺物出土状況（北から）



方形周溝墓3 溝29 d - d'周溝内堆積状況 (西から)



方形周溝墓2・3 完掘状況 (南西から)



メクリ1号墳 後方部北側周濠西半検出状況 (南から)



メクリ1号墳 後方部北側周濠西半の様子 (南から)



メクリ1号墳 後方部北側周濠東端遺物出土状況（西から）



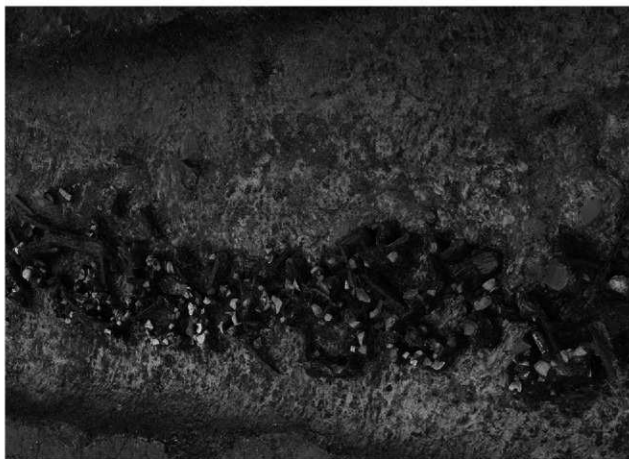
メクリ1号墳 後方部北側周濠東端遺物出土状況（北東から）



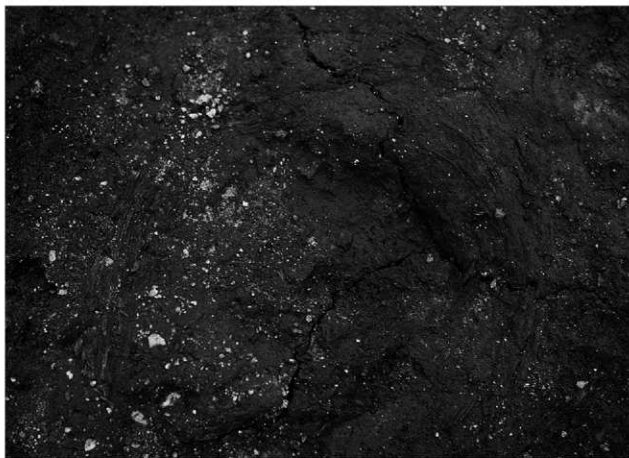
メクリ1号墳 後方部北側周濠7J-21B区管玉状木製品出土状況(南から)



メクリ1号墳 後方部北側周濠7J-21B区管玉状木製品出土状況(東から)



メクリ1号墳後方部北側周濠東土埋物出土状況 (測尺あり)



メクリ1号墳後方部北側周濠円座状樹皮製品出土状況



メクリ1号墳 後方部北側周濠完掘状況 (東から)



メクリ1号墳 後方部西側周濠b-b'堆積状況 (北から)



メクリ1号墳 後方部西側周濠O-15地区遺物出土状況（北から）



メクリ1号墳 後方部西側周濠O-15地区遺物出土状況（西から）



メクリ1号墳 後方部西側周濠O-15地区遺物出土状況（北から）



メクリ1号墳 後方部西側周濠O-15地区遺物出土状況（北から）



メクリ1号墳 後方部西側周濠O-15地区遺物出土状況（北から）



メクリ1号墳 後方部西側周濠O-15地区完掘状況（北から）



メクリ1号墳 後方部西側周濠 a-a' 堆積状況 (南から)



メクリ1号墳 後方部西側周濠 c-c' 堆積状況 (北から)



メクリ1号墳 後方部西側からクビレ部周濠の遺物出土状況（北東から）



メクリ1号墳 後方部西側からクビレ部周濠の遺物出土状況（北西から）



メクリ1号墳 後方部西側周濠土器溜り(東から)



メクリ1号墳 後方部西側周濠g-g'堆積状況(北から)



メクリ1号墳 後方部西側周濠完掘状況 (北から)



メクリ1号墳 後方部東側周濠の様子 (東から)



メクリ1号墳 後方部東側周濠の様子（北から）



メクリ1号墳 前方部西側周濠d-d'堆積状況（西から）



メクリ1号墳 前方部西側周濠完掘状況 (南から)



メクリ1号墳 前方部西側周濠完掘状況 (西から)



メクリ一号墳前方部前面側築遺物出土状況 (西中)



メクリ一号墳前方部前面側築遺物出土状況 (東中)



メクリ1号墳 前方部前面 e-e'遺構切り合い関係 (東から)



メクリ1号墳 前方部東側足跡検出状況 (南から)



メクリ1号墳 完掘状況 (南から)



メクリ1号墳より三輪山を仰ぐ (北西から)



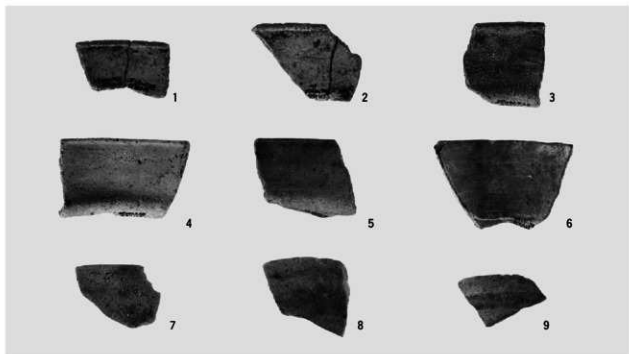
土器棺墓1出土土器 1棺蓋・2棺身(1/3)



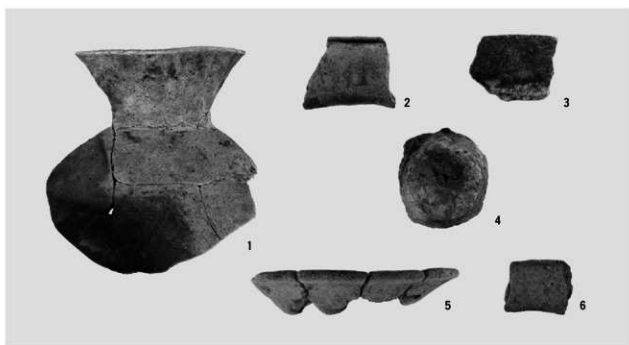
土器棺墓2出土土器（1は1/2，2は1/4）



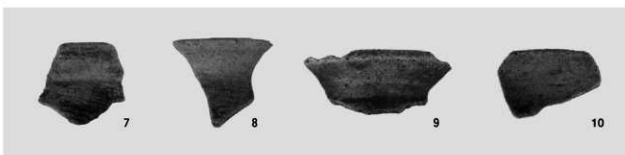
木棺墓1出土土器(1/2)



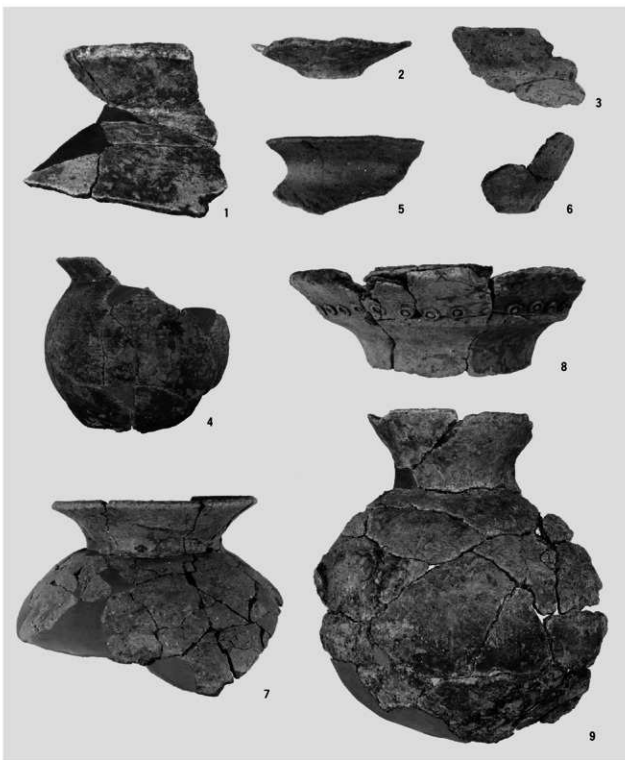
木棺墓4出土土器(1/2)



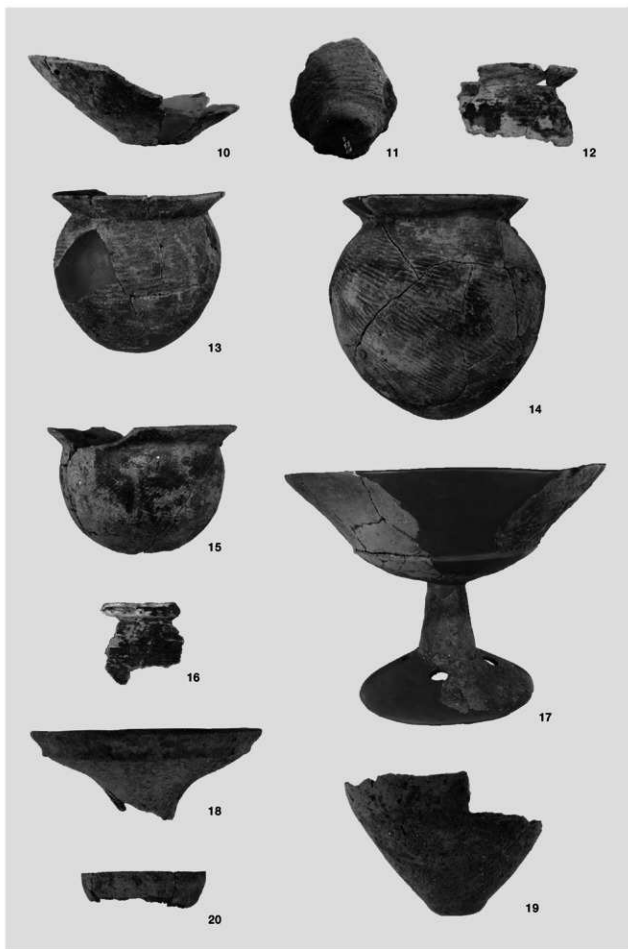
方形周溝墓1出土土器1(1/2, 1は1/3)



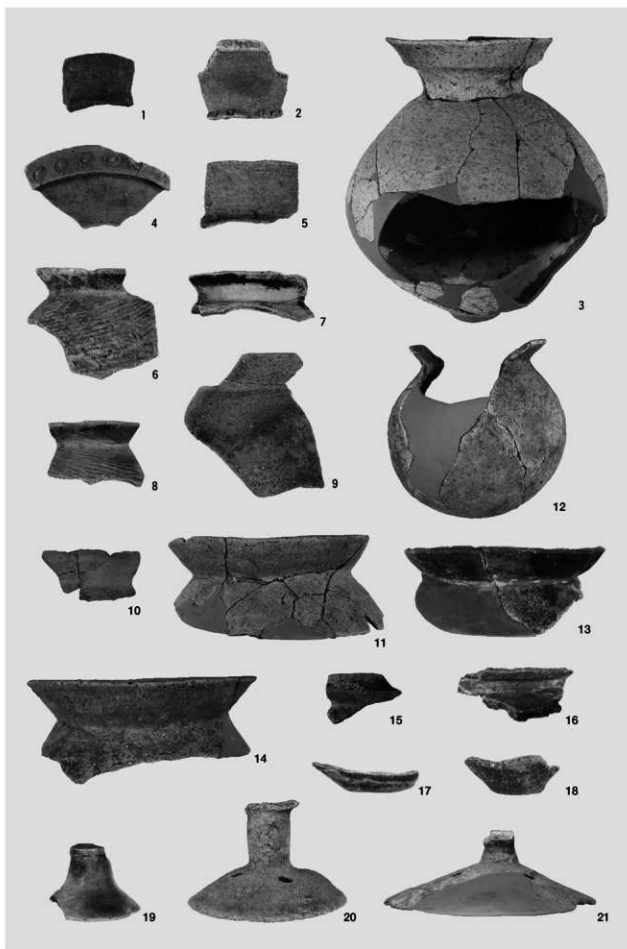
方形周溝墓1出土土器2 (1/2)

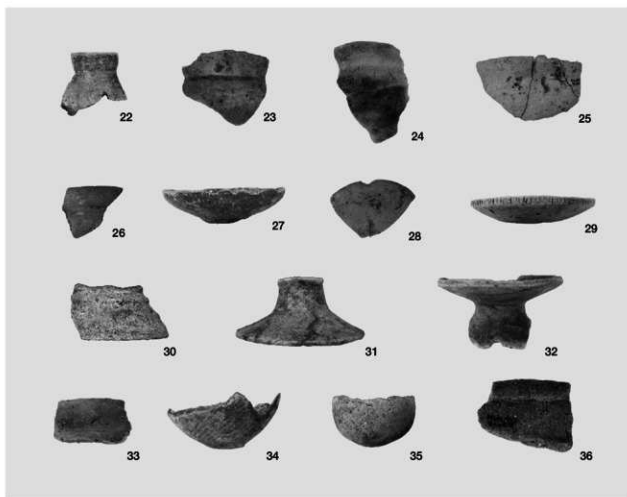


方形周溝墓2出土土器1 (1/3, 3・5・6は1/2)

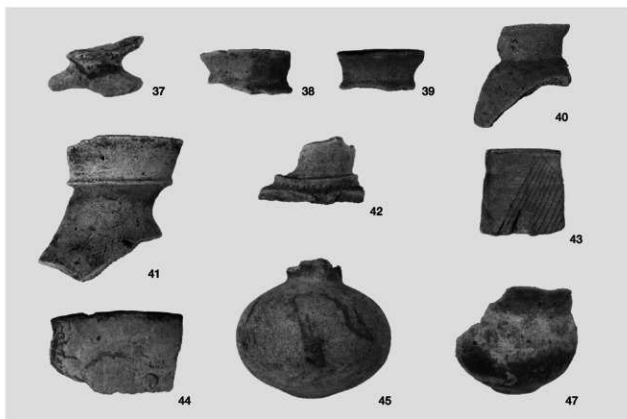


方形周溝墓2出土土器2 (1/3)

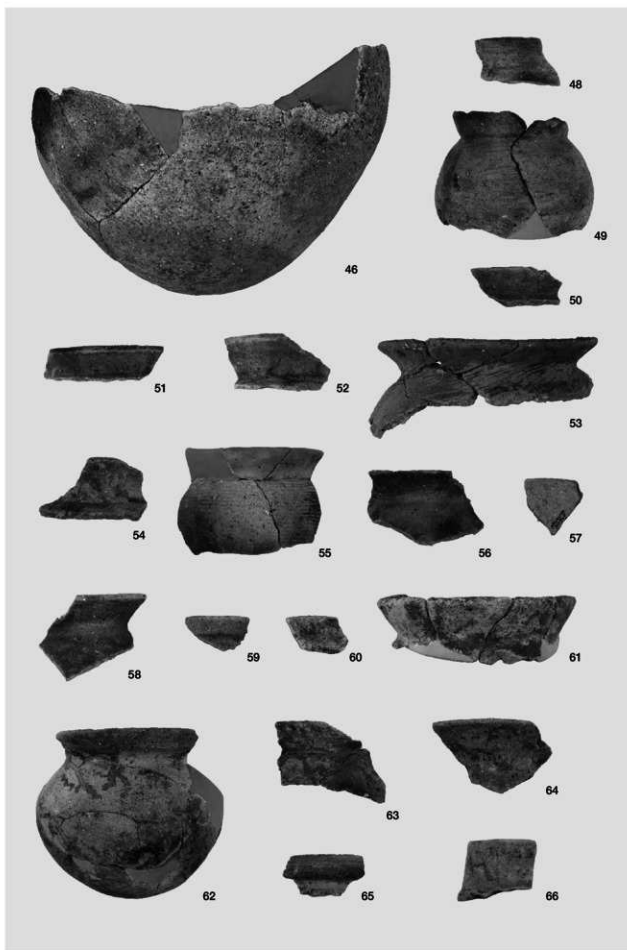




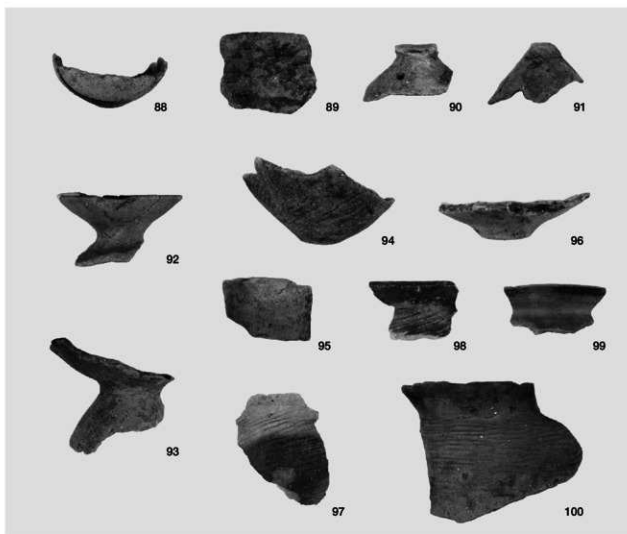
方形周溝墓3溝25出土土器2 (1/3, 36は1/2)



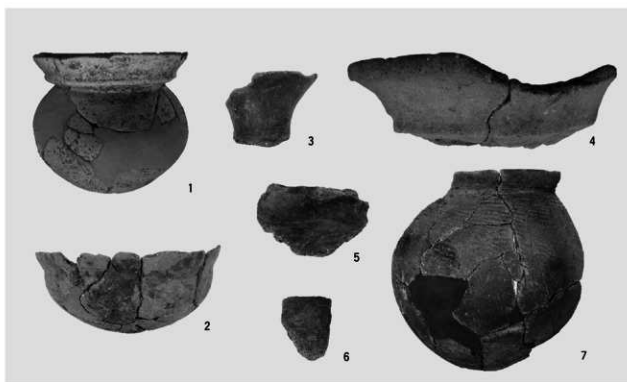
方形周溝墓3溝29出土土器1 (1/3, 38・39は1/2)





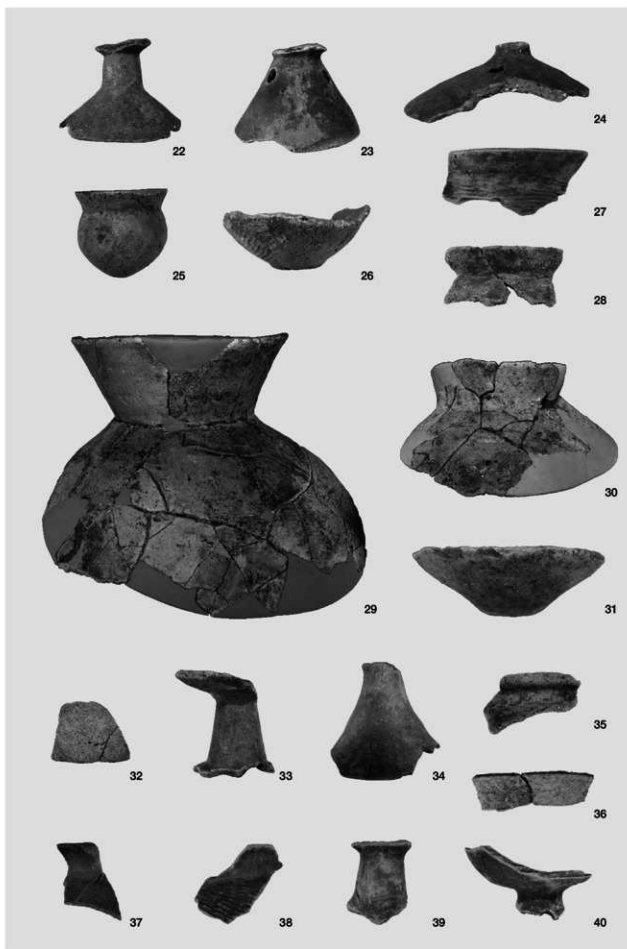


方形周溝墓3溝29出土土器4 (1/3)

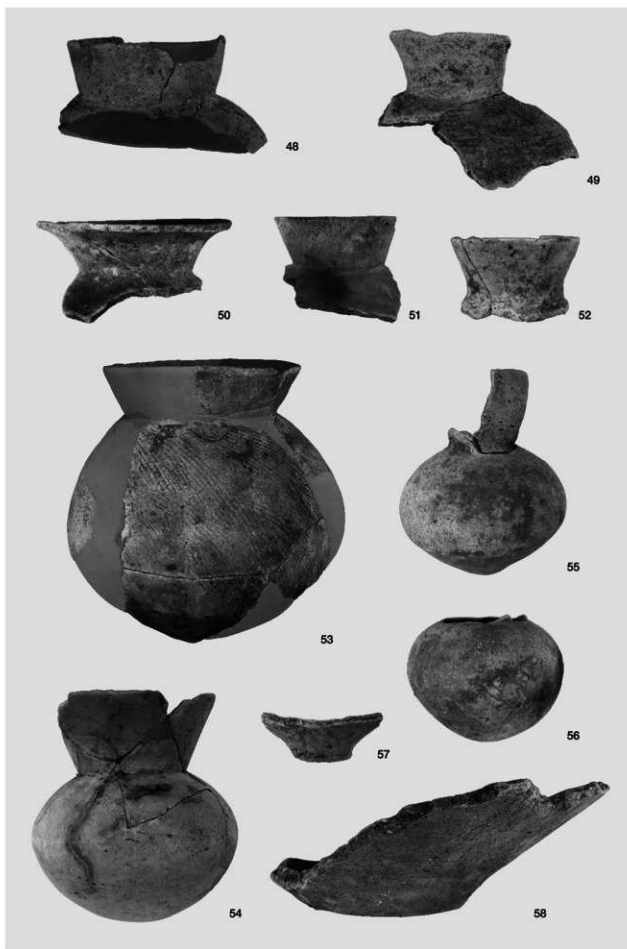


メクリ1号墳出土土器1 (1/3)

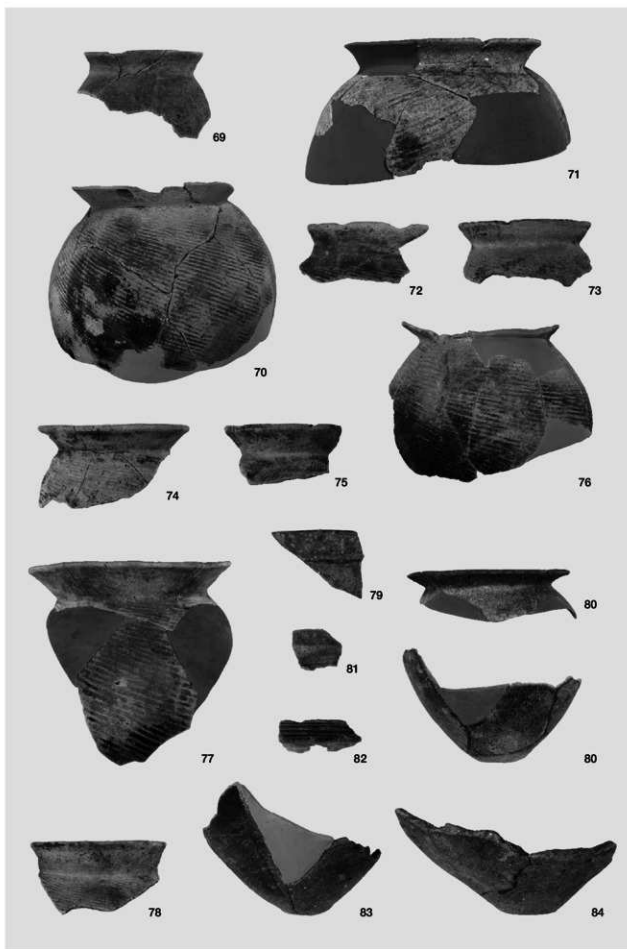




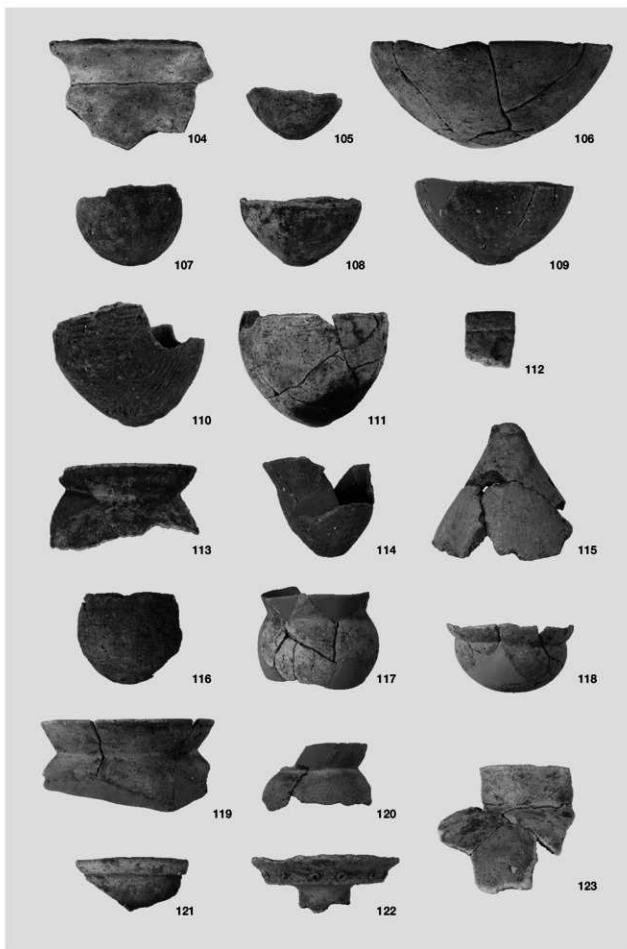


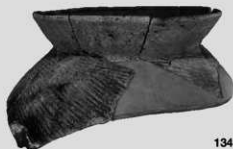
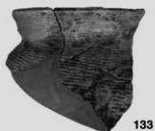
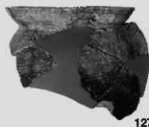


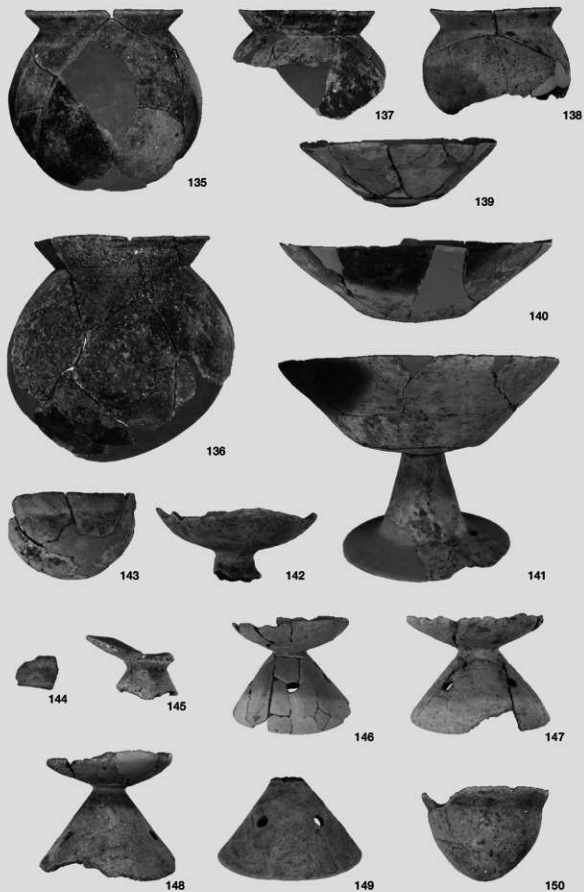


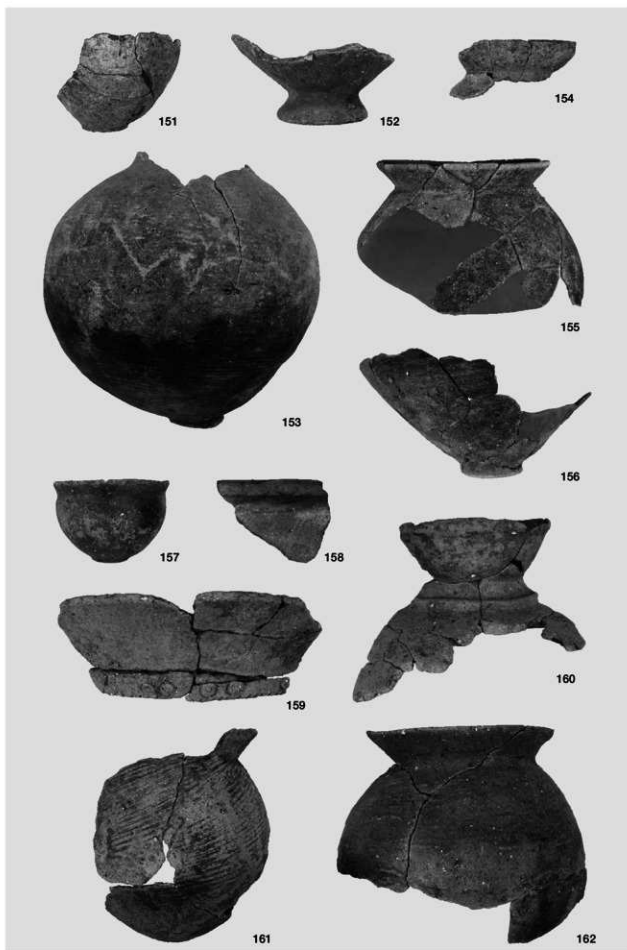


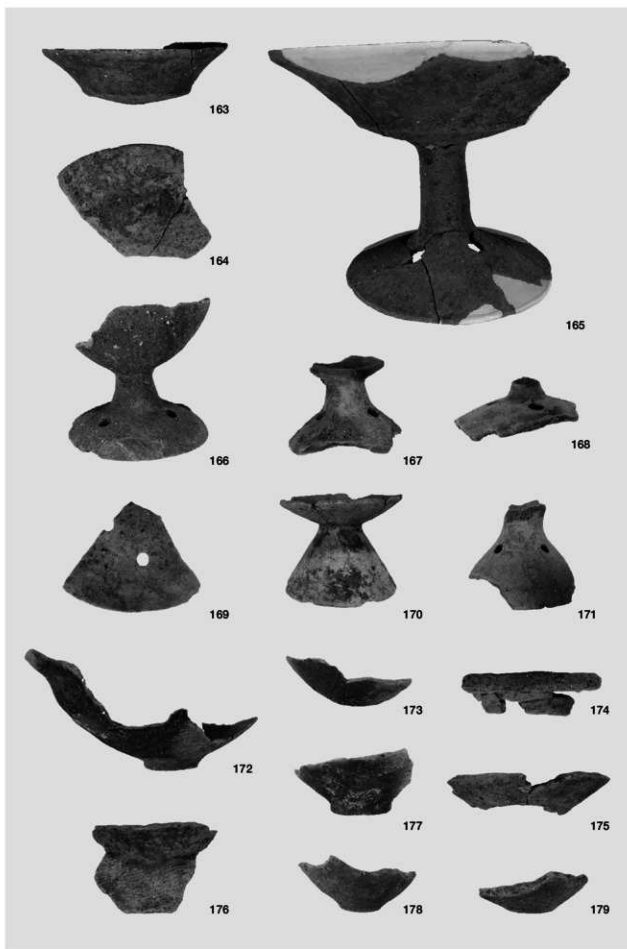






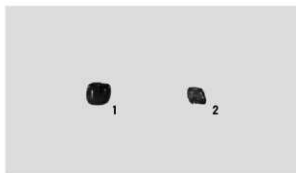








メクリ1号墳出土土器14 (1/3)



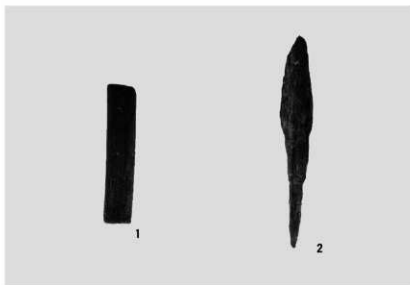
木棺墓3出土ガラス小玉 (1/1)



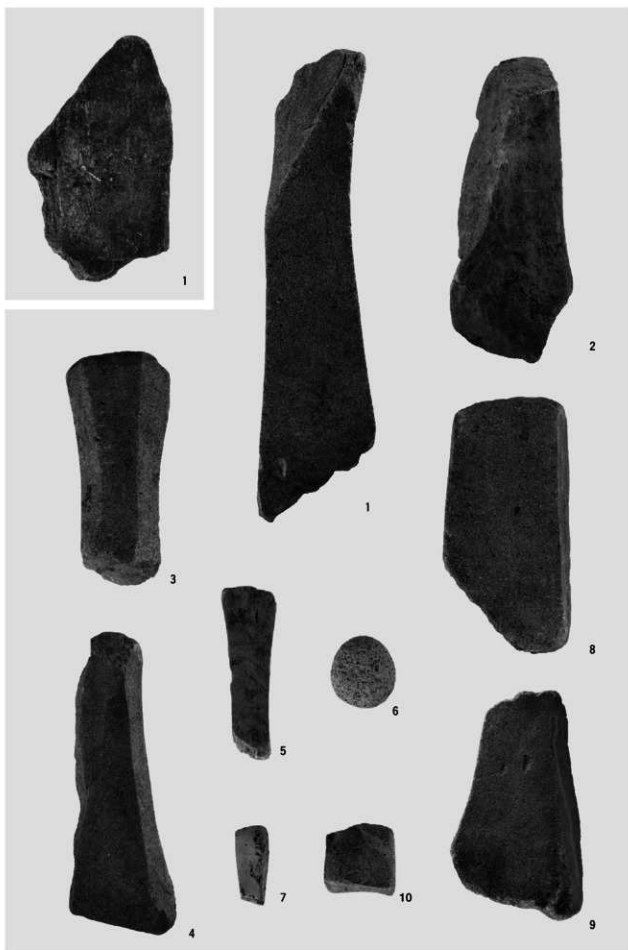
22J区包含層出土鏡形土製品 (1/1)



方形周溝墓3溝25出土木鏃 (1/1)



メクリ1号墳出土木製品 (1/1)



メクリ地区出土石製品（1／3）1 方形周溝墓3溝29 1～10メクリ1号墳

報告書抄録

ふりがな	まきむくいせきはくつちょうさほうこくしょ				
書名	纏向遺跡発掘調査報告書2				
副書名	メクリ地区における古墳時代前期墳墓群の調査				
巻次					
シリーズ名	桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書				
シリーズ番号	第32集				
著者名	橋本輝彦				
編集者	橋本輝彦・橋爪朝子				
編集機関	桜井市教育委員会文化財課				
所在地	〒633-0074 奈良県桜井市芝58-2 TEL0744-42-6005				
発行年月日	平成21年3月31日				
所収遺跡名	纏向遺跡				
所在地	奈良県桜井市大字辻24-1・2、25、26-1-3、27、28-1・2、29-1番地、太田101番地				
コード	市町村 292061				
遺跡番号	奈良県遺跡地図 11-D-486				
北緯	34° 32' 39"				
東経	135° 50' 25"				
調査機関	昭和54年7月20日～昭和54年9月13日 (第23次) 昭和55年7月21日～昭和56年3月31日 (第27次) 昭和57年1月25日～昭和57年3月31日 (第31次) 昭和57年6月29日～昭和57年7月20日 (第33次) 昭和61年5月7日～昭和61年12月25日 (第47次) 昭和61年10月?日～昭和62年6月1日 (第48次)				
調査面積	4,695㎡				
調査原因	纏向遺跡の範囲確認調査				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
纏向遺跡	集落	古墳時代	前方後方墳1 方形周溝墓3 木棺墓4 土器棺墓2	古式土師器・ 鏡形土製品・ 木鐵	纏向遺跡メクリ地区における調査のうち、古墳時代前期の墳墓群の調査報告。前方後方墳をはじめとする多様な墓制が確認され、ヤマト王権内部における階層性を示す資料として注目される。

桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第32集

奈良県桜井市

纏向遺跡発掘調査報告書 2

—メクリ地区における古墳時代前期墳墓群の調査—

発行 桜井市教育委員会
文化財課

〒633-0074 奈良県桜井市芝58番地の2

TEL 0744-42-6005

FAX 0744-42-1366

年月日 平成21年3月30日

印刷 株式会社明新社
〒630-8141 奈良市南京終町3-464

